
四季神

涅槃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四季神

【Nコード】

N3897U

【作者名】

涅槃

【あらすじ】

神様を信じない少女、銀葉シロハが実際に「四季神」と呼ばれる神の存在する世界へと迷い込む。

そこにいたのは護人モリビトと呼ばれる人を守る仕事をしている青年だった。そんな彼らの世界で生活することになった銀葉。はたして銀葉は元の世界に戻ることができるのか。

第一話 育ち

これから話すことは決して口外してはいけないよ。口外してしまったら四季神様に怒られてしまうからね――

ずっと昔に言われた言葉を、今になって思い出したのはなぜなのか解ろうとしなかったけれど夢で見たそれを言うその姿はどことなく鮮明にくっきりと印象に残らせた。

祖母は昔から神を信じて生きてきた。家が神社ということもあるのか、自分の両親までは完全に神を信じ、崇拝しているようだった。でも自分は違う。神などいやしない。神など信じてなるものか。ずっとそう思って生きていた。神がいるならなぜ悲しみは消えぬ？なぜ世に涙が消えぬ？何故世界から差別がなくならぬ？なぜ・・・人は死ぬ？

簡単だ。神などいないからだ。

自分の考えを述べた時、両親に嘆かれた。

「なんてことを言うの？！そんな事、二度と言ってはいけないよ。神に対する崇拝の心は絶対に失ってはいけないの」

母親に言われた。信じる要素のない神に対し、崇拝など出来る訳がない。

祖母が死んだのはつい最近のことだ。祖母の死によってただでさえ信じていなかった神がより信じられない存在になった事は違うことのない事実だ。祖母は好きだった。優しくて物事をはっきりと見ている。だから、いくら信じないと思う神のことであっても、祖母の話を聞くのはとても楽しかった。なのに・・・――

なぜ死んだ？

まだ生きていてほしかった。なのになぜ、祖母は死んでしまった？なぜ・・・なぜ神は祖母を殺した。違う。神が殺したんじゃない。人の生死を扱える神が存在しないから祖母は死んだ。それだけだ。

朝。いつものように髪を頭の上で二つに結んで家を出た。私服の高校に通っているから服装の自由を与えられているが、それがまた面倒だった。それでも、制服を仰々しく着ている連中を目にすると、私服の高校でよかったと思う。この世は何かしらの規制が多すぎる。神という存在が人間を管理し、人間を支配するから規制が厳しくなる。そんな概念、消えてしまえばいいのに。だから、規制感のない私服でよかった。

学校に着いて、いつものように勉強していつものように笑っているものように男子と論争して……。なんら変わり映えのない日常。それが、いつ何時、崩れるとも知らずに。

神社で育ったのに、神を信じていない子、銀葉。そんな銀葉が、学校から帰ってきた。今日はちょっとした用事があるから急いで帰ってきたようだった。神という存在を信じている訳ではないが、毎回、恒例行事として行われている行事だけに、参加しないわけに行かないし、何しろ銀葉に至ってはこの行事の主役だから。

巫女として、民衆の前に出て、神を祀る『儀式』をする。ここで祀る神とは『四季神』と呼ばれる、名の通り、四季を有する神だ。その神を祀るために、巫女となった銀葉が、春、夏、秋、冬の、四つに分かれた舞をし、神に捧げるというのが、毎月行われる恒例行事だ。そんなに言って回っているわけではないが、この行事に参加する者はたくさんいた。銀葉のクラスメートも、幾人かくる。大部分は、神を祀るために来るが、残る心のうちには、銀葉の舞を見たかという思いがあるらしい。

四季舞と呼ばれる神に捧げる舞。列記とした意味を成す。春は、『始まり』。夏は『訪れ』。秋は『慰み』。冬は『静まり』と、各象徴を意味した舞を披露する。銀葉にとって、夏の『訪れ』の舞は少し骨が折れるようだった。春に咲き誇った美しい花々が、乱れ咲き夏へ訪れを運ぶ。訪れを感じた夏は積乱雲のごとく高く上り詰め激しく、しかし、静かに舞い降りる。そして慰みの秋へと纏れ込み、

優雅に紅葉してゆく草木を舞い、最後に静かに地にひれ伏し再びの始まりを待ち今は眠りに着く。それが舞の流れ。夏の激しく上り詰めるときの舞が半端ない体力を消耗する。春夏秋冬、四つの舞のうち、二つ目で既に体力を消耗して、さらに残る二つを舞う。それは毎度やっていても疲れる。そのおかげか、体力には少し自信もあるし、身の動きの軽さならそんじょそこらの奴より断然上だ。

巫女服に着替えた銀葉は舞の踊りを披露する為に社の中に待機していた。舞に使うの是一本の柊。柊の枝を刀に置き換え舞うらしい。刀での舞いは昔から行われていたのだが、世間が変わるにつれて、神を祀るに相応しい柊の枝で行うように代わっていった。

舞が始まる時間になって、春の訪れを意味するかの如く、舞いながら社を出て民衆と、神に捧げてゆく。

第二話 移動

今回も無事に舞は終わり、さっさと着替えを済ませた。クラスメイトの中には巫女服を着られて羨ましいとか言う人物がいるが、銀葉にとっては忌々しいだけだった。信じぬ神に何を捧げればいい？なぜこんなことをしなければならない。銀葉はため息をつきながら社の中に入っていた。その中にある葛籠に巫女服をしまうためだ。巫女服をしまうと、さっさと社から出ようと、扉に手をかけようとした、その時だった。

《それで神を祀る？》

「え?!」

唐突に聞こえた声に驚いて振り向いた。しかし、そこには誰の姿も見当たらない。あたりを軽く探ってみても、人などどこにもいない。

《何れか、時が来たればお前を元の世界に戻そう》

声がそう言った。その意味を理解できぬまま、銀葉は目の前に巨大な手のようなものが出現したことに驚いていた。その手につかまり得体の知れぬ穴へと吸い込まれた。その手のようなものは体に纏わり付いて離れようとしない。あたりは真っ暗だった。真っ暗な中をものすごい勢いで運ばれてゆく。そして、ふっと光が差した。美しく冴え渡る青い空。それに見とれている間に、体を拘束していたものが離れた。

「離れた・・・?」

そう思ったのもつかの間だった。ふと気づけば、自分は地面にいない。空に浮いている。落ちる。

「ぎゃあああああああ!!!!!!」

銀葉はまっさかさまに転落していった。

仕事の関係で深い森の中を歩き進んでいた。ふと、妙な気配を感じて、そちらに足を運んだが、そこに着いた時にはすでにその気配

は絶たれていた。気のせいだったのかと、思い引き返そうと思った。その刹那。頭上から、凄まじい声が鳴り響いた。

「きゃあああああ！！！！」

「？」

見上げると、一人の人間が落ちてくる。

「え?!」

慌ててその人間を捉えようと構えるが、気づくのが遅かったのか、落ちてくるのが早かったのか、体制が整わないうちに人間が落下してきてしまったせいで、一応抱えることは出来だが、思いっきり転倒した。

第三話 出会い

「いったあい!!」

銀葉は声を上げた。何かがクッションになってたいした怪我はしないですんだようだから、一安心だと、思っていた時、声がした。

「痛っ・・・」

「ん？」

ふと見ると、自分は、誰かの上にのっかている事に気が付いた。

「イテテ・・・」

倒れた拍子に打ったらしく、頭を抱えてその人物は体を起こした。体を起こした青年は、前髪がだらりと長く、顔が隠れてよく見えなかった。茶色の綺麗な髪だという事はわかった。銀葉は硬直したまま目の前の人物を観察した。

「いたた・・・。大丈夫か？」

青年は、ふっと、前髪を左の耳に掛けた。

「~~~~!!」

だらりと長かった前髪を左のほうに掻き分けただけで随分と印象を変えた。

（カッコいいかも・・・）

ほんのりそんなことも思った。

「・・・。大丈夫・・・夫か？」

そんな彼の声ではっと我に返って慌てて青年から身を引いた。そこではじめて気づいた。この青年、変な服装をしていると。和服、と言えば全て説明が付く、そんな格好をしていた。

「怪我とか、してないか？」

青年の問いかけにやっと気が付いて、大丈夫だと、返事を返した。

青年は安心した表情をして立ち上がった。

「所で・・・どこから落ちてきた・・・？」

青年の問いかけにやっと今の状況を考えた。自分は社にいたはずだ

と銀葉は思い返した。しかし、変な声が聞こえてきて気が付いたら空にいて。この青年に受け止められた。そんな摩訶不思議な事をこの青年が信じてくれるだろうか？

「いや・・・その・・・社にいて・・・」

「社?!」

急に青年が声を上げたので驚いて固まった。

「あ・・・すみません。貴女、巫女様？」

「え・・・？巫女・・・サマ!? いやいや、巫女はやっているけど、そんなサマなんて・・・」 「巫女様?! 本当に?!」

「え・・・あ・・・え・・・?」

混乱する銀葉。この青年が一体なぜそれでこんなにも取り乱しているのか解らなかった。とにかく、ここは・・・。

「ち、違いかも! わ、私のは・・・巫女様じゃなくて・・・なんだろう・・・?とにかくその・・・違うもの」

「・・・? でも、社って・・・」

「えと、く、倉よ、倉!」

「倉・・・? そう」

青年は小さく息をついた。どこか銀葉を観察しているようにも思えた。

「あ、とにかく、助けてくれてありがとう」

「いや、別に」

銀葉は青年を観察し返した。それに少し戸惑っているようにも見えたが、気にせず続けた。

「・・・えと。名前はなんていうの?」

「ソーキ。双方に輝くで双輝」

「へえ。カッコいい名前だね」

「そう・・・? ありがとう」

いまどき、こんなにも素直にありがとうと言う男がいるとは、と内心想ったが、その潔さがいいかとも、思っていた。

「貴女は?」

「・・・。シロハ」

少し不貞腐れて答えた。あまり好きじゃなかった。その名を教える
と、みな笑った。銀に葉。それでシロハなど。嘲笑うような反応を
今まで見てきた。

「字は？」

「銀の・・・葉で、銀葉」

「銀の葉？」

双輝は確認のためかそう聞いてきた。銀葉は小さく頷いた。

「いい名前だね」

「え？」

「銀の葉か。さぞ、美しいだろうな。それに見合って、貴女も？」

「え・・・？」

顔が赤面するのを感じた銀葉は顔を落とした。双輝の言った意味を
どう理解したらしいのだろうか？

「あ・・・すみません・・・。変なこと・・・言った？」

焦った様な双輝の言葉に慌てて顔を上げると、本当に心配した表情
でうかがってくる。目を反らしながら大丈夫と答えると、しばらく
間が空いた。

「・・・。貴女は・・・本当にこの世界の人間？」

自分でも疑問に思っていた核心を突かれドキッとした銀葉だが双輝
を見て、なんとなく、全て話してみようと思うことにした。

「私、東京から来たんだけど・・・ここは違うよね？こんな木々、
いっぱいないし・・・」

「とうきょう・・・？知らない。違うと思う」

「知らない？」

「知らない」

ああ、やっぱり自分はどこか異世界に来てしまったと、なんとなく
確信したような気がした。

「・・・やっぱり貴女は、何か違うようだ。一度。巫女様に見ても
らったほうがいいな。今ちょうど、俺の村に巫女様が来ているから、

見てもらうといい」

「みこさま・・・？」

「知らないのか？」

「たぶん」

「そうか。説明、する？」

「うん」

「巫女様は、神に通ずる力を持ち、この世で唯一神との会話を日夜許された女性たちの事

。だから・・・」

「ああ、私、神とかそういうの、信じないタイプで・・・」

「え？」

双輝が驚いた表情をしたことに、驚いた。

「神を、信じない？ え？何を・・・？！」

「何って、信じないものは信じないのよ！」

「神は、信じる、信じないの物ではない。存在しているのだから」

「はあ！？」

「俺も、一度だけ、会った事がある」

「・・・え?!」

双輝の発言は銀葉を混乱へと導いた。動揺している銀葉を見かねてか、とりあえず、村まで来たほうがいいと、双輝が声を掛け、それに従うことにした。

第四話 感情

「ねえ……この森、どのくらい長いの……？」

一体どのくらい歩いたか解らなくなるほど歩いてきた。体力に自信がある銀葉ですら息を切らして疲労の色を隠せずにいる。しかし、双輝は何事もないかのようにスタスタ歩いていく。そこいらの男なんかより断然体力の自信があった銀葉にとって少しショックなことだった。

「まだ……、だけど」

ショックを受けたが、まあ、同じように鍛えているのなら男の双輝のほうが体力があってもおかしくないと納得して歩く。そして、双輝のまだという言葉に失望する。体力が限界だ。

「だめ……。もう歩けない……。」「

ブーツだった為もあって、長く歩くと足に負担があった。中学のときに山登りをして、友達をかばって足をくじいたときのことを思い出した。あのときの男共の反応は今でも腹が立った。

「えー怪我って。がんばって歩けよお」

「本当に痛い……。手を貸してよ」

「やだよ。自分で精一杯だから」

挫いた銀葉に手さえも貸してくれなかった男子。腹立つ、腹立つ。

「大丈夫か……。？」

「そうやって心配はしてくるんだけどねえ」。

「手え、貸してよ。この靴、森とか山道歩くのに向いている靴じゃないんだもん」

どうせ断れると思いながらも愚痴半分でそう言った。双輝からの返事がない。地面ばかりを見つめていた銀葉は小さくため息をついた。

「手……。？」

やっと双輝が声を発した。

「そう。ちょっと、足が痛いから」

「痛い？ 歩けるのか？」

「だから、手を貸してって言っているんだよ」

近くにあった石に座りながら銀葉はそう言った。双輝が動いたのが足音で解った。何をするつもりなんだろう。

「え……？」

地面を見つめていた銀葉の目にも移るくらいの位置に、双輝の背中が見えた。

「足、痛いんだろう？ なら、おぶるよ。乗りな」

双輝は首だけを銀葉に向けて嫌の欠片も無く言っていた。

「え……？ お、おんぶ……？ い、いいの……？ だって、私……重いかも……」

「平気だよ。さっき落ちてきたときに軽く抱えたし。そんなに重くないともうから」

純粹とは、こう言う表情のことを言うのだろうか。

「どうして……？」

「え？」

「どうして、そうしてくれるの？」

「……？ 女性に対して、労わるのは普通だろう？」

「え？」

「……貴女のところでは違うのか？ 俺のところでは女性とは大切にしろと、教えられてきているから。女性の願いは極力受け入れるのが最低限の礼儀だと」

世界が違ふとここまで礼儀作法が変わるのか？ 女性の待遇がものすごく良い。

「そうなの……？ 私のところは、男も女もほとんど一緒。どちらかと言えば、男のほうが偉ぶっているけど……」

「そうなのか？ 酷いな」

「どうして、そんなに女性を？」

「……説明はするから、先に進もう。日が暮れちゃう。乗るか？」

「・・・いいの？」

「もちろん」

「じゃあ・・・遠慮なく」

銀葉は双輝の背にその身を預けた。双輝はひょいと立ち上がると歩き始めた。

「おmoi・・・？」

「ん？全然。むしろ軽いと思うよ」

「やあ！お世辞を言って！」

「世辞・・・？そんなつもりは無いんだけど・・・」

「・・・本気？」

「ん？んゝ、そうだよ」

力持ちなのか。それとも、本当に軽い？そんなわけ。銀葉は一人で疑問を抱き、一人で解決へ導いていた。

第五話 待遇

「で・・・？女性の待遇がいいのはどうして？」

「ああ、そうだったな。女性とは、巫女様になる確立があるし、子を成してくれるのも女性だ。それにか弱く、儂い。なら、大切にしてお当然だとは思わないか？」

「・・・思・・・う・・・の、かな？」

「ふーん。世界観が違うからそうでもないのか。でも、俺たちの所では女性はすぐく大切に扱われているよ」

「へえ」

双輝は軽々足早に森を駆けていく。そして、ふと、止まった。目の前は崖だった。下のほうに『村』があった。街じゃなくて・・・村。なるほど。

「あそこが俺の村だ。ここの崖を降りたほうが早いんだけど、いいかな？」

「うん。・・・え？」

「ん？降りるんだよ。少し衝撃があるかもしれないけど極力無いようにするけど、もし嫌ならいいけど」

「降りるって・・・この崖を？」

「ああ。問題あるか？」

「うん、ものすごく」

「・・・そうか？これくらいは飛べると思うが」

「・・・という足しているの・・・？」

「多少は鍛えているからな。護衛とかもしないといけないから」

「護衛？」

双輝が言うには、この世界の巫女様は本当に尊敬に値する存在で、どんなものよりも、巫女様を大切にすらしい。己の命をも、巫女に捧げるという。そして、そんな巫女が、移動する間は、護衛をすらしい。

「大変ね」

「まあ、巫女様の護衛を出来るのは名誉なことだから、辛いとは思わないな」

「ふーん」

「たくましいなと、思う。で。」

「降りるの？」

「出来れば。遠回りはしたくないからな」

「・・・大丈夫なの？」

「もちろん。少しの衝撃で・・・」

「違う。貴方が」

「・・・俺が？ 俺の心配？」

「・・・そうでしょう！？」

「へえ。ありがとう。でも、大丈夫。これくらいならどうって事ないから」

双輝は自分が心配されたことにとても驚いている様子だったけど、一体なぜ？ここでは、女性の待遇が異常なまでに良い。だから、男である双輝を女性が心配することなんて無いのだろうか。

「じゃ、降りるぜ」

「あっ・・・う？！」

ガウンと、宙に浮く感覚をまた味わった。あまり好きじゃないこの感覚。バンジーをしたがる人の気持ちが知れない。ドン、と着地した双輝は何事も無かったようにまた歩き始めた。

「大丈夫なの？」

「ん？全然。貴女は？」

「・・・銀葉。さっきそう言った」

「そうだったね。すみません。銀葉、さん？」

「銀葉でいい」

「そう。じゃあ、銀葉。 銀葉は大丈夫？」

「・・・うん、平気」

双輝はにっこりと笑うと、頭を前に戻した。しかし、さっきの衝撃

で耳に掛けていた髪がぼさりと前にたれてそれをウザったそうに時々頭を振って前からどかしていた。

「?!」

自然と手が出ていた。双輝の前髪を左の耳に掛けてやる。その行為に双輝は首だけを銀葉に向けて目を見開いていた。

「いや・・・邪魔そうだったから」

「そうか」

「切らないの？」

「ああ。少しだけ、意味があってね」

「ふーん。意味って？」

「それは・・・あまり言いたくないな」

「そう。じゃあ、聞かないでおく」

「ありがとう」

双輝が礼を言うと何か照れる。男がこんなにも簡単に礼を言うことに違和感があるからだろうか。

第六話 神

村の入り口まで来た所で、双輝は銀葉を降ろした。そして、そのまま村の中まで入っていった。双輝が中に入ると子供が数人駆け寄って来た。

「そうにいい！そうにいい！かえってきた！」

子供たちは雄たけびを上げて周りに集まってきた。双輝もそれに合わせて腰を下ろして子供たちと目線の高さを合わせてから会話を始めていた。

「そうにいい、たいへんだよ！ユーが、なくて、なくて、なきやまないんだ！どうしたらいいかな？」

「わかった。今行くよ」

双輝は立ち上がると、銀葉に向かって笑みを投げた。

「悪いけど、何かあったみたいだからちょっと、いいかな？」

銀葉は頷く。双輝は騒いでいた男の子に着いていく。その場に立っているのもなんだか不安な感じがあった銀葉はその後を追った。

着いたのは小さな小屋のような所だった。双輝は男の子の後を追って、中に入った。銀葉も続く。

「ひっく、ひっく」

中に、泣いている女の子がいた。

「ユー。どうした？」

「ひっく。そ、そうにいい……」

顔をゆがませながら双輝に飛びついた。女の子は双輝の腕の中でしばらくしゃくり声をあげた。

「どうした……？何があった？」

「き、キーが、しんじやった……」

「……そうか。今、どこにいる？」

「そのカゴのなかにいる。うごかせない。こわくてさわれないんだもん」

銀葉はカゴを探して目にした。中には息絶えた小鳥がいた。紛れもない生物の死に、少女は嘆いた。

「いいか、ユー。生き物って言うのは、いつか必ず死んでしまうんだ。でも、その死んでしまうことを受け入れて、しっかりとキーを見てあげな。そうしたら、きつと、キーも喜ぶ。そして、そのまま四季神様が天国へ連れて行ってくれるよ」

「ほんとう・・・？」

「もちろん」

双輝の笑みで、女の子は歪んだ笑みを見せて、カゴを双輝の前に持ってきた。

「どうすればいい？」

「供養してあげよう。外に出て、お墓を作ろう」

ユーの肩をしっかりと掴んだまま双輝は立ち上がると、一緒に外に出て、ユーの希望でその小屋の横にキーの墓を作ることになった。墓を作り終わると、双輝はその前で手を合わせた。そして、顔を上げて子供たちに声を掛けた。

「さ、コレで大丈夫。後は、ちゃんと、天国にいけるように祈るんだよ」

「はい」

双輝は立ち上がって、子供たちが手を合わせている様子を少し下がつて見ていた。銀葉に一度、目を向けたが静かに微笑み、子供たちに戻した。銀葉は、軽く目を閉じ、その死を重んじた。そして、ふと、双輝の口から耳にした事のある単語を聴いたような気がして双輝をガン見した。

「何か・・・？」

その視線に気づいた双輝が少し身を引いてたずねた。

第七話 巫女

「さっき、なんていった？」

「え？」

「四季神、って言った？」

「・・・言っただけ。何か？」

「そう。なんでもない」

「この世界、どこか違うところであることに間違いないが、四季神を信じていることは変わらないんだと、思った。いや、信じているなんて、そういう問題でもないのかも知れない。双輝は『会った事がある』といっていたから。」

「さて。じゃあ、巫女様に会いに行こうか。少し見てもらったほうがいい」

「うん」

銀葉は双輝の後に続いて、今度はそこそ立派な造りの家の前に来た。扉の前に男が二人立っていた。

「すまない。彼女を少し見てもらいたいのだが、かまわないだろうか？」

「・・・アナタなら、イイでしょう」

一人の男がそういうと、扉を開けた。中は広々としていて、その中心に不思議な格好をした髪の長い女性が端座していた。簾がかかっているせいで顔まではわからなかったが、何か独特な感じがした。

「あれが、巫女・・・？」

「巫女様な、巫女様。敬称はつけよう」

「はい」

双輝に指摘されてとりあえずそうするべきだと察した。

「巫女様。恐れ入りながらお聞きしたく、参りました。構いませぬでしょうか？」

双輝の態度が明らかに変わった。格好良く、礼儀正しく座る双輝の

真似をして必死でよく座ろうとする銀葉だった。

「構いません。話してみてください」

あれ、意外に礼儀正しい答えが返ってきた。偉ぶった口調を想像していたため、どうにも不思議な感じがした。

「そこに居る女性、名を銀葉と申します。どうにも、この世界の住人とは思えないのです。是非とも、貴女様の御力で、見通して頂きたく」

「解りました。やってみましょう。少し時間がかかります。ので、時間が経ちましたらまたお出向き下さい」

「畏まりました」

双輝は一度深々と頭を下げるとさっと立ち上がり、銀葉つれてその家を出た。

「巫女様って、あーいう感じなの？すごい上品」

「全員がそうとは限らない。中にはあまり・・・その・・・アレだ。その、あの・・・」

「・・・うん。いいよ。わかったから」

「すまん」

「いえ」

双輝は少し焦っているようだった。巫女は絶対の忠誠を約束した存在。決して悪口など、言ってはならない。

「で？私はどうしたらいいかな？」

「うん・・・。嫌じゃないというなら、巫女様の祈りが終わるまでは俺の家にいるか？」

「え・・・あ・・・うん。お邪魔させてもらう」

「変なのが居るが、気にしないでな」

「う、うん・・・」

変の。少し気になるが、まあ、問題は無いだろう。

第八話 紹介

双輝の家は落ち着きのある家だった。中に入ると、銀葉は言葉を失った。部屋が汚いとか、狭い、広いとか、そういうのじゃなくて、一人の黒髪の女性のせいだ。

「お帰り、双輝」

「ただいま」

その女性は女とは思えない座り方で、おまけに着ている服が必要最低限、隠すところは隠そう、といった感じになっていた。男性と二人で生活するには少し大胆すぎるような……。

「おかえりー！双輝！」

奥の部屋から一人の子供のような女の子が出てきた。

「子供か！？」

一瞬、そんな風に思ったが、父親であろう、双輝の名を呼び捨てで呼ぶことはまず無いだろう。

「んだ？帰ってきたのか？ あれ？その人は？巫女様か？」

奥から、また一人出てきた。今度は男だった。やわらかいイメージを感じる人だった。

「いや、巫女様じゃ、ないと・・・思う」

「思いかよ。なんだよ、その自信のなさ」

「少し特別な人なんだよ」

「ふーん」

「紹介するから、全員集合」

双輝がそういうと、奥からまた一人出てきた。今度は物静かな雰囲気はどこか凍てつく感覚になる男だった。

「さて。こちらは、先ほど森で上から落ちてきた銀葉。どうにも、この世界の人間じゃないようだ」

「あれま」

黒髪の女性が言う。柔らかいイメージの男性は何か不思議なものを見

るように観察していた。

「で、今度は銀葉に紹介」

双輝は一番近くに座っている、柔らかいイメージの男性の頭に手を乗せて言う。

「まずはこいつから。こいつの名はガスィ。『芽吹』と書いてガスィ」

「よろしく！」

「よ、よろしく……」

「で、そのが、ヒコウ。『陽光』と書く」

黒髪の大膽そうな女性を見て言う。

「ちわっす」

「どうも……」

「で、その子供っぽいのが『紅葉』と書いてクレハ。最後に、その静かな奴が『吹雪』と書いてスイセツ。大体いいかな？」

「テキトーだなあ」

ヒコウが言う。

「いや、まあ、とりあえず、ここの世界の人間じゃないみたいだから、このくらいの紹介で抑えておく」

「このくらいの紹介？」

「本当はもう少し言わないといけないことがあるんだけど、ソレは巫女様の判定が出次第、決める」

「そう……」

ガスィと呼ばれた柔らかい感じのする青年が、双輝の前まで来て、耳打ちをしていた。銀葉は自分のことを言われているのか、警戒した。

「いや、今日は……仕事放棄した」

「なあ!？」

双輝の返答から、銀葉は自分のことじゃないと思い、安心する。

「仕事？」

「いや、なんでもないよ。気にしな」

「双輝！」

「銀葉はまだこの世界のことをちゃんとわかっていない。俺の仕事だって、おそらく理解は仕切れないと思う。だから、巫女様の返答しだいで全て決めるんだよ」

「……」

「あの……」

「ん？」

「皆さんは、どういった関係なのでしょう……？」

「それも、巫女様のところから帰ってきてから話そう」

「はい……」

巫女。神に通ずる力を有する女性。だからか、とても敬っているようだった。一体……何なんだろうか、この世界は。

第九話 結果

日が落ちるころ、双輝は巫女のところへ行こうと言った。銀葉は頷き双輝に従った。

巫女のいる社に着き、中に入ると巫女が美声で応え始めた。

「その者は確かにここに在るべき人ではないようです。四季神様はこの場に留まり、護人と共に生活をし、片時も離れてはなるまいと。四季神様もそのお方の存在は不思議に御思いのようです」

双輝はそれを受け止め、それ以上は巫女も話が無かったようで立ち上がった。だが、銀葉は固まって動けなかった。崇められている神様ですら自分を元居た世界に帰すことは出来ない？銀葉は顔を伏せた。立ち上がっていた双輝が、銀葉に一言声を掛けた。銀葉はそれに従い、立ち上がった。そして、社を出た。

「・・・私は・・・」

「落ち着いて考えれば、きっと答えも見つかるさ」
「・・・」

双輝の家までそれから喋らなかった。

家について、中に入ると。

「あっ！こら、ヒコウ！何を・・・！」

双輝の声が少し大きめになっていた。ふと、顔を上げると、ヒコウがガスイを足で踏みつけていた。

「なんだよ。こいつが文句ばかり言うから少し絞めて・・・」

「ヒコウ・・・。ガスイも・・・。いつものことだが、あまり挑発するな・・・？」

「し、仕方・・・ねえじゃん・・・」

「ふう・・・」

「なあ、双輝。お願いがあるんだけど？」

ヒコウはガスイの襟首を掴んで言おうとしたが、双輝が言い切る前に言葉を切った。

「却下」

「えー！いいだろう?!」

ヒコウの男っぽい口調で双輝に願ひ下がる。

「だめだ。今は特にそんなことをしている場合じゃない。銀葉について巫女様から結果が出た。その話し合いもするから」

双輝はそう言つて、奥から座布団を持ってきて、銀葉に勧めた。

「ありがとう・・・」

銀葉は気になって、気になって仕方なかった。双輝はここに来る前に、説明をしてくれた。女性に対しては大抵の願ひは利くのが礼儀だと。しかし、この、ヒコウという女性に対しては、決してそういう態度を見せない。

「双輝・・・」

「何？」

「女性って、この世界じゃ、特別、なんだよね？」

「？　そうだけど」

「どうして、ヒコウは特別じゃないの？普通に接しているけど」

「うん。それも今から説明するから。はい、全員、集合！」

双輝のその声で、ヒコウとガスイのバトルから逃れるために別の部屋に居たクレハとスイセツが戻ってきた。

第十話 正体

双輝のその声で、ヒコウとガスイのバトルから逃れるために別の部屋に居たクレハとスイセツが戻ってきた。

双輝は皆に、銀葉のことについて巫女から聞いたことを話した。それを頷きながら聞いていた。

「ってことは何か？しばらくは護人と共に生活するのか？」

ガスイが言った。

「そういうことだろう？」

ヒコウが言う。スイセツは何かを考えているようだったけれど、クレハにいたっては話にあまりついてきていない様子だった。

「とにかく、私はその『護人』という人と一緒にいなきゃいけないわけでしょう・・・？それって、どこにいるの？」

銀葉が聞いた。すると、双輝以外の全員が動いた。

「それ」

異口同音の言葉で、みんなが見ているのは双輝だった。

「え？！双輝が護人？　ってか、護人って何？」

「あなた、そんなことも知らないの？！」

クレハが驚いたように言った。双輝がそれを否定していた。

「仕方ないことだ。この世界の人間じゃないんだ。もっと、別の次元から来ているんだよ。四季神様が連れてこられたんだよ。だから、このことを知らなくて当然なんだ」

「なるほどお」

クレハは納得したように高揚を抑えた。

「で・・・？双輝が護人で・・・護人って・・・？」

「護人とは、巫女様の護衛をする刀を持った人間のことだ」

「刀・・・？　えと・・・双輝のどこに刀があるの？」

「そこらへんにたくさん」

「え？」

「ま、紹介するから」

双輝は立ち上がると、銀葉の前まで移動した。そして、銀葉に向き直ると軽く一呼吸おいてから銀葉と目を合わせた。

「じゃ、見せるから」

双輝はそういつて右手を横に出した。

「春。暖の始まり。芽吹」

その掛け声で座っていたガスイが一瞬、光に包まれてその場から消えた。その代わり、双輝の右手に少々変わった刀が握られていた。

「コレが、ガスイ。逆刃刀だよ」

銀葉は今、起きた状況を飲み込めなくて呆然としていた。何があったこうなった？ どうやったらそうなる？ 何の手品？！

「がががが、ガスイ……は……？！」

「次ぎいくぞ」

問答無用で双輝は刀になったガスイを左の腰に差すと、右手を今度は前に出した。

「夏。暑の訪れ。陽光」

すると、今度ヒコウが光に包まれ、消えた。そして……。

「ヒコウだ。有無を言わさぬ諸刃の刀」

カシャン、と双輝はその諸刃刀を鳴らした。そして、今度は右の腰にそれを差した。それから両手を横に出して言う。

「秋。涼の慰み。紅葉」

クレハはその場から消えると双輝の手の中に二本の摩訶不思議な形をした刀となって現れた。

「双刀のクレハ。結構珍しいんだよ、一人で二つの刀になるのは」

双輝は説明をしながらその二本の刀を腰の後ろに差していた。

「最後な。冬。寒の静まり。吹雪」

長い槍のような矛にスイセツは変化した。

「防御が強いんだよね。スイセツの矛刀は」

矛刀を双輝は背負った。

「ま、コレが完全武装……って所かな。実際にはこんな風には武

装なんてしないけど。大抵はみんな人形で俺の傍にいるからさ」
双輝は一本、一本刀を抜いていき、みんなを人型に戻していった。
それを見ていた銀葉はただただ、呆然と見ていることしか出来なかった。不可思議な出来事を目の当たりにして。それでも、ここは自分の居た世界じゃない。何が起きてもおかしくは無いが……。

「つ、つまり……何？みんな双輝の刀……？」

「ああ、そういうことだ」

爽やかに双輝は笑って肯定した。少し下を向いた銀葉は何がなんだかわからない状況を必死で整理しようとした。

「じゃあ……ヒコウが刀だから……？」

「ん？ ああ、そうだよ。こいつは俺の武器だ。女性、という感覚は無いな」

「双輝はあたしの主だからね。むしろ、女性扱いをされたくは無いな」

ヒコウは笑いながらそういった。

「お前は、人間でも女じゃないんじゃないか？」

ガスイの一言にまた喧嘩が勃発しそうだったが、双輝がそれを抑えて何とか事を成した。

「そっか……。整理すると……。みんなは双輝の刀で、その刀を持っている双輝は護人で……。巫女様の護衛をする」

「まあ、そんなところだ。ここにいらした巫女様を次の村まで護衛したり、ここにいらっしゃる予定の巫女様をその村まで迎えに行ったりとな」

「ふーん……。忙しそうね……」

「そうでもないさ。巫女様の護衛をすることは本当に名誉なことだから」

「そう」

「長い説明してもしようがないよ！この世界の事は自然とその身をもって体感してもらうとして！ 双輝っ！お腹すいたよ！ご飯にして」

クレハが言う。双輝は仕方ないといった風で立ち上がった。

第十一話 存在

「ひとつ言い忘れていた。『妖怪』は知っているだろうか？」

双輝ははたと立ち止まると銀葉に尋ねた。銀葉は混乱する。

「え．．．?! 妖怪?! ハイ?!」

「知らないか。この世界じゃ妖怪がいる。それから守護するのも護人の役割だ」

「そうなんだ．．．。」

妖怪なんて、物語の中だけの話だと思っていたのに。こんな風に現実にいるなんて。いや、そもそも、この世界が現実かどうかすら銀葉には定まっていない。銀葉はその妖怪がどの様なものか何度も思考したが、はつきりとした輪郭を得ることは出来なかった。

「村も時々、襲われたりするらしいから気をつけな」

「らしい．．．?」

「この村は妖怪が襲ってこない」

「どうして?」

「さてね?」

そう言って双輝は部屋の奥へといってしまった。

「どうして妖怪が襲ってこないんだろう．．．?」

「あたし等は理由はわかってるんだけどねえ」

「え?!」

「双輝はな、父親の血を継いでかなり強い護人なんだよ」
ヒコウの後に続いてガスイが言った。

「私たちは『四季剣』と呼ばれているんだけどねっ。この持っている本数でその護人の力量が基本的には解っちゃうんだ」
クレハが説明をする。

「持っている本数．．．?じゃあ、双輝は4本って事? それ、少なくない?」

「何を言う? 我らを一本持つのは簡単に出来よう。2本目の四季

剣を持つことは人を二人分、片手で持ち上げるほどの力が必要とされる」

「えっ?!」

スイセツの説明に少し驚く。双輝は4本。つまりは、4人分を片手で?

「あくまで比喻だぞ、比喻。その辺わかってるな? 例え、本当に片手で2人分の重さを持てたとしても、四季剣が持てるわけじゃないぞ!」

ガスイが付け足す。頷きながら銀葉は聞く。

「3本目はすごいんだよ! 私たち、『秋』を持つことが出来る人っていうのはね、指一本で家の破壊が出来るくらいすごいんだぞ!」クレハが嬉しそうに言う。それを聞いて銀葉は硬直する事しか出来なかった。

「おい。銀葉? ガスイも言ったが、コレは比喻だぞ? 実際に出来ても意味無いんだからな?」

心配したヒコウが口を出した。機械のように縦に首を動かす銀葉。3本目でこんなにすごいのなら・・・4本目は?

「スイセツ系の『冬』を持つのはな、一発で、しかも一瞬で三山の破壊が出来るくらいの力量が必要って、所かな?」

「三つ!? あんたら、それいくらなんでもない!!」

「難しさをあらわす比喻だって言っているだろう!」

「あ・・・はい。そうですね」

そんなにすごいものにも関わらず、双輝はその四季剣、全てを持っている。相当すごいんだろう。

「で、双輝が凄い事は解っただろう? だからな、妖怪たちも怖がつてこの村を襲いやしないのさ」

「さて、それだけだろうかね」

「お? 双輝。うまそうなおい! 出来るの早かったな」

奥の部屋から出てきた双輝にガスイが言った。しかし、双輝はそれを否定した。

「まだだって。煮込まないと食えないから」

「あ。そうか……」

「それだけ……?」

銀葉は最初に双輝の言った言葉が気になって声を発した。双輝はそれに反応してどこか遠いところをしっかりとした目で見ながら言った。その目の先にはあの森があるのかもしれない。

「違うと思うんだよね、この村に妖怪が来ない理由は」

「ええ……? 違うのお? 双輝が怖いから襲ってこないんじゃないの?」

双輝の言葉をクレハが反論する。しかし、双輝は少しだけ間を空けてからふっと、言った。

「……森の中に、ひととき大きな妖力を持った奴がいる。それが指揮を執り、一気に攻めてくれば簡単にこの村も落ちると思うんだよね」

「感じるの……?」

護人とは、根本的に言うところと巫女を護るため、民を護るために存在する。それあって、巫女などを襲ってくる妖怪の存在を感知できるように特化してくるらしい。それが、双輝はひととき大きく、感知能力が普通より高いらしい。だから、森の中にいる最も強い妖怪の妖力なら簡単に探し当てられるという。

「凄い……。でも、あえて妖怪を退治しに行こうとは思わないんだ?」

「ああ。こちらに何の危害も加えていないのに、あえて向こうをひっぱたく必要は無いだろう?」

「うん」

双輝はどうやら人に優しいのではなく、全てのものに優しいのだと銀葉は判断した。

第十二話 襲い

食材が煮込み終わったらしく、双輝はさらにそれをよそって4人に手伝わせながら食事の支度を始めた。

「あ、あ・・・あの、私も手伝う・・・」

「いや、いいよ。座ってな」

「・・・私さ、これからしばらく双輝の家にお邪魔するわけだね？」

「四季神様曰くね」

「・・・だったら、何か手伝いたい。今日だけなら・・・そりゃあ・・・お客さんしているけど。でも、これからしばらくなわけだから、ただのお荷物は嫌だ！」

「・・・?! わかった。じゃあ、そのコップを並べてもらってもいいか？」

「うん！」

双輝は一瞬、動きを止めた。それから。

「少し出かけてくる。すぐに戻るから支度を進めておいて」

「はい」

そして双輝は家を出て行った。四季剣の皆様方と共に支度を進めていると少し気になったことがあったが、気にしないことにした。

がたん、といって双輝が戻ってきた。その音の正体は。

「椅子？」

「銀葉が来て、椅子の数が足りないだろう？　今までに人を招いたことなんて無かったからさ」

気になったことが解消された銀葉は双輝に礼と謝罪をした。

「礼は解るが、謝罪する必要はねえよ」

双輝はそういつて椅子をテーブルの前に置いた。コレで全員分の支度が終了。食べ始めることになった。

「おいしい！　こんなにおいしいの、初めて食べた！　双輝は料理が上

手いんだ!？」

「いや・・・そんな事無いさ。食材がいいから自然といい味が出るだけさ」

「謙遜してえ〜」

おいしい味にほほが落ちる、、とはまさにこのことだろう。みんなもおいしそうに食べているわけだから双輝はやはり料理が上手いんだ。

食事が終わって片づけをしていた時。

「ん・・・？」

「どうした？」

「・・・妖、怪・・・」

「・・・？双輝にしては自信なさそうだな？どうした」

「いや・・・。ともかく見てくる。ガスイ。付き添え」

「あいよ」

双輝はガスイを従えて外に出た。ヒコウが外に出ようとした銀葉をとめた。

「妖怪が出たときは双輝の許可が無い限り、ただの人間は外に出ないほうが身のためだ」

理解できるが納得できない。身の安全を護らねばならないのだから当然のことだが。でも妖怪を見てみたいという好奇心も引け劣らない。

村人が双輝の到着に気付き声を張り上げる。

「双輝！あそこに妖怪が！」

「・・・異国の妖怪か」

「え？」

「アレはこの森に住む妖怪じゃない」

村の者は双輝の言葉を聞いて少し疑問を感じたが、信頼する双輝がそう言うのだからそうなのだろう。

「ギャーーーー！！！」

雄たけびを上げてその鳥のような風体をした妖怪は空を舞っている。

村に凄まじい眼光を浴びせながら。

「コドモ！コドモ！コドモノニクハヤワラカイ！」

妖怪はそう叫びながら村に向かって急降下してきた。双輝はガスイを刀にしてその妖怪を見ていた。そして。

「ガスイ。春風」

静かにそれでいて強烈な一言が村に舞う。ガスイより繰り出された強烈な風に妖怪は巻き込まれ姿を消した。

「さすが双輝！ 双輝は本当に強いよな！」

安心した村の連中が双輝にそう言った。やわらかく笑った双輝は銀葉の待つ家まで戻った。

第十三話 闇

ガスイの春風に巻き込まれた妖怪は消えてなどいなかった。ただ、強烈な風によってもものすごい速さで地面に叩きつけられただけだった。

「クソ……。アノモリビト、イツタイナニモノダ?!」

「お前じゃ相手にならんな」

薄暗い森の奥から声が聞こえてきた。妖怪はその声を聞いて少しだけ身を震わせた。

「コノチノヨウカイカ?」

「答える義務は無い」

鋭い言葉が鳥の妖怪に発せられる。現れた妖怪はしかしその姿を目で確かに確認することは出来なかった。薄暗く、森の木々がその姿を影となって覆い隠してしまっているせいだ。

「お前の無能のせいで危うく面倒なことになるところだった。その報い、受ける」

姿をはっきりと捉えることの出来ないその妖怪は鳥の妖怪の頭を蹴飛ばし、地面に張った瞬間に、踏みつけた。

「あの村の護人が有能で助かった。いや、もっとも。有能だから今があるんだろうがなあ」

妖怪はどこか遠くを見ながらそう言っていたが、踏みつけられている妖怪の耳にその言葉が入るわけが無かった。

異国の妖怪がこの近辺をうろついたことを聞いて四季剣の3人は驚いていた。銀葉にとってそれがどういことなのかいまちよく解らなかった。

「根本、妖怪って言うのは住処を変える生き物ではないんだよ。根付いたらそこに留まる。だから異国の妖怪がここまで来ることはあまり無いんだ」

つまり、珍しいことが起こった、ということらしい。かと言って、

そんなに気にするようなことではないらしいから、放って置いても問題ないだろう。

双輝が外に出てガスイを相手に剣術の稽古を始めていた。双輝がヒコウを持ち、ガスイがスイセツを持つ。その様子を見て自分の居た学校の様子が目に浮かんできた銀葉。自分の部活でも、こんなことをしていたような。

「いったっ！　ちよっと、タンマ、双輝！」

人型に成ったヒコウが双輝にタンマを掛けた。

「テメ、ガスイ！！　あたしの急所、わざと突いただろう！　痛かったぞ！」

「しらねえよ！　双輝とのやり取りで必死なんだから！　双輝は強いんだぞ！　俺でもきついんだよ！」

「喧嘩はしない。ヒコウ、それは俺のミスだ。悪かった」

「いや……。双輝が謝るとどうにも……………」

「何だ？」

「なんでもない！　続き」

ヒコウは四季剣の格好に戻った。銀葉は、思った。この四季剣という存在は、確かに見た目こそ人間だが、列記とした刀であって双輝を一人の人間ではなく、護人として、主としてみているのだと、なんとなくわかった。

第十四話 強さ

クレハが参加しないのは、なぜか問うてみた。すると、クレハはニコニコしながら答えた。

「私って双刀でしょ？だからやるのに、歩が合わないみたいなあ？」なるほど、と思いながら双輝たちに目を移した。カキン、カキンと、金属音のぶつかり合う音。澄み切った美しくも繊細でそれでいて苛烈な音。その音を響かせ、双輝は一体今までにどれほどの数を斬ってきたのだろう。

「双輝は、今までに一度も妖怪を斬ってはいない」

稽古が終わったみんなにそれとなく尋ねてみると一番近くに居たあまり喋らないスイセツが答えてくれた。

「え？でも、そんなんで、どうやって妖怪たちが強いと判断したの？！」

「脅しだよ」

双輝が答えた。

「護人が持つ特有の圧倒力に押し負けて弱い妖怪はこの村を襲ってこない。ただ、強い妖怪は本当に強いからな。なぜ襲ってこないのか不思議なくらいだ」

剣の手入れをしながら、双輝は言っていた。剣の手入れといっても、銀葉にとってはマッサージにしか見えなかった。

「あゝゝゝ！！！！そこそこ！！！！そこが気持ちいゝゝ！！！！」

「はあ。お前なあ」

双輝の気持ち的には、剣に戻してから手入れをしたほうが楽と言う。しかし、剣の側かすると、人間の格好している状態での手入れのほうが気持ちいらしい。仕方なく、人間の格好して手入れをするらしい。ガスイ、ヒコウ、クレハはそうなのだが、どうにも性格上の問題か、定かでは無いが、スイセツは剣になってする。不思議だね。

「巫女様がいらっしゃる前に、今いる巫女様を次の村まで送らない

と成らないんだろう？」

ガスイが気持ちよさそうに手入れされているヒコウを恨めしそうに見ながら言った。

「いや、今回は向こうから迎えが来る」

「・・・最近、いやに多いな」

スイセツが警戒しながら言った。銀葉はそれがどういうことなのかまったく解らない。尋ねて見ると、スイセツは黙ってしまったことに少しむっとした。

「気にすること無いさ。スイセツは双輝しか認めていないからさ」
ヒコウが気持ち良さそうに言う。

「護人というのは、巫女様の護衛をしてこそ、一人前！ってね？だから巫女様の護衛が出来るのはとっても名誉なことなんだよね。なんだけど、最近、双輝が護衛できないんだ。これ程まで立派なのに！」

少し腹立ちながらクレハが説明した。

「それなりに事情があるんだろう。仕方ないさ。俺だって最高じゃないんだから」

双輝の言うことは大体が自分を抑えている。もっと自信持てばいいのに。

「最高じゃない？確かにそうかもしれないね？でも、次くる護人が四季剣、2本だったらどうなのよ！？」
双輝のほうがはるかに・・・

「父さんは、2本で4本の相手に勝ったぞ」

「そ、それは・・・」

「双輝のお父さん、凄いだ！？」

「ああ。今の俺なんかより断然な」

「へへ」

家を見る限り、父や母の姿は無い。護人をやるにあたって一人暮らしをしているのだろう。そんな風に思った。

「でもでも！双輝が護人同士のやり合いで負けたこと無いじゃん！」

「あるよ。何度も何度も。それに俺は護人だけでなく、巫女様にまで嘘をついている。四季神様がお怒りなんじゃないかねえ」
のんきな口調で言う双輝。それに対して反論したそうな四季剣の御方々。とにかく、銀葉にとっては雲の上の話でしかなかったから、まいち話に参加することが出来ないのだけども、とにかく、双輝は軽くヒイキを受けているのではないのか？ということが解った。

第十五話 真相

しばらくして、巫女がこの村を出るとの報告を受けた。だから、双輝は銀葉をつれて表へ出た。

「護人さん、いらっしゃる？」

巫女の涼やかな声が鳴り響いた。双輝は、一瞬ためらい、前に出た。「何で迷ったんだろう・・・？」

ぼつりと言った一言だが、後ろから着いて来ていたクレハが小さな声で笑いながら言った。

「護人って、今二人いるでしょう？だから、自分を呼んだのか解らなかったんだよ。巫女様に呼ばれるなんて早々無いことだから、我先に行くのが普通なんだけどねえ」

双輝は謙虚なんだ。

巫女が双輝を呼んだ事に村のみんながざわついて話をしていた。

「双輝、大丈夫か？お叱りでも受けるんじゃない・・・」

「お叱り？」

うっかり口を挟む。銀葉はすでにこの村の一員となっていてらしく、村の人は素直に教えてくれた。それもとてもなく小さな声で。

「双輝は、ほら。四季剣の数を誤魔化しているだろう？巫女様がそれに触れて問い詰められたら・・・って、考えると、心配だなあつて、事さ」

「なるほど・・・」

双輝は巫女様の前で頭を下げた。巫女は、双輝の耳元まで近寄ると、小さな美声で発した。

「いつまでも隠し通せるものではありません。しかし、この村が危機に瀕したわけではありませんから、私もどうということは申しません。ですが、危機に瀕したにもかかわらず、使わぬのは、いかなるものかと思います」

「・・・存じております。大変、申し訳ございませんでした」

「構わぬわ。現に、貴方は嘘は吐いていなかったものね。大丈夫ですよ」

巫女に深々と頭を下げると双輝は足を下げた。それと交代するように銀葉が巫女の前に立った。

「あ、あの、少し・・・話をしてもいいですか？」

「銀葉!？」

想定外の銀葉の行動に驚く双輝。しかし、巫女は銀葉の申し出を肯定した。双輝に下がる様命じ、銀葉と少しだけ顔を近づけて話した。

「あの、双輝に巫女様、護衛の依頼が来ないんです。双輝は腕もいはずなのに、どうしてですか?! 無能なんですか?!」

巫女は銀葉の疑問を聞いて、小さく笑った。そして、それを否定して話した。

「この村は本当に美しい。古風な感じも残っていて、妖怪に襲われた形跡も無い素晴らしい村です。だから、周りの護人が見たがるのですよ。護衛をしたいと依頼をすると、その依頼が通ります。ですから、依頼をしないこの村の護人は後回しになる、それだけです」

「そうなんですね?! よかったあ」

「面白い人ね」

「え?」

「会って間もない護人の心配をするのね」

「いや・・・コレも何かの縁! って・・・」

巫女はまたも小さく、しかし本当に可笑しそうに笑ってくれたことに、銀葉は何か嬉しさを感じていた。

第十六話 覚悟

巫女が村を出て行った。入れ替わるように、またこの村に巫女が来る。ほかの村の護人が護衛しながら。

「へええ。そういうことだったんだあ。いやあ、良かったなあ」

「本当だよ！双輝を無能だと思っているのかと、心配したよ！」

「銀葉・・・まさか、そんなことを巫女様に・・・？」

ヒコウと、ガスイが嬉しそうに語る中、硬くした表情で双輝が聞いてきた。

「うん」

自信満々で銀葉は答えた。

「いや・・・巫女様にそんなくだらない事を聞くなんて・・・」

「くだらなくない！！大切なことでしょ！！双輝はちゃんとした護人なのに、4本持っているのに、それより質の無い護人が有能だと思われているのは、私もヤダ！」

「我だな」

スイセツの言葉を否定できない。それでも、双輝はわずかにだけど、勘違いかもしれないけど、どこか嬉しさで表情を埋めた気がした。

夜、広い部屋に二つ布団が敷かれた。四隅の対角線上に二つ。女である銀葉に気を遣ったのことが、なんだか寂しさを感じた。みんなは剣になって寝るようだった。

目が覚めると、朝日が差し込んでいた。いつもは、目覚まし時計で目を覚ますのに、陽光で目を覚ますなんて、なんだか、野生的なものを感じていた。緊張していたのと、やはり見知らぬ土地であるから寝るのもだいぶ苦労したし、朝日も、まだこの地を光で埋めたばかりのようだった。

外に出ると、まだ朝焼けが残りぼんやりとしていてどこか風情を感じた。

「眠れたか？」

唐突にした声に驚いて声のしたほうを見ると、そこには双輝がいた。

「は、早?!」

「いつもこの位だ」

双輝は軽く伸びながらそう言った。銀葉は驚きながらその姿を見ていた。なんだか、昨日と目の宿る光が違って見えたのは気のせいか。果たしてそうだろうか？そればかりが気になった。

「何？」

銀葉の視線に気づき、双輝が答えた。しかし、銀葉はふっと、目線はずしてなんでもないと答えた。双輝は何かを少し考えたそぶりを見せ、そっと銀葉の傍まで来ると小さな声で言った。

「銀葉はさ。俺が思うに、巫女様の力を少しだけ宿しているんじゃないか、と思うんだ」

「え？」

「でも、銀葉はその力に己で気づいていないし、コントロールも出来ない。だから、俺の傍にるように四季神様はおっしゃったんじゃないかと思うんだ」

「私が・・・？」

「ああ。だから、俺から何かを感じたならそれはきっと、巫女様の力の一種だと思う。隠さず言いな」

「・・・うん」

銀葉は頷いて双輝の目を上目遣いで見た。やはり昨日と何か違う。

「双輝の、目が・・・昨日と違う・・・って、言って通じるかな？」

「・・・解る。今日は少し覚悟を決めて森に行こうと思うから」
双輝はその目を柔らかくたらしめて笑った。どうやら、銀葉の勘は当たったようだった。

「森に行つてどうするの？」

「普段は、仕事の一環、護人として危険が無いかを見回るんだが・・・。今回は、人間として森に入る」

「・・・ すいません。もう一度・・・」

双輝の言った意味が理解できず説明をもう一度促すと、双輝は申し訳なさそうな表情をしてあたりに人がいないことを念のため確認すると小さな声で語った。

「俺はどうしても妖怪が悪いものとは思えないんだ。そりゃ、各村から妖怪からの被害は多数出ている。でも・・・」

「少なくともこの森の妖怪は悪くない？」

銀葉の発言に双輝はとても驚いていた。銀葉は双輝の目をしっかりと見た。この世界に来て間もない。だから、妖怪のことも知らない銀葉にとって全てが情報。だから、最初に出会った、最初に教えてくれた双輝の感情がどうしても情として銀葉の中に入るのは仕方の無いことであろう。

「私の世界に妖怪なんていない。でも、そういう存在は知っている。この世界の妖怪がそういうものかどうかはわからないけど。物によっては化け物と扱って怖い存在でもある。でも、ものによってはいい妖怪として扱われている。訳解らない！ だから。私は最初に知識をくれた双輝を信じる」

「・・・?! 俺の言ったこと、間違っている可能性だってあるんだぞ？」

「なら、どうして私にその話をしたの？ 信じているはずの四季剣達にも言わないで」

「・・・!!」

銀葉のこの発言にも双輝は驚いていた。正直、銀葉自信も驚いてはいた。なぜだか、双輝の気持ちを理解している。双輝がどんな気持ちでいるのかがなんとなく理解できる。

「で？ 護人としてじゃなくて、フツーの人として妖怪に会いに行くって訳。どうして？」

「この森で、もっとも強い妖怪。それに会いに行こうと思っている。そして、直に話したい。それだけなんだ」

「村を襲わない理由？」

「え?!」

双輝は驚きをついに声に出した。銀葉は自分でも解らないこの『勘』に確証は無いが、確信があった。だから、双輝を見ないでまっすぐ前だけを見て双輝に言った。

「……。まあ。そう。なぜ村を襲わないのか。それが一番の目的だね。後は、本当にただ話がしたいだけ」

双輝はそう言って立ち上がった。

「だから、俺は四季剣を持たずに森に入る。だから銀葉は家で……」

「いやよ。私も行く」

双輝は銀葉を見下ろした。座っている銀葉の目はしっかりとしたものだった。

「妖怪を解っていない！銀葉には危険すぎる！」

「神様からのご命令ですもん！ 護人と片時も離れるなって」

「な……。！？」

言葉を詰まらせ、双輝は一歩足を引いた。

第十七話 出陣

「仲睦まじいって言うのはいいなあ」

突然声がして驚いて振り向くと、家の窓枠に手をついている、ガス
イとヒコウがいた。

「おはよう」

「おはあゝ」

「おはよー」

双輝とガスイ、ヒコウは普通に挨拶していたが、銀葉はふつふつと
沸騰の音を立てていた。

「いつからいたの!？」

「いまさっきさ。珍しいまでの双輝の取り乱した声が聞こえたから
覗いただけ」

ガスイが言った。

「会って1日でそこまで仲良くなれるのなら大したもんだよ」

ヒコウがからかう様に言った。銀葉はトコトコと、二人の前まで歩
み寄ると二人のあごに一気にアップパーを食らわせてみせた。二人は
見事に後ろへと吹っ飛んで、後ろで静かに座っているスイセツの前
で止まった。

「・・・」

それを見て言葉を失った双輝。そして、確かに、この世界の女性と
は違うんだと改めて実感した双輝だった。

「いったっ! 何だ、あの女! 本当に女か!？」

「だらしが無い。たかが女性の一発で」

傍から見ていたスイセツが冷静な声でガスイとヒコウに向かって言
った。ヒコウがそれに怒り、反論した。

「なら、お前も食らってみろって! マジ痛いから! 吹っ飛ぶから!」

「知らん。俺はお前らみたいな馬鹿はしない」

「うゝ・・・」

反論できない正答。ため息を吐いてヒコウは座りなおした。ガスイは白くなって落ち込んでいるようだった。

「あの・・・私、まずい事した・・・？」

「本来、四季剣とは、見た目こそ人間だが剣に変わりは無い。あんな簡単に吹っ飛ばせるものじゃないんだよ。俺だって特にあの二人を一気に吹っ飛ばすのは容易な事じゃないな。不意打ちって言うてもね」

「あらま・・・。なんか申し訳ない・・・」

「気にするな。さて。じゃあ、行くか。ガスイ、付け」

「はいよ」

白くなっていたガスイが復活し、家から出てきた。

「あの、私・・・」

「着いて来ていいよ。だからガスイを連れて行くんだ。念のためって」

双輝はその足を運び始めた。銀葉もそれに続いた。

「どこに行く？」

スイセツが聞いた。双輝は森に行くと思えたと少し警戒した表情を見せたが、クレハの行つてらっしゃいの声でかき消されていた。ヒコウはガスイを恨めしそうに見ているようにも思えた。

森の前で双輝は足を止めた。ガスイを一步後ろに下げ、双輝は森に向かい、肢体から何かを放った。それが何を意味するのかを理解するには今の銀葉にとってはまだ早かった。

「行くぞ」

双輝はそう言って、森に足を踏み入れた。

森の奥で、にやりと笑った妖怪がいた。

「くくくく・・・」

「どうしたの？」

笑った妖怪に話しかけた妖怪。見た目は少女のようだった。ふさっとした髪をゆるく後ろでひとつに縛り、短い袖と裾は寒さを感じさせるが、妖怪である彼女にはそれは無い。

「護人だよ。どうやらまた入ってきたらしい」

「まあ」

「今回はこの奥まで入ってくるつもりらしいなあ。よほど俺に会いたかったんかねえ」

暗がりでもクックと笑う妖怪を見て、少女の妖怪は嬉しそうな顔をして目の前の妖怪の隣に座った。そして、肩に頭をつけて呟くように言った。

「同じじゃない」

第十八話 穴

森に入ってから例の妖怪の気配を追ってここまで来ているが、どうにも近づくことができない。何かの力にはまったか。

「双輝？」

「ん？」

「大丈夫？」

「ああ。少し考えるから待っていて」

「うん」

双輝はその場に座り込むと、目を閉じて何かを考え始めた。銀葉は、自分に何かできないか、必死で考えたけどこの世界全てが自分にとって無知なる世界。どう考えた所で何をしろという。

「よし」

しばらくしてから双輝が立ち上がった。

「こっち」

「おい、双輝。そっちに道はねえぞ？」

「だから行くんだ」

双輝は高々と茂る草を乗り越えて向こう側に行った。その後が続いて、ガスイ、銀葉とその方向に足を進めた。

「え．．．．．？」

銀葉は絶句した。超えた瞬間、足元が無くなった。

「ぎゃーーーーー!!!!!!??」

墜落。しかし、すぐに地面にはつかない。下を見る余裕がなぜかあった。遠い。下がものすごく。もっと言えば、真っ暗で何も無い穴の中に落ちたと、気づいた。

「そーーーーきーーーーー!!!!!!??」

「あゝゝ、いや、悪い。まさかこんなことになっているなんてなあ．．．．」

「のんきな声あげている場合じゃないでしょ!？　どうするのよ、

コレ!?!このままじゃ地面についたとき、死んじゃうよ!?!」

「大丈夫だろ」

応えたのは双輝ではなく、ガスイだった。ガスイは普通に下を見て落ちていくというよりは降りているように見える。無論、双輝もそうなのだが。

「うん。ガスイの言う通りだな。大丈夫。もう地面が見える」
「え?」

どう見ても銀葉には真っ暗で何も見えなかった。しかし、双輝には見えるという。コレは一体どうして……?」

「銀葉は夜目に慣れていないのか?」

「うん」

「だからだろう。俺は夜でも目が利くから、地面が見える。銀葉。今のうちに許可をもらいたいんだけど、いいかな?」

「落ちていくのに呑気だな……。うん、何?」

「抱えていいか? 地面に着地できないだろう?」

「……。はい」

「許可は?」

「します」

「わかった」

「俺は?ソーキィ。抱えて?」

「お前は落ちてろ」

皆さん、知っていますか?今は落下中です。そんなことを銀葉は思った。だんだん、落ちることが当たり前に感じてきた時、双輝が銀葉の腕を掴んだ。もう、地面だという事がなんとなくわかった。
ドンッ!

鈍い音と共に妙な浮遊感が終わった。あたりは薄暗い。大体の位置と表情が読めるくらいには明るかった。洞窟らしきこの場所の奥で上から差しているであろう日光がきらきらと輝いている。少し歩けばそこまで行けそうだった。

「っつー!!」

双輝の漏れた声を聞いて、慌てた銀葉は双輝の腕から離れると安否を心配した。

「大丈夫!？」

「平気。ちょっと高かった!」

「・・・うん。凄く落ちてきたんだよ・・・」

「双輝なら問題ないだろう」

「おう・・・」

そう言って立ち上がった時の双輝の目に驚いた。警戒している表情だ。

第十九話 対話

「ようこそ、とても言って置こうか？」

日光が差し込んでいる奥から声がした。銀葉はそっちに目をやった。人がいるのは確かだが、その姿を確認できない。

「この地の妖怪か。気配で察するに、お前が・・・」

「ああ、そうさ。護人さんよ」

どこか嫌味に聞こえるその言い方にカチンとくる銀葉は反論しようとして、それを悟った双輝にとめられた。妖怪は少しずつこちらにやってきた。そして、日光の降り注ぐ下まで来て足を止めた。その姿を目にして、銀葉は硬直した。ただの人間じゃないかと。その姿は黒い髪を乱雑にし、袖の無い着物のようなものに、腰のところには鎧のようなものがついている。長い裾は地面につきそうなくらいだった。そして、やや吊り上った目は半目なのか、とにかく細かった。

「こんな奥までご苦労様、護人さん」

ククツとのどを鳴らすように笑いながら妖怪は双輝に向かって放った。双輝は一步だけ足を進めた。妖怪の様子を伺っているようだった。

「ぞろぞろとまあ・・・。そっちのは・・・。ああ、いい四季剣だな」

ガスイを見てニタリと笑う。双輝は多少の警戒心を持って相手を見据えている。

「で？そっちの女は何だ？巫女でもなければ護人でもない。ましてや、普通の人間でもない」

「何?!」

妖怪の言葉に双輝が声を発した。妖怪は笑いをやめ、双輝を見た。より目を細めて。そして、妖怪はまた笑った。

「ククク・・・。お前、傍にいるのにそんな事も判っていないのか

？」

「くっ……」

双輝は妖怪の言葉に声を籠らせた。ガスイが双輝の後ろに立った。何かを言おうとしていた。銀葉は目の前の『妖怪』という存在が理解できなくて啞然としている。まったく人間と姿かたちが変わらない。もっとと化け物じみたものを想像していたのに。

「で？ 護人さん。こんな奥までわざわざ何を？」

「……聞きたい事があってきた。戦うつもりは一切無い。俺は双輝。そして、こいつはガスイ。言ったとおり、四季剣だ。こっちは銀葉。少し訳あってここに滞在している」

「話し合いでもする気か？」

「そうだ。他にするつもりは何も無い。ガスイ、四季剣をつれているのは銀葉がいるための用心」

双輝の言葉をしばらく聞き残し、判断したのか、妖怪は一言、着いて来いと言った。

妖怪に誘われるがままに足を運んでいると、真っ暗な洞窟を抜けて森に出た。そこには古い高床式の小屋があった。

「念のため、警戒させてもらった。お前が危険分子であることには変わりないからな。あの洞窟に落ちるようにさせてもらったよ」

妖怪は、小屋のところに座ると、頬杖について双輝たち三人を軽視した。

「で？」

妖怪は愉しそうに言った。

「聞きたい事がいくつかある」

「そうだな。2つまでな。訊いていい質問は一人二つまで」

「……。なら、一つ目だ。お前は俺より遥かに強い。なぜ村を襲わない？」

ガスイが、一瞬だけ表情を崩したのを銀葉は見た。そんなことを言ったら誘発するに決まっていると、ガスイは言いたいようだった。

「村を襲わない理由？ 簡単なことを訊くな。お前、前言を撤回し

ろ？悪いが俺はお前より強くなどない。だから死ぬのが嫌だからなあ。襲わんだけさ」

「本当にそうか？お前は・・・」

「それは二つ目の質問か？」

妖怪の嘲笑うような表情に双輝は押し黙った。

「わかった。それでいい。お前は俺より強くないと言った。それは本当か？俺には嘘にしか思えない」

「本当さ。嘘じゃない」

「・・・この場で、簡単に殺すことができるだろう？」

「それは三つ目だ。応える義理は無い」

「・・・」

余裕を見せる妖怪。双輝は困った表情の奥に何か別の表情を隠しているようだった。ガスイが堪らなくなったのか、妖怪に質問をした。

「この前の鳥の妖怪はどうした？帰ったのか？」

「・・・一つ目。あの鳥なら、俺が始末した」

「殺したのか？！」

ガスイが驚いた声を上げた。銀葉はその声に驚いた。それと同時に、双輝は妖怪を退治しなかったのか、という疑問が浮かんた。

「それは二つ目か？なら、応えるが」

「・・・いや・・・」

ガスイは押し黙った。無駄に質問をしてしまって主の訊きたい事が訊けなければ意味が無い。銀葉はそんな様子を見て相談すればいいのにと、内心思っただけで妖怪に目をやるとギラリと光るその目が相談をさせてはくれなさそうだった。

「それで？もう終わりなら帰れ？」

「いや・・・」

双輝は声を濁らせた。

「ねえ」

銀葉は何かに耐えられず声を発した。妖怪はにやりと笑っていた。

「何だ？」

「うんと・・・あなたは、双輝が強いから村を襲わないって言ったけど・・・それって本当なのかな、って思ったの」

「ほう」

「それで・・・あくまで思ったことだから違ったらごめんなさい・・・」

妖怪の目が銀葉を貫く。余計なことを銀葉が口走って妖怪の堪忍袋の緒を引きちぎったら、大変だと、双輝は気を張り詰めているようだった。ガスイは刀に転じる準備を軽くしているようだった。でも、銀葉は目の前の妖怪の威圧が強くてそんなことを気にしている余裕は無かった。

「あなたは、双輝が怖いんじゃないくて、あの村が好きなんじゃないの？」

「!？」

銀葉の発言に、目を丸くした妖怪。突拍子も無い発言に肩の力が抜け、張り詰めた気配をかき消していた。

「銀葉・・・」

「あっ！ごめんなさい・・・！！　なんとなく、そう思って・・・」

「アハハハハ！！」

高らかに笑い声を上げたのは妖怪だった。

「面白い女だな、お前。俺があ村を好いていると？　アホくさいな。あると思うか、そんなことが？」

「だって・・・そう思ったんだもん・・・」

落ち込む銀葉を見た妖怪は笑いをやめた。それがあまりに冷たく見えた。双輝は警戒心を強めた。瞬間、妖怪が視界から消えた。驚く銀葉をよそに、すでに双輝は行動を起こしていた。

消えた妖怪は銀葉のすぐ真下まで移動していた。そして銀葉の喉元に向けてその鋭い爪を突き刺そうとしていた。それを止めるべく双輝はガスイを刀にし、妖怪の首を落とす寸前で止めていた。妖怪のほうも、銀葉の喉元に突き刺す前に手を止めていた。

「早いな。予想以上だよ、護人さん」

「それはどうも。その発言自体が、俺より強いと物語っているような気がするんだけどね」

「それは勘違いだ。俺はお前のスピードを予想してただけさ。自分より強いんだから想像位するだろう？」

硬直する銀葉を他所に話し合っている双輝と妖怪を少しだけ恨む。

妖怪は銀葉から手を引いた。双輝も刀を下げたが、ガスイを人型には戻さなかった。妖怪はククと喉を鳴らしながら笑う。

「さて。質問は以上かい？なら帰れや」

「話だけ、したいんだが？」

「……人間と話するだけ無駄だ。帰れ」

「俺はお前と話がしたい」

「……何が目的だ？何が故、話をしたい？」

「妖怪と人間は共存できないか？」

その質問に、妖怪は銀葉の質問以上に、表情を崩した。銀葉の時と更に違ったのは、笑うことは無かった。ただ無表情で双輝を睨んでいる。妖気が渦巻く中、双輝は冷や汗らしきものをかいていた。妖怪の放つ妖気が双輝を圧迫するようだった。

「本気でそれを言っているのか？お前は馬鹿か？」

「本気だ。撤回するつもりは無い」

妖怪は足を一步引いて、飛び出す準備をした。双輝はそれに対し、構えを取った。そして妖怪が勢いよく飛び出した。双輝はガスイを構え、耐える体制になった。

第二十話 理由

「ダメッ！」

森の中に女の子の声が響いた。その声で妖怪は動きを急停止した。双輝と妖怪の間はもう1メートルは切っていたが、その間に割って入るように女の子が双輝に背を向けて両手を広げて立っていた。

「……なぜきた」

妖怪の低い声が鳴る。しかし、女の子は、口をぐつと結んで首を横に振っている。喋ることができないのだろうか？そんなことは無い。さっき、声を発したのはこの少女のはずだから。銀葉はこの少女が無事で済むのか心配だった。邪魔だと判断した妖怪は簡単に切り捨てそうな奴を目の前に行っているのだから。

双輝はガスを構えたまま硬直していた。何かを言おうとしてやめている。その様子を悟ったのか、少女が振り向いて、にっこりと笑った。

「お前……は……？」

双輝がやっと言葉を発した。力こそ全てである妖怪の世界。それなのにもかかわらず、このか弱い妖怪が最も強い妖怪である奴に齒向かい、無事でいることが信じられない。

「どけ。そいつは俺の客だ」

「だめよ、この人は。この人は殺しちゃいけない！そういう人間だって、わかっていてでしょう？」

か細い声が妖怪に向けられる。妖怪は、ひとつ、ため息をつくその後ろの小屋まで下がってそこに座り込んだ。

「今回はやらずに終えるか。護人。正直なことを言えば、俺はお前に興味がある。殺すのは惜しいとは思っているが、あまりふざけたことを言っていると本当にやるからな」

「……その娘は……？」

「穢瑳といいます」

少女はぺこりと頭を下げた。

「お前ほどの強い妖怪が、なぜこんなにもか弱い妖怪の・・・」

「妖怪?!」

銀葉の声に全員が驚いた。

「お前、分け目がつかないのか?!」

妖怪の呆れと驚きの混ざった声が銀葉の耳に届いた。恥ずかしくなりながら、何で恥ずかしくならなければいけないのか思案したとき、銀葉の中でぷつりと何かが切れた。

「なんか、私がいじめみたいな扱いになってますけどね!? 言っときますけど私は普通の人間なんです! 妖怪の気配とかを感知できるような能力は持ってませんけど!? それが何か!?!」

「銀葉、落ち着きな・・・。アイツは銀葉の中に護人と巫女の力を感じ取ったんだよ。だから感知できないわけがないと思ったただだから・・・。銀葉がこっちの世界の人間じゃないことも知らないんだ」

「・・・あ・・・。そ、そうですね・・・」

双輝の宥めによって落ち着きを取り戻した銀葉は妖怪二人に謝罪した。どちらかというと、少女ではない妖怪に向けたほうが大きいが。「こっちの世界の人間じゃない・・・?」

妖怪が言った。双輝は小さく頷いていた。

「少し訳有ってね。銀葉はこの世界の住人じゃない。服装だって全く異なっているだろう?」

妖怪は銀葉の服装と雰囲気をもう一度、確認していた。そして、にやりと笑ってそうかい、とだけ応えて黙り込んだ。

「妖怪は、なぜ人を襲うんだ?」

双輝は唐突に聞いた。妖怪は目を煌かせた。決して輝かしいものはなかったが。

「質問は、2つまでと言った筈だが?」

「コレは妖怪全般の話だ。個人的なことは聞いていない。それくらい応えてくれもいいだろう?」

「……まあ、いい。応えてやるか。うざったいんだよ！」
突如感じたものすごい殺気。銀葉ですら感じたのだから、双輝は……。

「双輝！？ 大丈夫……！？」

苦しそうに息をしながら膝を地面についている。

「恨みだよ、何万年のね」

「やめて……！ あの護人は何も悪くないわ！」

穢瑳が悲痛な声で妖怪に懇願していた。それがあってか、銀葉はふっと体が軽くなるのを感じた。双輝は呼吸を整えて静かに立ち上がった。

「ありがとう。もう大丈夫」

心配そうな顔をしている銀葉にそう笑いかけた。そして、妖怪へと目を向けた。

「恨み、とは？」

「昔から妖怪が好き勝手に暴れていたと思っていた人間が憎らしい。好き勝手に暴れて破壊し続けてきたのは一体どっちだ？ と、人間どもに問いただしたいところさ」

「……？」

「知っているか？ 妖怪と人間は遥か昔、共に存在したんだよ」

「?!」

「所がだ。人間の都合が悪くなってきたと感じたのか、何のか知らんがな？ 俺たち妖怪を地の果てに追いやり、そこに封印したのさ」

「なんてことを……！？」

「そして、永い、永い時をその封印された空間の中で過ごした。食物も何も無くなり、最終的には共食いが始まりやがった！ その時の憎悪や恨み、憎しみは一時たりとも忘れたことが無い」

言葉に凄い力がこめられている。押し退けられそうなほど強大な力。恨みが。双輝は悲痛な表情で顔をゆがめていた。

「誰が、そんなむごい……」

「はん！ 笑わせるな！？ 貴様らの崇める四季神とは！」

「?! まさか・・・!?」

「そうさ。貴様らの崇め称える四季神と言う存在は俺たちを地の果てに追いやり憎しみの中に放り込んだ。俺はその封印を破る方法を必死になって探した。やっと見つけ、封印を破ろうとした時にはもう、その地にいる妖怪は半分以下にまで減った。そして、そこに居た全ての者が正気など持ち合わせてはいなかった。俺とて、正気は殆ど失っていただろうな?」

「もう、やめて。そんな辛そうな表情、私は見ていられない!」

釋瑳が泣きそうな声で妖怪に求めている。

「・・・ 恨むはその四季神。憎むはそれを崇める人間共。わかったか?」

「・・・・・・・・わかった。そんなことが過去にあったのは知らなかった・・・ 申し訳ないと思う」

「そう思っただけになる? 俺たちの恨みが消せるのか?」

「それはできるとは思えない」

「ちっ」

双輝の応えに舌打ちをした妖怪。銀葉はこの時、何かを感じた。消せるのか?という質問に対し、双輝はそれを否定した。そして、舌打ち。この妖怪は、双輝に何かを求めているんじゃないかと。そんな気がした。

「でも、俺はお前たちを裏切らない! だから・・・」

「だからなんだ? 従順に従う駒に成れただけか?」

妖怪はあざ笑うかのように声を高くして言った。

「違う!」

双輝はそれを勢いよく否定した。

「俺はお前を僕としてほしいんじゃない! 仲間として俺らの傍にいてほしいだけなんだよ!」

「・・・っ?!」

妖怪はものすごい表情を崩した。相変わらずの細い目で。

「俺はお前を信じたい。今まで何度も村を襲う機会があったはずだ。

それにもかかわらずお前は一度たりとも奇襲の様子を見せなかった。だから、お前を信用しているんだ」

双輝の言葉に妖怪は睨むような目で見ていたが、遂にそれをやめて視線を反らした。双輝はそれを見て、これ以上は無駄だと判断したらしく、ため息について踵を返した。

「行くよ、銀葉」

「え？ あ、うん・・・」

妖怪に背を向けて歩き出した。銀葉は少し戸惑いながらも双輝の後を追った。またの機会に、ということなんだろうか。ともかく双輝は今回は引くべきだと判断したようだった。

第二十一話 信用

「玩愉」

後ろで妖怪の声があった。双輝と銀葉は振り向いた。銀葉は少しだけ驚いた。脅威的なまでに威嚇をし、脅してきた妖怪だが、双輝からは目線をはずし、横に流しながらわずかに照れている様子だった。

「俺の名だ」

妖怪、玩愉はそう応えた。双輝は嬉しそうな表情を浮かべていた。銀葉もそれに伴い嬉しくなった。玩愉が、妖怪が名を教えると言うことはその相手に対し、少なからずの尊敬や、信頼というものが含まれるらしい。だから、双輝は嬉しかったのだ。玩愉からの名をもらった。クスリと笑って双輝は踵を返した。

「俺は双輝。護人だよ」

もう一度、双輝は自己紹介をした。

「穉瑳は、俺の妹だ」

玩愉の声を聞いて、双輝は首だけ巡らせた。銀葉は体ごと玩愉と穉瑳に向けていた。

「そうか。それでお前は……。妹思いのいい兄だな？」

「ふん」

玩愉はまた照れているように見えたがどこか嬉しそうだった。双輝も嬉しそうな表情をして、その場を去った。銀葉もその後に続いたが、なんとも嬉しそうな双輝の表情を見て、こっちまで嬉しくなってきた。

「ねえ。妖怪と仲良くできた事がそんなに嬉しい？」

「まあね。昔から妖怪は悪しき者じゃないと判断してきたからその念願が叶ったから、やっぱり嬉しいな」

「そっか」

「村人にはなんていうんだ？」

人型へと戻ったガスィが双輝に尋ねた。双輝は少しだけ悩んで、直

に話すと判断を下した。

村に帰り、四季剣のみんなにそのことを話すと、ヒコウはなぜだか爆笑していたし、クレハは楽しそうに双輝をいじっていた。スイセツだけはいつも何もしない。双輝のことが嫌いなんだろうか？

「スイセツって、無口だよね・・・？どうして？」

「・・・」

スイセツに向けて質問したつもりだったが、見事に無視された。その代わりと言ってなんだけど、と言った風でクレハが割って入った。

「スイセツはそういう性格なんだよ！だから仕方ないのよ！」

「双輝に対してなんだか冷たいような気がして・・・。信用してないのかと思った」

「それはない！」

四季剣の、スイセツ以外が口をそろえて否定した。

「俺たち、双輝の四季剣で双輝を最も敬っているのはスイセツだ！」

「双輝の命令に対して、反抗したところを一度も見たことないし！」

「ふざけて双輝を叩くなんてことも絶対にありえないんだよ！」

「そ、そう・・・」

いきなり、凄い勢いで迫られ驚いたが、スイセツの心ウチが少しだけ知れてよかったと思う銀葉だった。

次の日の朝は、騒音で目が覚めた。驚いて飛び起きると、外でどうやら、巫女を向かえる準備をしているようだった。

「ご、ごめんなさい！起こしてくればよかったのに！」

「いや、大丈夫だよ、っと。銀葉はそういうのが嫌なんだっけ」

「うん・・・」

ふと、銀葉は後ろを向いた。そこには自分がここに来たときはまた別の森が存在していた。

「ねえ、あそこの森は、何？」

「ん？ ああ、あそこは、妖怪が一人もいない特殊な場所だよ。行きたければ行って来て平気だよ」

「・・・本当？　じゃあ、行きたい。双輝は？」

「俺はこの手伝いをしないといけないから。あそこはまず、絶対と言っていいほど安全な場所だから大丈夫だとは思うんだけどね」

「わかった。じゃあ、ちよつと見てくるね」

そういつて、銀葉は森に向かって走り出した。そんな背中を見ながらスイセツが双輝に話し掛けた。

「いいのか？　いくらなんでも・・・」

「銀葉は平気さ。巫女様の力がある。玩愉もそう言っていたしな」
「ほう・・・」

双輝は村の手伝いに走り始めた。

第二十二話 対森

森の中は凜としていてどこか涼やかだった。とある木の根元に腰を下ろした銀葉はふと、空を見た。

「こっちの世界の空ってキレイ・・・」

空気が澄み切って汚染されていない空はクリアに見えた。ぼうっと、それを眺めていたとき、それをさえぎる影が突然現れた。

「何しているのっ？」

いきなり現れた一人の青年に驚いて目を丸くした。

「おっと！ごめん！驚かせるつもりじゃなかったんだ」

「あっ！いいの！気にしないでっ！」

銀葉は立ち上がって自己紹介と、何をしていたかという質問に答えた。そして、銀葉は今現れた青年に名を尋ねた。すると、青年は少しだけ間を空けてから、にこやかに笑って応えてきた。

「トキ、そう呼んで」

「・・・？」

その間が気になったが、どこと無く、このトキという青年は悪しき感じがしなかったため、気にしないことにした。

トキは銀葉を見て不思議な笑みを浮かべた。気になって問いかけると、トキは双輝のことを語った。

「キミ、護人と一緒に生活しているよね？」

「え？！何で知っているの！？」

その反応を見て、トキはにやりと笑ったが、それを確認するほど、銀葉には余裕が無かった。

「妖怪が話しているのを聞いた」

「え？！妖怪と仲良しなの？！」

双輝と同じ思考を持っている人間が他にもいたことが少し嬉しくて尋ねた。しかし、トキはそれを否定した。

「まさか、そんなわけ無いだろう！有り得ない、有り得ない。チラ

ツと、妖怪同士で話をしているのを聞いただけさ」

「そう・・・」

「そんなに落ち込むなよ」

トキのキャラが面白いキャラであることは判断できた。それと同時に、何か、何かが違う。そんな気がしていた。

「でさ。その護人だけどさ」

銀葉は少しドキッとした。護人の情報をあまり外に流してはいけな
いから。それを機に、弱点を見出されては困ることがいくつかある。
そんなことをガスイかなんかが言っていた様な気がする。

「その護人と・・・」

なんとしても誤魔化さないとはいけない。緩そうな相手だからって油
断してはいけなかったんだ。

「今、どの位まで進んでるの？」

「んな?!」

唐突の質問に虚を突かれ、妙な声を上げてしまった。

「何も進んでませんよ?!」

「えゝ? 何も？」

「有りません! 何を聞くのよ、突然!

慌てた銀葉は無意識に、トキの顎に見事なアッパーを食らわせて見
せた。

「うゝ・・・」

トキの声が漏れて、はっと我に返ると銀葉は必死でトキに謝った。

「謝るくらいならやらなきゃいいのに」

「いや・・・その・・・条件反射といいたましようか・・・。つい、
やってしまふんです・・・」

「ふーん・・・。まあ、何か? 一つ屋根の下に居るって言うのに、
本当に何も無いわけ」

「無いです!」

「もったいないなあ」

銀葉はトキのその一言にはっとした。

「そう・・・だね。双輝みたいな人は人気あるんだろうな・・・。それなのに私なんかが居候して・・・」

「違う、違う。そっちじゃないよ」

「え？」

トキが否定した。

「護人じゃなくて銀葉が」

「え？私！？」

てつきり、双輝のことを言っていると思って気分が下降したのに、そういわれると反応し辛かった。

「だって、こんなに可愛いのに、もったいないじゃん」

「そ、そんな事有りません！」

照れ隠しなのか、銀葉はもう一発、今度はほほに食らわせた。

「つおいね・・・」

「ごめんなさい・・・」

「キミさ、可愛いんだから告っちゃいなよ。絶対にOK出るって！」

「何を言っているの！無理だから！それに、女性の言うことはほぼ絶対だから・・・。そんなことをしたら双輝は・・・」

「うーん。オレさ、思うんだけど。実際にこの世を支配しているのは『男』のほうだと思うんだよね」

トキは突然言い始めた。見た感じはどうにもぐれている様にも見えるが。しかし、その内容は銀葉にとってとても共感できるものだった。

「確かに？巫女様は凄い存在だ。でも、よく考えてみるよ？それを護っているのは誰だ？村の住民を助けているのは誰だ？妖怪を追い出すのは誰だ？他でもない、護人だろ。護人が全ての仕事を放棄して、自分のしたいことだけを考えたとき、か弱い女性というのは、言い方悪いが、地に落ちる。自分の身を護るすべを持たないからね・・・って、女性に向かっていう話じゃなかったな。ごめん」

「ううん！私はその考えに凄く共感する！」

「そうか。そういつてくれる気がした」

銀葉はにこやかに笑った。トキも笑った。しかし、この時銀葉はトキの言葉で大事な言葉の意味を理解していなかった。

いくら、優しそうで、いくら、緩そうだからといって、簡単に心を許してはいけない。それはここに来る前からそうだった。神という存在を信じていない銀葉にとって自分の行く先すら、自分の力で何とかしていかないといけないと思っていたから。だから、どうにもこのトキという人物に完全に心を解かせない。でも、そう考えると、不思議な話だ。双輝に対してはなぜだか簡単に心が解けた気がした。なぜだろうか。

そんなことを考えながら銀葉はトキとの話に盛り上がっていた。そんな時・・・。

ぐううう~~~~

・・・。腹の虫。

「トキ君・・・？」

「エヘヘヘ」

「おなか、すいているの・・・？」

「腹減った。川行こう！魚取れるよ！」

そう言ってトキは銀葉を引っ張った。成るがままに引っ張られていくと、川に出た。太陽光を煌びやか反射させて輝く。

「キレイー！」

「太陽が照らしてるな」

楽しそうにトキが言う。そして、トキは腕まくりをした。

「捕るぞー！！」

意気込んでいるトキを見て、原始的！と思う銀葉だった。

「おらー！！！！」

ドボン！

「え・・・？！」

腕まくりの意味無！と思う、見事なダイブ。

「濡れちゃった」

全身ずぶ濡れに成ったトキを見て、何かがふつ切れた。噴出して笑

うと、その笑いが止まらない。

「トキ君、ずぶ濡れじゃん！」

「アハハハハ！！！」

トキと二人で爆笑していた。すると、横のほうで、魚の跳ねる音がした。

「はねた！」

銀葉が声を上げると、トキもそれに反応した。

「お？」

トキがそっちを、向いた直後……。

「グワチャー！！」

「えっ！？」

トキは見事に川に向かってダイブして見せた。ドボンと、水しぶきがあがり、それに乗じて二匹の魚が上陸した。ぴちぴちと跳ねる魚。呆然と突っ立つ銀葉。そして、川から上がって来たときの一言。

「食は命がけなんよぉ……。グヘヘヘ」

「トキクン、スゴシ」

固まる銀葉だった。

パチパチと火の音。魚を焼いている間、ずっとトキは目を輝かせながら魚を見つめていた。

「トキ君、子供みたいね……」

半分呆れと、半分明白く、銀葉はトキにそう言った。するとトキは焼けた魚を手にとって嬉しそうな表情をしたまま言った。

「こーでもしないと、持たないんよ」

「持たない……。？それってどういう……」

「食いな。サイコーにうまいぞ」

トキは棒を一本、啜って銀葉にそう言った。その棒って、魚が刺さっていた奴。

「くうの早っ！？」

「はい」

「ありがとう……」

銀葉のした質問を閉ざすようにトキは銀葉に魚を渡してきた。聞かれたくなかったのか、魚を目の前に我を忘れて余計なことを口走ったのか。定かではないが。考えながら魚を口に運ぶと、その魚の美味しさに少し驚いた。

ずいぶんと、日が暮れた。

「それじゃ、オレは帰るよ」

「うん。今日は楽しかった」

「また、会えたらね」

にこやかに笑ったトキに少しだけドキツとした。銀葉も同じように、にこやかにトキに返した。

第二十三話 歡迎

森を出ると、巫女様を迎える準備で双輝が忙しそうにしていた。手伝いに入ると、村人に止められた。

「女性の手を傷めてしまったら大変だ。向こうで休んでいな」

「え・・・私もやるよ・・・」

「でもね・・・」

「銀葉は特殊な子なんです。やらせてあげてください」
双輝が巨大な箱を持ってこちらに来た。

「きゃー!? 双輝!? そんな大きな箱一人で持ったら腰が壊れちゃう!」

「ん? そうでもないぞ。軽いしな」

「私も手伝うよ!」

「んじゃ、上に乗っている箱とって」

上を見ると巨大な箱の上に小さめの箱が乗っていた。

「それは、少し重いから気をつけて。で、あっちでヒコウが荷物を整理しているからそっちまで運んで」

「わかった」

箱を取ると、意外に重かった。双輝の持っている大きいほうの箱の重さが知れない・・・。銀葉はそんなことを思いながら怒鳴り散らすヒコウの元へと急いだ。

「不思議な子だ・・・。本当に」

「そうでしょう? 四季神様ですらよくわからないらしいからね」
「・・・そうか」

村人は柔らかく笑ってその場を後にした。双輝も準備に走った。
次の日に、壮大な馬車が村に訪れた。驚くほど豪華で中に乗っているのは巫女。顔は見えないが。

「巫女様って本当に凄い扱いだね・・・」

「まあね。唯一、四季神様とコンタクトを取れる存在だからな」

「・・・あれ？でも、双輝も、一度四季神様に会ったって？」

「言ったよ。一度だけ、特別に会わせて頂いた」

「誰に・・・？」

「・・・・・・」

「双輝？」

「父さんに」

「お父さん・・・？そう言えないよね・・・？何処にいるの？」

「遠くさ。護人は自立をしないとやっていけないからね」

「へえー！凄いんだね・・・。なんだか大変そう！」

「ああ。そうだな」

「・・・？」

双輝の表情に違和感を覚えたが、馬車が止まり、中から巫女が出てきたので、そっちに気がとられた。

「キレーだな・・・巫女様・・・」

「そーきいー！！」

「ひ、ヒコウ！？」

突然後ろからヒコウが双輝にダイブした。双輝は少しだけバランスを崩し、前進した。

「っと・・・」

その拍子に人にぶつかった。

「すみません」

顔を上げた双輝の目に巫女を連れてきた護人の顔が飛び込んだ。

「護人か？」

「はい。そうですか？」

「ふーん・・・」

護人は何か納得したような声を上げて巫女のほうへと歩いていった。

「双輝？今日は巫女様が来たけど舞うの？」

「さ？」

「なんだよ、それー。お前が舞うの楽しみにしてるんだぞー？」

「笑いたいだけだろう」

「よくわかった！」

「ふん」

「ヒコウ、舞うって？」

「え？ ああ、そっか。銀葉は判らないのかあ！ 巫女様が着たら歓迎って事で護人か、その村の女子か、またはその両方が舞を披露することになっているんだよ」

「そうなんだ！ 双輝が！？」

「そうだよ！ 興味あるだろう！？」

「あるある！！」

「あんな・・・」

ため息を吐く双輝を他所に異様なまでに盛り上がるヒコウと銀葉だった。

第二十四話 仕立て

巫女を歓迎する儀式のようなものは明日行われるということ、一時解散になった。そして、双輝の家でくつろいでいると、誰かが訪問してきた。

「はい？」

「おお、双輝。舞人決まったぞ！」

「そうですか」

「誰だれだれ?!」

村人が舞を披露する人物が誰だか決まったらしく、報告に来たことを知ったクレハが双輝を突き飛ばす勢いで入り口までかっ飛んで行った。

「今回は組舞だ。そんな訳で頑張って舞えな」

「・・・はい。えと、つまり一人は俺？」

「そうだな」

「で？」

「ま、頑張れ。一日も残っていないけど何とか成るだろう？」

「へ・・・？」

「・・・ま、双輝。お前ならしごけるだろう！頑張れ！」

「ちょっと待っ・・・」

双輝の言葉は途中で切れた。その理由も、村人が扉を閉めて行ってしまったからだ。

「・・・双輝？どーゆこと？」

クレハの質問にも沈黙して何も言わない双輝に、少し心配したガスイとヒコウも立ち上がり、双輝の元へ行った。

「双輝？」

「悟ってやれ」

スイセツの鋭い一言が空気を切った。どういうことだ？といった表情をする銀葉を含めた4人にため息を吐いて一言発した。

「舞人のもう一人はそれだろう」

そういつてスイセツが顔をクイっと、向けたのは銀葉だった。

「……え？ 私？ 何言っているの！ 舞いなんて知らないし！」

「だから村人が『お前ならしごけるだろう』といったのだろう？」

「え……双輝？」

「その通りだな……。銀葉。今から服屋行くぞ」

「な？！ え？！ どうして？！」

「舞いような衣服が無いだろう？」

「はい……」

「調達しに行くんだよ」

「あ……そうですか……」

双輝に誘われるまま衣服を売買しているという店まで連れてこられた。中に入ると人のよさそうなおじさんが出迎えてくれた。

「よう、双輝。そちらのお嬢様の服かい？」

「ああ。儀式用の服を」

「あれま。今から用意するのかい？ 服の仕立ては間に合うが……。その。あっちの方は間に合うのかい？」

「いや……。怪しいところだが……。指名された以上は……」

「まじめだねえ。まってな。今寸法を測るから。綾く！」

「はい……。？ って、そう……。？！」

おじさんにアヤと呼ばれて出てきたのは可愛げのあるお淑やかな女の子だった。双輝がいたことに驚いたようだった。どうやら……

―あ……。双輝に惚れているな、こりゃあ……

そんなことを思う銀葉だった。

「やあ。今日はこの子の儀式用の服の仕立てを頼みたいんだが、いいかな？」

「は、はい……。構いません……」

「明日の儀式までに完成……。間に合うかな？」

「大丈夫です！」

「そうか。じゃあ、よろしく頼むよ」

「はい！」

双輝に合図されて銀葉は綾の後を追った。

仕立てをするための部屋のような場所に案内されると、綾はいきなり銀葉の両腕を驚掴みにすると横に広げた。

「え？」

「寸法、計るの。手を下ろしたままじゃ計れないでしょう？ そんなのも判らないの？」

「は・・・はい?!」

この態度の差は何だ!？と、思いつつも、作ってもらうのはこっちのみだから落ち着いて言うとおりに動くことを判断した。

性格に問題は有りそうだが、腕には問題なさそうだった。慣れた手つきであちこちからイロイロな布を引っ張りだし、銀葉にあて服のイメージを作っているようだった。

「もういい。出なさい」

「は、はい・・・」

綾にそういわれて扉を開けた。

「早かったね。終わったの？」

双輝がおじさんとの話を中断してこちらに話しかけた。

「はい。終わりました！ 急ぎのようだったから・・・」

「そんなに慌てなくても良かったのに。ともかくありがとう。い
つくらいまでに出来そう？」

「今日中には出来ると思います」

「ありがとう。悪いけど、届けに来てもらってもいいか？」

「全然！ 構いません！ 届けにうかがいます！」

「そう。それは良かった。じゃあ、銀葉。行くよ」

「あ、うん」

「舞い、覚えてもらわないと」

「あ・・・はい」

どんな舞いかわからない以上、どう応えていいものかわからない。

それより気になるのは、あの綾という女の子の視線……。なんだか痛い……。

双輝と銀葉が出て行った後、服屋のおじさんはため息を吐きながら綾に話しかけていた。

「そんなに不貞腐れるな。せつかくの顔が台無しだぞ？」

「うるさい……。本当だったら私と双輝で舞う予定だったのよ……。？ それを、あの女……。ひょっこり現われたと思ったら双輝をとっていった」

「とっていったなんて……。人聞きの悪い……」

「だって、知らないの？ あの女、双輝の家に上がりこんでいるのよ！？」

「そりゃあ、知っているが……」

「憎いわ……」

「つたく……」

第二十五話 練習

家に帰ると、妙にニヤついたお三方。スイセツは相変わらず、無表情だけど。

「な、なによ、みんな!」

「どうだった? 服屋」

「え・・・?」

ガスイがニヤニヤした顔で聞く。呆然とする銀葉にさらにヒコウが詰め寄る。

「だからどうだったよ、アソコ!」

訳がわからないでいると、クレハが確信の一言を発した。

「双輝に言っても判らないことだけどー? どうだった? あそこの娘っこ!」

イラッとするのを感じた銀葉に納得したらしく、みんな笑っていた。双輝が、外に来るようにと言ったのでそれについていくと、家の裏側に案内された。

「銀葉は舞いをしたことはあるか?」

唐突にそういわれ、首を横に振る。

「そうか・・・」

「舞ったことはないけど踊った事はある・・・」

「・・・? 踊り?」

「うん。私の世界では・・・その・・・私、踊る役立ったから・・・」

「踊り・・・今出来る?」

「え・・・あ・・・うん」

とりあえず、春を踊ることにした。踊っている間に気づいたこと。

「これって『舞い』じゃん・・・」

踊り終わって双輝を見ると少し驚いた顔をしていた。

「銀葉? それは何処で?」

「え……？家で……」

「…………そう。今銀葉がやったやつって言うのは、こっちじゃ巫女様が四季神様に対して舞う、『春風』という舞だよ？」

「え…………？」

双輝の言葉に少し驚いて固まっていると、ガスイがケラケラ笑いながら来た。

「やっぱり銀葉は特殊な奴ってことか？巫女様の舞ができるんだからさ」

「そうだな。センスがあるし、組舞もすぐできるようになると思うんだよね」

急な話の展開についていけない自分が悲しいと、思う銀葉だった。

日が傾き、橙の空に染まったころ、仕立て屋の綾が服を持ってきた。

「出来上がりました」

戸を叩いて、そう言っていた。ヒコウが顔を出すと、少しだけ驚いた顔をして、にこやかに笑った。

「ヒコウ。これ、双輝に頼まれていた奴なんだけど…………？」

「ああ、ありがとう。渡しておくよ」

「……双輝は…………？」

「裏で舞の特訓！」

横割してきたクレハが嬉しそうに言った。それを聞いた綾は不機嫌そうな表情に変わった。

「そう」

それだけ言うと、背を向けて歩き始めた。

「こりゃあ、乱闘がおきそうだねえ」

「乱闘！？やるの！？」

ヒコウの言葉に嬉しそうにクレハが反応した。

「お前の考えている乱闘じゃないだろう……」

ガスイが裏から戻ってきて突っ込みを入れた。違うと知り、口を尖

らせるクレハ。

「女同士の不気味で陰険なネチネチ、ネチネチ・・・」

「お前、シバクよ？」

「ごめんごめん。でも事実だろう？ 銀葉と綾と」

一瞬、空気が凍った。

「銀葉の圧勝だな」

「だな」

そう解釈して、みんな飽きたように話をやめた。その話を聞いていたスイセツだけ、ため息を吐いていた。

息を切らしている銀葉に安否を尋ねている双輝のところにスイセツがきた。

「どうした？ めずらしなあ？」

「仕立て屋がきた。服ができたと、渡しに」

「そうか。報告ありがとうございます」

「・・・別に」

「はあ、はあ・・・。私・・・できるかな・・・？」

「大丈夫だよ。なかなかいい感じだよ。もう少し練習すれば基礎はできるようになるさ」

「素人だと知っているんだから無茶する必要はないだろう・・・」

「あ・・・はい。ありがとうございます。え？」

銀葉は声が少しだけ漏れた。相変わらず、双輝とスイセツは何かを話しているようだけど、今の銀葉にはそれが聞き取れないくらい驚いていた。最初に、双輝が銀葉を慰めるように言ったことは理解ができたが、その後にももうひとつ、慰めの言葉が入った。この場にいるのは、銀葉と双輝と、そしてスイセツ。この言葉を発したのはスイセツだ。スイセツも、こんな様なことを言ってくれるのかと、結構驚いたものだった。

「それじゃ」

「ああ、ありがとう」

「双輝！ 大変だ！」

スイセツが家に入ろうと、一步踏み出した所で村の人が飛び込んできた。その慌てぶりは異常なまだった。

「み、巫女様がいなくなってしまった!!!」

「?!」

双輝とスイセツはその言葉を聴いて硬直した。銀葉はぽかんとしていた。

「スイセツ!」

双輝の掛け声と共に、スイセツは急いで家の中に飛び込んでガスイをつれてきた。そして、状況がわからないまでも、察したガスイが刀に成って双輝の手の中に納まった。そして、スイセツは、銀葉の腕を掴んで、家の中に引きずり込んだ。

第二十六話 異変

「ちよっ!?!何・・・?!」

「・・・」

黙って家の奥へと進んでいくスイセツに、少しムクツとした銀葉は声を張った。

「スイセツ!」

「!?!」

その予想だになかった声に驚いてか、スイセツは身を固めるように停止した。

「なに・・・?」

少し、予想外のスイセツの表情に戸惑いを感じながら、疑問を打ち明けた。

「巫女様がいなくなるって・・・?どういうこと?そんなにまずいことなの?」

「・・・説明は奥に行ってからではダメか?」

「・・・結構です。すみません」

スイセツの声をこんな間近で聞くのは初めてだった。何か胸の辺りに違和感を覚えた。

「ガスイは?」

「双輝と共に」

「・・・何があった?」

「巫女様がいなくなったらしい」

「?!」

スイセツの言葉を受けてヒコウもクレハも異常なまでに驚いていた。軽くいらだちながら、そわそわしている銀葉にスイセツが気づいて、ヒコウとクレハに目で合図をしていた。

「この世界じゃ、巫女様がとても大切に扱われていることは知っているでしょう?」

クレハが確認を求めてきたので、それに軽く頷いた。

「で、その巫女様に対して、必ずしもベストな状況でいて頂かないとならないんだよ。情緒不安定なんてさせてはいけない。だから、もし今回のこの巫女様がいなくなられてしまったのが、巫女様の意思であった場合、この村の人間は巫女様を無碍にしたと咎めを受けてしまう」

「はたまた、そうでなく。誘拐をされてしまった場合は、その村にいた護人が不甲斐ないと咎めを受けてしまう」

「・・・！」

一瞬、冷たい空気が流れた。銀葉も硬直していたことは自分でもわかっていた。

「どういうことか、判るよね？」

「・・・うん・・・」

「それでね。もし、誘拐だったとして・・・。ありえるようなことじゃないんだけど・・・」

「過去にも例が数件ばかりあったから怖いんだ」

「何が・・・？」

ヒコウとクレハは恐怖からか、軽く震えて喋らなくなってしまった。首を傾げる銀葉にスイセツの冷たい声が届いた。

「殺されていた、ということも考えられる」

「！」

言葉が詰まった。スイセツの言葉を受けて頭が真っ白になった。

「そうなった場合、咎めは誰に行く？」

「・・・護人・・・」

「その通り。ただ、今はこの村にはもう一人護人がいるから・・・。どうとも言いがたいが」

「どういうこと？」

スイセツはついと、その冷たい視線を銀葉に向けた。銀葉はドキッとした。心の奥まで何か冷たいものがコトンと落ちてきたような感覚。そしてこの時初めて、スイセツと目が合ったことを理解した。

「根本的に、巫女様をここまで護衛してきた護人が『留まる』場合、その村でも巫女様の護衛を9割負担する」

「そうなの・・・？じゃあ・・・双輝は・・・？」

「だから双輝も安心していたんだろう？それに、この村の近くの森は奴が陣を張っている。油断したんだろう」

「やつ・・・？」

「がんゆだよ・・・」

震える声でクレハが答えた。ヒコウは黙然としている。

「・・・でも、他の人だってありえるでしょう・・・？」

「・・・？」

銀葉の言葉を受けてスイセツが本気で疑問の表情を浮かべたことに少し驚く。戸惑っている銀葉に、スイセツは何かを納得したように軽く頷いてから口を開いた。

「そうか。お前の世界ではありえるのか」

「え？」

「俺たちの世界で巫女様に己から触れるなど、言語道断だ」

「！」

「己から何の罪意識なしに触れることができるのは、妖怪か、四季神様の・・・この二つに一つ」

「あ・・・そっか！」

世界観が違うだけでここまで変わってくるんだ。恐ろしい・・・では、誰が、巫女様を・・・？いや、根本的に巫女様は己の意思でこの村を出たとする・・・？それは・・・。一体何を示しているの・・・？

走る足音に違和感を覚える。ガスイは刀から主人の命なしに人型へ戻った。

「ガスイ・・・？」

その行為に、双輝は疑問を投げかけた。

「双輝。何を無茶している？」

「・・・？」

「妙だ、お前。何かがおかしい。何をそんなに焦っている？落ち着けよ」

「……」

ガスイの言葉に双輝は押し黙った。あたりを見渡すと、限りない木々が覆っている。巫女様の気配を感じたといっただけで走ってきただが、ガスイからしてみれば、双輝が、無理しているように、焦っているように思えたのだ。

「……俺は、過去の過ちをまた犯したくないだけだ」

そう言い放った双輝の目に宿る光はガスイを再び刀へと成した。刀に成ったガスイを掴み、また巫女様の気配のある方向へと走り出した。

走り続けていると、小さな小屋のようなところに着いた。その小屋の中から巫女様の気配を感じた。双輝はガスイを強く握った。

『無茶だけはするなよ』

ガスイの声が双輝の頭の中に響いてきた。

「……ああ。判っているよ。冷静さを欠いて身を削るのは己自信だからな」

双輝は小屋の中へと足を踏み入れた。

第二十七話 搜索

アレからどれほどの時間が経ったか判らない。巫女様を探しに出て行った双輝が戻ってこない。不安を隠しきれな銀葉。ヒコウとクレハは村人と話をしている。だから今、家の中にいるのはスイセツと銀葉だけ。スイセツは基本、喋らない。だから何を思っているのかはまったく判らない。それでも、一言、大丈夫だと言ってくれたらどれほど気が楽になることやら。

「……」

軽くスイセツを見ると、少し銀葉は驚いた。目を閉じ、じっとしてはいるが、かすかにスイセツの瞼は震えている。

―双輝の四季剣で双輝を最も敬っているのはスイセツだ！

ガスイの言った言葉が頭の中に響いた。そうなんだ。スイセツが今の状況で一番辛いんだろうと、思い、今までの自分の考えを恥じた。

「……平気か？」

ぎよっとした。スイセツが自ら話かけて来た。

「う、うん……」

「双輝は……たぶん、大丈夫だと思う」

銀葉は心が大きく揺らいた。スイセツがそう言ってくれて、本当に心が落ち着いたが、スイセツは……。

「うん。そうだね。双輝だもんね」

しっかりと確かな返事をしたつもりだったが、スイセツの瞼は震えたままだった。

日が沈んでずいぶん経った頃、クレハの大きな声が村中に響いた。「巫女様連れて双輝が帰ってきた！」

村中の人間がそのほうへどっと集まった。巫女を抱えた双輝が息を切らして歩いてきた。その後ろを凄く暗い表情をしたガスイがついている。

「双輝！大丈夫か！？」

村人が声を掛けたが、双輝は細く微笑むだけだった。巫女は、くたつとし、目を閉じていた。

「・・・巫女様は・・・？」

「今は、寝ていらっしやるだけだ・・・」

ガスイが、説明した。それを聞いて、安心した村人は双輝に一人の人間を紹介した。

「も、護人の・・・汰由と申します・・・」

「・・・護人？」

ガスイが疑問を発した。どうやら、この護人は、銀葉が、家の中にいる時にやってきたものらしい。巫女を迎えに来た青年だった。低姿勢。

「ちっ」

近くで凄く小さな舌打ちが聞こえた。隣を見ると、噛み付きそうな目をしているスイセツがいた。

「スイセツ・・・？どうしたの？」

「・・・」

銀葉が質問をすると、スイセツは急に黙り込んだ。ヒコウが、銀葉の声を聞いて反応した。

「どうした？」

「スイセツが・・・」

「なんでもない」

「え・・・」

スイセツの違和感を覚えながら、巫女が寝間へと運ばれた。そして、もう夜も遅いということで、先ほどの護人、汰由が巫女を護衛することになった。

家に入った双輝は、一言も発せず、死ぬように眠ってしまった。

スイセツのとがめるような視線を受け、ガスイが口を開いた。

「小さな家があったんだ。その中に巫女様がいて・・・。双輝がその中に入った瞬間・・・」

ガスイの苦痛な表情に銀葉のほうがつぶれそうになっていた。

巫女を発見した双輝は、家の中に飛び込んだ。とたんに、砕けるように膝を折った。

「双輝!？」

人型に成ってガスイは双輝の安否を確かめた。症状は危険だが、命にまでは決してかわりない状態だったから、ガスイは一安心した。奥にいた巫女もそりそりとこちらに歩み寄ってきた。

「巫女様……。俺は、この護人の……」

「春ね。わかるわ……」

ガスイは少しだけ頭を下げた。

「申し、わけ、ありません……」

苦痛の中双輝が声を発した。巫女は首を振っていた。そして、そつと、双輝に触れた。

「ここにある結界を破ることがあなたにできますか？」

「はい……」

双輝は立ち上がると、荒れた息をそのままにし、結界を破った。そして、巫女を連れて外に出た。途中で、巫女の体力が切れて地面に座り込んでしまった。

「巫女様……。大丈夫でしょうか……?」

「ごめんなさい……。貴方がたと違って……。体力なくて……」

「いえ。巫女様。触れてもよろしいでしょうか？」

「ええ」

双輝は巫女の許可をもらって巫女を抱えた。そしてガスイを人型にし、走り出した。

スイセツはいまだに腑に落ちないという表情で固まっていた。

「巫女様、ご無事でよかった……。でも、双輝は……?」

クレハの心配そうな顔がガスイに向けられた。

「問題ないと思う。ぐったりはしているが、寝ればすぐに回復するだろうな……。ただ、気がかりなのは……。あの結界は確実に護人のものだったんだ……」

「なるほど。それでそんなにもお前は沈んでいるわけか」
スイセツが納得の言った声を上げた。それに対してガスイは小さく
頷いた。

第二十八話 比較

朝になって、双輝は目を覚ました。まだ体の脱力感から開放されてはいないが、昨日の状態よりははるかに良くなっているので安心していた。外に出ると、朝もやで視界がかすむ。冷たい空気が体を包む。小さく深呼吸。

「おはよう。体はもう平気？」

こんな時間から声を掛けられるとは思っていなかった双輝は少し驚いた表情を見せたが、すぐに笑みを見せた。

「おはよう。もう大丈夫だよ。心配かけてすまなかったね」

銀葉はその言葉を受けて嬉しそうに笑った。

「早いね？」

「双輝もね。私は、何だろう……。なんだか眠れなくて……」

「……俺のせいかな？」

「そんなんじゃないよ！　なんだか……妙に嫌な予感がして……」

「

「そうか」

しばらく無言で二人並んで立っていた。太陽がこの地に顔を出し始めているのを感じた。そんなときだった。

「朝早くからおアツいねえ？」

突如した声の主はヒコウだったが、その後ろでニヤニヤ笑うガスイと、無駄なハイテンションのクレハがいた。

「な？！　べ、別にそういう……！！」

「冗談で言えることじゃないぞ」

「銀葉はいいんだもん！」

クレハが双輝の言葉を否定していた。確かに、銀葉は以前にみんなに言って聞かせた。自分は、巫女様ほど偉くないし、何より育ってきた環境が違うから、四季剣のみんなと同じよなあ使いのほうが慣れている！と。だからってねえ？

「で？体調は戻ったのかい？」

「ああ。本調子までは少し時間がかかりそうかな・・・」

「でも、良かった。少しはましに成ったわけか」

「ああ。悪かったな」

ヒコウは笑うとクレハと一緒に中に入って行った。

「双輝・・・。俺はお前の四季剣なのに・・・護れなくて・・・」

「いい。アレは俺のミスだ。お前は誰にも咎めることはできないよ。勿論、自分自身もな」

「・・・ごめん」

「受け取っておく」

ガスイは苦そうに少し笑うと、家の中に入った。

「・・・主を護れなかったから悔しいの・・・？」

「そうなんだろう。俺の持つ四季剣は、珍しいタイプだね。四季剣にここまでの『意思』はないんだよね」

「そうなんだ・・・！」

双輝の表情はどこか遠かった。

ダイブ村の中が賑やかになってきた。巫女が、そろそろ出発するという知らせを聞いて、みんなで出迎えに向かった。巫女の表情は苦痛そうだった。あんなことがあったためにすぐにこの村を出ることになったのだった。舞の方もそれでなくなったという訳だ。双輝がふらふらっと、巫女の前まで歩いて行った。

「巫女様。お護り出来なくて、申し訳ございませんでした・・・」

「護人・・・。いいえ。大丈夫よ。あなたが悪いわけではありませんそんなもの。お顔を上げなさいな」

「しかし、護人は巫女様を護って・・・」

「いいの。大丈夫よ」

巫女はさっきまでの苦痛な表情が嘘みたいに爽やかに笑って見せた。双輝はこれ以上は巫女に対し、失礼だと悟り頭を深々と下げて引き下がった。護人、汰由も、少々辛そうな表情を浮かべていた。そんな汰由に対しても双輝は頭を深々と下げていた。

巫女が村からいなくなってすぐに双輝は動いた。妖怪のほうの森へ足を運んでいた。村人も不安そうな表情で見つめている。

森に入って数分、双輝は一人の人間を抱えて出てきた。銀葉は護人だと理解できた。以前、巫女をこの村まで連れてきた護人。確かな名前を……。

「相栞さん……。しっかりなさってください！」

そうだ、さがる。3本の四季剣を有する高飛車な護人だった。それが一体なぜ……？

「う……」

相栞は目を覚ました。大丈夫ですか？と、村人や双輝が呼びかける。それに多少応えてから再び意識を手放したようだった。

相栞が気を失ってから、ずいぶん時間が経った。目が覚めたとの報告を得てそこへ向かった。その際、スイセツが行くのを拒否した。双輝は無理には、と言ってスイセツを家に置いた。

「ああ、あんたが助けてくれたんだってな……。悪かったよ」

「いえ」

この相栞という人物は、双輝が2本しか四季剣を持っていないと思いついて入っている。村人も双輝がそれを望んでいると知っているからあえては何も言わない。だが、それあってか、根本的にそういう奴なのか、相栞は双輝に対して、ずいぶんと偉そうである。

「巫女様を護ることが出来なかった……」

相栞は小さな声でそういった。双輝と同じように巫女を発見したが、中に入らず拒まれたという。小屋に張ってあった結界に押し退けられたらしい。そのダメージで気を失ってしまったと言う。

「なぜ、貴様は入れた？」

相栞の質問。当然だ。お前と双輝じゃ出来が違うんだよ！その場にいた殆どがそう思っただろうが、双輝だけは爽やかに笑って応えた。

「貴方が結界を緩めてくださったおかげだと思います」

「え……？ああ……ああ！そうだよな！　だろうなっ！」

相栞は偉そうにふんぞり返った。

―テメーシネー!!!

銀葉は心の奥底でそう思った。

家に戻って、銀葉はさっきの怒りを四季剣のみんなと爆発させた。

「アイツ何様!？」

「俺様!？」

「それでも護人!？」

「調子にノンなよ!？」

「・・・落ち着けて・・・」

双輝の呆れたような制裁が降りる。スイセツは静かな目でこちらに向いている。

「スイセツはなんとも思わないの?! 双輝を馬鹿にしたような目で見るんだよ!？」

銀葉はスイセツにそう尋ねると、冷たい目が銀葉を射抜いて銀葉の中につめたい氷がゴトンと落ち入ってきたような気がした。

「俺は双輝を主として敬意を払っている。だからあの様な下種を前に切り殺しかねないからな。だからここにいただけだ」

スイセツのその発言はあからさまに銀葉たちを凍り付けた。

―ああ・・・一番怒っているのはスイセツだ・・・

と、いやでも思わされた。双輝はため息をついていた。

「はあ・・・」

「護人! 護人!」

相杵の声がした。双輝が外に出ると、話があるといって出て行った。

「何の話かなあ?」

クレハがつまんなそうに言っていた。

「どうせ、くだらない話だろう?」

この時の銀葉は何か妙に嫌な予感がしていた。コレは、巫女としての直感だろうか、護人としての本能だろうか。判らなかった。

第二十九話 誤解

日が高く上って真上に来たとき、双輝は表情を暗くして戻ってきた。そして、四季剣たちを見回して、ヒコウを選択して一言言いおいて家を出た。ガスイ、クレハ、スイセツは、硬直していた。言い置いた一言は。

「森へ行って来る」

銀葉はその意味がわからなかった。みんなに問うても応えてくれない。銀葉はどんどん不安が募っていった。

もうすぐ夕暮れ時になるという時、双輝が戻ってきたらしく、村がざわめいていた。それを確かめるために、みんな外に出ると、相杵が笑っているのが見えた。

「さすがだな！2本しか持っていない割にはお前、なかなか出来るじゃないか！」

は？どういう意味だ？理解できずに固まる。

「何があった？」

村人に小さな声でスイセツが尋ねた。

「聞いていないのかい？ 相杵さんが、双輝に妖怪を斬って来いと言ったらしいんだ」

「!？」

「それで、今斬ってきたらしいぞ・・・？」

「・・・そうか。ありがとう」

「いや」

双輝が妖怪を斬った？何？ 銀葉は頭が真っ白になった。何がなんだかわからなくて、銀葉は家に帰り逃げた。

「銀葉・・・！」

「ほうっておけ」

ガスイの反応にスイセツが止めた。

「双輝・・・ほんとうに斬った・・・？」

「・・・斬ろうと思っても、ヒコウが斬らせないんじゃないか？」
クレハの質問に不安に満ちた回答をガスイが言った。

「わからない以上、変な思考は持たぬほうがいい。今はただ、双輝を待つべきだ」

「おう・・・」

「うん」

スイセツの目に宿る光は一体何色だっただろうか。

長い時間待っていると青ざめた双輝がヒコウと一緒に戻ってきた。

「双輝！」

「ああ・・・。疲れた・・・」

「お疲れ」

「・・・話、しようか」

双輝はそういったが、銀葉は何か切れたように立ち上がって双輝の前にならずか歩いて行った。

「どうして?! どうして妖怪を斬ったの!?!」

「銀葉・・・あの・・・」

「冗談じゃないよ! 妖怪と仲良くなりたかったんでしよう!? なのに、どうして斬ったりなんかしたの!?!」

「・・・」

「裏切るようなことして!」

「違うんだ、銀葉・・・」

「違うくない! 双輝はやっぱり妖怪より人間のほうが大事なんですよ?!」

「銀葉・・・!」

「最低だよ!」

パシーンと、乾いた音が部屋に響いた。銀葉は双輝を叩いて家を飛び出した。その行為に双輝は苦痛に歪んだ顔をした。スイセツが立ち上がって銀葉を追おうとしたのを、双輝が止めた。

「・・・やめてくれ。俺が悪い」

「・・・・・・・・俺は、はつきりと物を言わなかった双輝を怒るぞ。そ

して、何も聞こうとしなかったあの女を憎む」

スイセツはそう言って別の部屋へと行ってしまった。

「あたしは追うよ」

ヒコウはそう言って家を出た。

「ガスイ、クレハ……。俺は、妖怪を斬ってなどいない……。二人は深く頷いた。

銀葉は泣きながら走っていた。息が切れて、苦しくて。膝が折れた。苦しい。苦しい。

「どうしたの？」

後ろで声がした。

「トキ君?!」

爽やかな表情をする青年、トキ。

「涙なんか流してどうした? せつかくの顔が台無しだよ?」

トキがそつと、銀葉のほほに触れた。気が緩んだせいか、銀葉からはさきよりも大量の涙があふれた。

「何があった? オレでよければ聞くよ?」

「私……」

銀葉は、経緯を時に話した。

「それで私は、双輝を殴って家も飛び出した。でも……」

「ソーキは妖怪を斬っていないだろう?」

トキは銀葉の言葉をさえぎってそう言った。銀葉は驚いた。

「な、何で判ったの?!」

すると、トキはきょとんとして固まった。トキの中では、『しまった! 失言だった!!』と、焦っていた。だが、銀葉にそれがわかるわけもなく。

「泣き方と語り方かな?」

トキはそういった。

「ソーキを殴ったことを悔いているようだったからさ」

「あ……。うん。ヒコウが追いかけてきたんだ……」

「双輝が妖怪を斬る? 出来るわけじゃないじゃん。そんな事も判らない

で最低はどっちだ？

ヒコウはそう言って踵を返して姿を消した。

「大丈夫さ。ソーキはそこまで心の狭い奴じゃないし、四季剣たちだってそうさ」

銀葉は言い切ったときに少しだけ疑問を感じた。しかし、この時の銀葉は大きな過ちを犯していた。気づかねばならないことに、銀葉は気づいていない。

「だから、気にする必要なんてな・・・」

トキの言葉がここで切れた。トキを見ると鋭い目つきでどこかをにらみつけた。

「と、トキ君・・・?!」

すると、トキは何も言わずに銀葉を自分の胸元に引き寄せた。頭をしっかりと持って。その行動に驚いて、トキの名を呼ぼうとした瞬間、凄まじい爆発音が当たりに響き、地面が大きく揺れた。

「何の音?!」

「爆破だ・・・」

「え?」

「どこぞの馬鹿が妖怪に喧嘩を売ったらしい」

今までに見たことのないくらい凄まじい目つき。それに驚いている銀葉にコロッと表情を変え、声を掛けた。

「この森を出てソーキの所にいきな。オレも準備が出来たら追いかける」

「う、うん・・・」

銀葉は森から出るために必死で走った。

第三十話 捕虜

森を出て目に飛び込んできたのは、右腕、左腿を負傷した双輝だった。

「銀葉！無事でよかった・・・！」

傷で痛いだろうに、それを隠すように双輝は銀葉の所に来た。

「だ、大丈夫！？」

「ああ、平気だよ」

「・・・双輝、さっきは叩いてごめんなさい・・・」

「気にしなくていい。大丈夫だから。俺の説明が悪かった。後でちゃんと説明するから、今は・・・」

双輝は苦痛に顔を歪めた。

「双輝・・・？」

「相戸が森に爆弾を仕掛け、それを今、爆破させた。それだけじゃない・・・！森にいた妖怪・・・。穉瑳を捉えている状態なんだ！」

「はい！？」

双輝の言った言葉を理解しきれない。そんなことが、起きたら・・・あの、妖怪・・・玩愉はどうなる・・・！？

双輝と妖怪のいる森のほうへ向かった。すると、泣き叫ぶ穉瑳の姿が目に見え込んだ。

「いや！助けて！！離してよ！！いやぁ！！！！」

穉瑳のその姿を見て胸が苦しくなった。相戸はそんな穉瑳を軽く叩いて黙らせた。

「妖怪の癖に泣き喚くなど、情けないな！」

「う・・・う・・・助けて・・・」

双輝に声を掛けようとしたが、すでにそこに双輝はいなかった。双輝は相戸のほうにいて、穉瑳の開放を促していた。

「今すぐ、その妖怪を森に返せ！でなければ本当にまずいことが起

きるんだ！返してやってくれ！」

「なにをそんな……。護人として、情けないな？」

「俺たち護人は、あくまで『護る』仕事だ！率先して妖怪を斬るところじゃない！」

「そうだが、妖怪は村に害を与える。だから斬るんだろう？」

「違う！お前のしていることはそうじゃない！」

「貴様、誰に物を言っている？」

「ぐっ……。失礼……。貴方のしていることはただ、悪戯に妖怪を斬っているだけです！こんなことさえしなければ妖怪はこの村を襲わない！いつもそうだから！」

双輝の悲痛な声を聞いて銀葉は少したじろいだ。いままで双輝がこんな表情をしたことなど、なかったから。こんなに必死な双輝をはじめてみたから。

「だから！もう、これ以上は森に手出しをしないでくれ！その妖怪を開放して！」

「……。何を焦っている？何か恐怖に感じることも有るのか？」

相杵の一言は確実に双輝にとって凶星だったようだった。双輝は言葉を濁らせた。

「どういうこと……。？双輝はどうしてあそこまで焦っているの……。？」

銀葉は先ほど来たガスイに質問をした。

「……。玩愉、だろうな……。？」

「……。そっか……。？」

緊張しているガスイを見て、玩愉が何をしてくるかわからない恐怖に身を震わせる銀葉だった。玩愉は悪い奴じゃない。でも、己の護るもののためなら、誰だって、誰にだって牙をむく。だから……。怖い。

「はん！情けない！この森に住む妖怪が怖いのか！？護人が聞いて呆れる！村の集！？貴様らの村を護っているこの護人はただの腰抜けだぞ？こんな奴にこれからもずっと任せておいていいのか？

いつか大変なことになるぞ？今までが大丈夫だからって、コレからが大丈夫などという確信が妖怪相手に何処にある！？え？」

相杵の絶叫を聞いて、村のものたちは、困った表情を浮かべた。双輝の事は知っている。しかし、相杵の言うことも正答だ。どうしたものだろうか……。

双輝の表情はとにかく重い。おそらく、玩愉のことを考えてなんだろうが……。双輝がこの場に來てから穉瑳は叫ぶのをやめていた。とにかく、その穉瑳を早く開放しなければ、本当に大変なことになってしまう。ならば……。

「貴様！？何をしている！！」

双輝は相杵の目を盗んで、穉瑳の開放に急いだ。近くにいたヒコウを刀に成し、拘束しているものを剥ぎ取った。

「あ……あり……」

穉瑳が礼を言おうとした直後。双輝の腹部を銀の鋭いものが貫いた。その痛みは想像を絶するものだったろう。それを目の前に穉瑳は声をなくし硬直していた。

「くっ……」

相杵は双輝に突き刺した四季剣を勢いよく引き抜き、それが原因で双輝は声を漏らした。双輝は腹部を押さえ、膝を折った。慌ててスイセツが駆け寄り、ヒコウも人型に成り、双輝の安否を確認していた。クレハはガスイの後ろにいた。ガスイは双輝が刺されたというのに、向かおうとしなかった。

「行かないの……？」

銀葉は聞いた。主の危機に駆けつけなくていいのかと。

「……ヒコウと、スイセツがいる。なら、俺は銀葉を護るのに徹する」

その言葉を聞いて銀葉は力が入った。主が心配なはずなのに、自分が弱いせいで……。

「なら、一緒に行こう……！？そうしたら……」

「今の相杵は何をするかわからない。近くにはお前を連れてはいけ

ない」

いつもより冷たい言葉。一瞬、スイセツが喋っているんじゃないかと錯覚したくらいだった。そして、銀葉は傍と思った。自分は、双輝を殴ったんだったと。

「貴様は馬鹿か?! 妖怪を離してどうする?!」

「この妖怪を離さないと本当にこの村は壊滅する! 断言する!」

相戸と双輝の口頭でのやり取り。穉瑳はそれを見てただ震えているだけだった。

「それはどういうことだ? え?」

「それは・・・」

言葉を切って双輝は硬直した。相戸は次の言葉を待っていたが、あまりに双輝が硬直しているので、声を掛けた。

「それは何だ?」

「・・・まずい・・・」

「は?」

双輝は勢いよく、後ろを振り向いた。相戸もそっちを見た。だが、何もいない。一体・・・。

「兄さま!」

穉瑳の声が鳴った。相戸はそれに少しだけ驚いていた。

第三十一話 怒り

森の奥からゆっくりと姿を現したのは、玩愉だった。穉瑳が駆け寄ると、その安否を確認し、無事だと知り、ため息をついた。

「ふう・・・」

「待て！その子は無事だ！ちゃんと開放した・・・！だからここに手を出すな！」

双輝は玩愉の前で声を張った。体中傷だらけだというのに。

「・・・貴様、一体その傷はどうした？」

「・・・なんでもない。とにかく、ここには一切手を出すな。森だって無事だろう？！」

双輝の言葉を軽く聞いて玩愉は目を相杵へと移した。

「お前！妖怪か！斬るぞ！」

「・・・なあ。ああも威嚇している奴にも手を出すなというのか？大切なものを奪われた挙句、ここまで傷つけておいて？」

玩愉は穉瑳の目に涙がたまっているのを見ながら双輝にそういった。

「・・・頼むから・・・」

「その傷はどうしたのか、応えろ」

「・・・その護人に斬られたものだ」

「はん！違反を犯したって言うのか？護人は護人を斬ってはならないんだろう？」

「違う！正当な理由があれば斬っても構わないのさ！」
相杵がほえる。

「ほう。俺たち妖怪には貴様らほど難しい規則などない。だから、俺の激情に任せて貴様を殺しても構わないか？」

「何を言う？貴様程度など、簡単に勝て・・・」

「黙れ！」

その場にいた全員がこの一言で凍りつた。一番驚いている様子を見せたのは、四季剣のみんなだった。『黙れ』と叫んだのは双輝だ。

ピリピリと感じるこの痛みは双輝の力なのだろうか・・・。

「な・・・?! 貴様! 俺を誰だと思って・・・」

「いい加減にしろ、下種が!!」

双輝の二度目の暴言に、さすがの相朽も身を引いた。銀葉とガスィ、クレハは双輝の怒りを感じた。ヒコウ、スイセツは近くにいます分、より強くそれを感じている。

「たかが、3本持っているからと言って調子に乗るのも大概にしろ！」

怒号を上げる双輝を、驚きの表情で穉瑳は見返していた。玩愉は平然と双輝を見ている。

「た、たかがとは何だ!?!」

「貴様のような者が3本持てることが不思議で仕方ないがな!?!」
だが、たった3本しか持てぬような分際で、この妖怪に勝てると思
っているのか?! それとも、レベルの違いがまったく判らないのか
?! そこまで貴様は馬鹿なのか?! 少しは頭と力を使って格の差を
考えて・・・」

激しく怒号を上げる双輝の言葉をとめたのは。

「落착着け、アホ」

双輝の後ろか左の頭を軽く小突く玩愉。

「・・・!?!」

「はあ。もういい。手出しはしない。このまま森へ戻ろう。貴様が
そこまで激情に流されるとは思わなかったな。まあ、おかげでこっ
ちも冷めたわ」

「が・・・」

「だが、コレだけは覚えておけ? 今回ばかりは、引いてやる。
じゃな」

玩愉はそういうと、穉瑳を抱えて森の奥へと入っていった。息を切
らして膝を折った双輝を抱えるようにスイセツが駆け寄った。ヒコ
ウは双輝と同じように膝を折っていた。

「らしくない・・・」

スイセツの一言が双輝の表情を曇らせた。

「お、おま・・・な、何を・・・」

言葉をうまく発することの出来ない相杵を双輝は苦しそうな目で見つめた。

「き、貴様！ 一体・・・」

「・・・」

双輝は無言のまま立ち上がった。スイセツが援助しようとして、いい、と止めた。そして、ふらっとした足取りで村の衆の前に進み出て頭を深く下げた。

「申し訳ない・・・。いつか言おうと思っていたんだが・・・。この森に住む妖怪で最も強いのがさきの者だ。そして、あの妖怪は、さほど悪い奴じゃないんだ・・・。こっちが下手に手を出さなければ絶対に手を出しては来ない・・・！俺は・・・奴と・・・共にいることを選んだ・・・。だから・・・この森の妖怪を恨まないでほしい・・・」

双輝の言葉に村のものはしばらく黙っていた。銀葉は双輝の表情を見ていられないほど苦しくなった。妖怪は毛嫌いされている。それは知っている。だから、双輝も言い辛かったんだ。村の者たちは妖怪を受け入れてくれるとはあまり思えなかった。しかし。

「だから、今までも、この村には妖怪が襲ってこなかったんだな？」

「この前来た妖怪は異国の妖怪だったしなあ？」

「双輝の言うことだもんな」

「信じる価値は大いにある」

村の人たちは次々にそういった。双輝はほっとした表情を浮かべて地面に座り込んだ。

「双輝。今までその荷を抱えてきたんだろう？辛かったろうに。俺たちはいつでもお前の味方だ。何も苦しむ必要などなかったのに」村のものにそういわれ双輝は嬉しそうに笑った。と。

「何を考えている？！妖怪は人を喰らい、貶める生き物だぞ！？」

「この森の妖怪は違うんだと、言っただろう」

「同じだ！ 仕方がない……。この方法は使いたくなかったが……」

相杵は四季剣を構えた。双輝の肢体を斬ってきた剣だ。

「貴様はこの剣の能力によって朽ち落ちる！」

「何を……？」

「はっ！」

相杵の気合の籠った叫び声が空を割った。その瞬間、双輝は何かにはじき返されるように吹っ飛んだ。そして、地面に叩きつけられた。

「双輝！」

慌てて銀葉は双輝の元へ走った。ガスイが予想以上の銀葉の速さに驚いて慌てて追った。しかし、追いついた時には双輝の元だった。

「くっ……。何だ……。？ 今のは……」

「くくく……。引力を自在に操ることが出来るこの四季剣に斬られれば、引き寄せることも、遠ざけることもたやすく出来る。さあ、護人。今から俺が力をこめたらお前はどのようなだろうな？」

「……？」

「自分の背後に何があるかを、理解したらどうだ？」

相杵のその言葉で、全員が双輝たちの背後を見た。そこには凜とした静けさを誇る森がある。それを確認した直後、ガスイが慌てて双輝を移動させようとしたが、相杵のほうが早く、双輝は森の頭上へと吹っ飛んだ。

「双輝！！！！！」

声を張ったのはガスイではなく、スイセツだったことに気づいて、慌てて振り向いた。すぐ目の前まで来ていて驚いた。

「貴様！」

スイセツが怒りをあらわにしている。ガスイが慌ててスイセツの腕を掴んだ。

「落ち着け、スイセツ！ 気持ちはわかるが！」

「黙れ！」

ガスイの腕を振り払い相牀にむく。

「・・・そういえば、お前。よくあの護人というな・・・？何者だ？」

「貴様に語ることなど何もない」

スイセツが相牀に対し、明らかに敵意を示している。

「今すぐ、双輝をここに戻せ！」

「無理だね。このままくたばるのを待つき」

「貴様・・・！」

「お前は何だ？応えによつては助けてやるぞ？」

「助けるだ？何を世迷言を。双輝をここに戻せ。コレは願い出などではない。命令に等しい」

「・・・嫌だね。拒否する」

「・・・」

「スイセツ！落ち着きなつて！それじゃ埒が明かない！」

ヒコウも来て、スイセツを止めに入つた。クレハは銀葉の服を掴んで森を見つめている。

「あ、あのさ・・・あの森って・・・何なの・・・？」

「・・・！銀葉！お前なら、入れるだろう！？あの森に！」

「へ・・・！？は、入れますけど・・・？」

「双輝を探してきてくれないか！？今すぐに！」

「え・・・あ・・・わ、わかつ・・・」

「必要ないよ」

この場に合わないほど静かで落ち着いた声。しかし、銀葉はその声に聞き覚えがある。だって・・・。

第三十二話 瀕死

「トキ君！」

トキが双輝を抱えて森から出てきた。

「な?!」

全員が言葉を失った。

「どうして・・・巫女様じゃないのに、森に入って平然としてられるの・・・？」

クレハの震えた声が耳に入った。銀葉は頭に疑問を浮かべたが、それどころではない。

「トキ君！双輝は・・・?!」

「・・・。判らない。どうなるか・・・」

「え？」

双輝を見ると、異様なまでに汗をかき、苦しそうに息をしている。意識がすでにないような気がした。

「双輝・・・？ちよつと・・・双輝?!」

「はっはっはっ！」

相戸の高らかに笑う声が耳入り、鋭い目つきを相戸に向けた銀葉。

「えらぶった口を利く割には弱いな？」

「何を・・・」

「銀葉。落ちいて。双輝をお願い」

「と、トキ君・・・」

「オレがやる」

トキはそう言って双輝を銀葉に預けると立ち上がって相戸の少し前まで歩いて行った。

「銀葉・・・あの人は何者・・・？」

ヒコウが尋ねてきた。

「トキ君・・・。こっちに來て知り合った人で・・・凄くいい人だよ?」

「そう・・・」

トキは相杵の前に剣を構えるそぶりすら見せない。

「はぁ。とんでもないことをしてくれたね。まったく面倒だ」

相杵に向かってトキがそういった。相杵は凄まじい目つきで睨む。そして、剣を振り上げ、トキに向かって振り下ろした。

「トキ君!」

銀葉の心配など他所に、トキは相杵の剣を片手で軽く止めた。

「なっ!？」

言葉を詰まらせた相杵は剣がまったく動かないことに気づいてあわてる。

「この程度でオレに挑むのはよしたほうがいい。身の安全を確保したいのなら、今すぐ戦意を消せ」

さすがに鈍感な相杵もまずいと判断したらしく、戦意を喪失したらしい。トキが剣を離すとすぐに剣は、小さなビー玉のような形になった。

「情けない」

トキはそうはき捨てると、相杵を束縛し、とある家の中に入れると、結界を張った。

「しばらくあの中で反省してもらおうでしょうか」

そして、村の人々を家に帰り、双輝を家につれて帰り、布団の上に横にした。

「それで・・・その護人さんは？」

この質問に、四季剣たちは一言も答えなかった。

「みんな・・・どうしたの・・・？」

「・・・ヤバイんだよ・・・」

ガスィが言う。

「え？」

「今の双輝は死ぬか生きるかの瀬戸際だ・・・。下手すれば一瞬で死ぬ」

この言葉がどれほど銀葉に衝撃を与えたことだろう。双輝が死ぬ？

そんな事は、嫌だ。前にもあったこの感覚。

「・・・神様なんて・・・いないんだ・・・」

祖母が死んでしまった後、本気でそう思っていた言葉。ここに来て神はいるかもしれないと思い始めていたのに。

「銀葉・・・？何を言っているの？四季神様は、本当にいるよ・・・？」

「じゃあ、どうして助けてくれないの？どうして人は死んでしまうの？」

「それが運命だから」

スイセツの言葉。

「人の生死にまで四季神様は関与したりはしない。四季神様はあくまでこの世の均衡を保つために存在している。それに、たとえ人の命をつなぎとめる力を持っていたとしても、だったら、一体誰の命を救えばいいんだ？この世には何千何万、数え切れないほどの人間がさまざまな理由で命絶えているんだぞ？」

スイセツの言葉は最もだ。

「でも・・・！人の命を救えないで何が神よ！」

「銀葉！」

ヒコウの声が銀葉にかぶる。

「だってそうじゃない！神なんて崇められていながら・・・！！」

「四季神様はしっかりとやっておられる！」

「でも！」

「銀葉の発言は最もだと思うぞ」

「トキ君・・・！」

「・・・貴様っ！」

トキの発言と銀葉の発言に対しての反応の違いがおかしい。銀葉に対しては少し宥めるような言い方だったのに。トキに対しては攻撃的な発言だ。

「だってそうだろう？まともに人を救うことすら出来ないのに、人々から崇められるなんて、四季神など、朽ちてしまえばいいのに」

「トキ君・・・？」

「お前、四季神様に対し・・・！！」

怒りを見せる四季剣。トキは平然としている。しかし、平然として
いるこの表情が一気に崩れ落ちたのは、思わぬ来客のせいだ。

「四季神を崇めている貴様らは所詮、その程度だろうな」

「玩愉！」

銀葉の声が思いのほか響いた。

「どうして・・・？」

「護人の気配が、妙に小さくなったから心配して見に来てやったの
さ。そしたらこのざまか」

玩愉はゆっくりと、双輝に近づく額に手を置いた。

「何をするんだ・・・？」

「何。軽く妖力を入れるだけだ。そうすれば中和作用が引き起こ
って体内から『毒物』が抜けるだろう」

玩愉の一言一言が重たく冷たい。その様子を軽く恐怖に感じている
のか、トキはかすかに震えながら見ている。

「トキ君・・・？大丈夫・・・？玩愉はいい妖怪だから、大丈夫だ
よ！？」

「ああ・・・そう・・・」

トキは震えを止めない。

第三十三話 四季神様

玩愉が妖力を入れ終わると、確かに双輝は楽に呼吸をしている。

「後は時間が解決してくれると思うぞ」

玩愉はそう言って、立ち上がった。そして、トキに目線を向けた。

「さて、四季神談義の途中だったな？ 割って入ってすまなかったよ」

「・・・玩愉は・・・四季神様を、どう思っているの・・・？」

「さてね？ 俺たち妖怪を封印した張本人だからなあ？」

挑発するような発言。四季神を崇める人間を憎む。

「なあ、トキい？ どう思うよ？」

「え・・・？ 玩愉と、トキ君・・・知り合い？」

「まあね」

「・・・どう、とは？」

「とは？ 何を聞きたいんだ？ 俺は、お前に四季神をどう思っ

ているのか問うただけだぞ？」

玩愉はトキに対し、挑発するように発言する。四季剣は硬直してそ

のやり取りを見ている。

「・・・四季神・・・？ そんなもの、消えてしまえばいい」

トキは玩愉から目を背けて小さな声で言う。

「ほう？」

銀葉は、この二人の関係が気になった。一体、どういう関係なのだろう・・・？

「玩愉・・・。その・・・申し訳なかった・・・。謝って済む問題でないことは判っている。でも、判ってくれ！？ お前たちを封印したのは、意図的じゃない！ オレは本当にお前たちを封印するつもりなどなかった！」

トキは苦しそうにそう叫んだ。 え？

「トキ君?!」

「そっかあ。お前ら知らないのか。だから、『ご本人』前に、四季

神談義が、出来たわけか？」

「え……？」

四季剣が確実に凍った。銀葉は呆然と目を見開いていた。

「トキ君……？」

「……そうだよ。オレは四季神だ」

「な……！？」

驚く銀葉に細く笑いかけると、トキは家をでようと足を進めた。

「おっと。待ちなよ、トキ。俺との話が済んでないぜ？」

「玩愉……」

「俺は結構、今、腹が立っているんだぞ？長い間封印しやがって」

「だからそれは……！」

「こんつの、どアホ！」

玩愉のほうが、身長が高いせいで振り下ろした玩愉の頭部がトキの頭部を強打した。

「う……！！！」

頭を抱えるトキ。ここは……笑うべき……？

「この引きこもりが！」

「う……あ……い……だ……」

相当、痛かったらしい。そんな、四季神の存在を見て、四季剣たちはどうしたらいいものか、困っている様子だった。

「お前が、俺たち全員を封印できるほどの度胸があるなんて思っちゃいねえよ、この馬鹿」

「……え？」

「俺が怒っているのは、貴様が引きこもっていたことだ。封印したことじゃない」

「がん……ゆ……？」

トキは異様なまでに驚いている。銀葉も、結構驚いていた。玩愉は、四季神を恨んでないなかったということか……？

「封印したことは確かに怒れることだが？んなもん、お前の口から一言、謝罪が聞ければいいと思っていたんだがなあ？でてきてみり

や何処にいるかと思えば、何だ？森の奥深くに引きこもりやがって！　ビビってんじゃねえよ、このどアホ！」

玩愉はそういうと、トキの返答を待ったために黙った。そして、しばらくの時間の後、トキが泣きそうになりながら玩愉に謝罪の言葉を入れた。それを聞いて、玩愉は肩を落とし、ため息をついた。

「いつでも来い。穢瑛も会いたがっているからな」
トキにそういうと、玩愉は姿を消した。

双輝が目を開けたのは夜が明けてからだった。星空の元で護人、相戸に体中を斬りつけられ、挙句の果てには『四季神の森』へ飛ばされて瀕死の状態になったのだから。今、こうして微笑むことが出来るのは・・・。

「玩愉には頭が上がりなくなってしまったな・・・」
嬉しそうに双輝はそういつていた。

双輝が気を失っている間に、銀葉は四季剣の全員に必死で謝った。「あなたたちの主である双輝を、何の話も聞かないで叩いてしまった・・・本当にごめんなさい・・・」

確かな話を聞いて銀葉は謝った。クレハが、教えてくれたのだ。双輝は相戸に『護人なら妖怪を斬ることなどたやすいことだろう？』
そういわれ、ある種否定することが出来ずに肯定すると、斬って来いといわれ、仕方なく森に入り糊草という糊のように粘り気のある赤い花があり、その粘液を剣に塗って見せたという。相戸はそれで満足していたらしい。そうだ。双輝が本当に妖怪を斬ることができるわけなどないのに。冷静に物事を考える癖をつけようと心に決めた。

「ごめんなさい・・・」
とくに双輝を敬っているスイセツに強く謝罪した。みんな許してくれた。

第三十四話 回復

双輝は肩をまわしながらぶつぶつと文句を言っていた。

「ったく……。俺の体も柔だな……。相応程度の攻撃であそこまで追い込まれるとは思ってもいなかったしな……。さすがに『四季神様の森』に入ったときは絶対に死んだと思った……。」「冗談はよしてよね……。あたしたちは本当にヒヤッとしたんだから……。」

「そうだぞお！ 普段冷静なスイセツがかなりキレちゃって大変だったんだぜ？ なぁ？ スイセツ？」

「ふん……。うるさい」

少し不貞腐れ気味のスイセツ。『四季神の森』とは、名の通り四季神が在する森のこと。そこに足を踏み入れることができるのは巫女と四季神の二つに一つらしい。（動物は別で）銀葉には巫女の力が備わっているから入ることが出来たという。そして、特に護人はそうなのだが、俗に言う、『神気』というものがあって、それに中てられ瀕死に追い込まれてしまうらしい。つまり、神の領域に足を踏み入れた大ばか者、ということのようだ。しかし、当の本人の四季神トキはそんな風には一切思っていないらしい。だから、己の放つ神気に中てられ命尽きそうになった双輝を見たら、苦しくなったといっていた。昔は玩愉とも仲が良かったようだが、一体何があったのかをトキは言わずに微笑んで森へ帰ってってしまった。

「ま、とにかくなんだ……。心配かけて済みませんでした」

双輝はみんなに頭を下げた。四季剣たちは静かに笑っていた。

「体のほうは平気なのか？」

ガスイが問う。

「ああ。少しだるさが残ってはいるが、問題はないさ」

双輝が応える。確かに見た感じからしてもだるさが抜け切れていない感じがする。ただ、それとは別に疲労を感じさせる。

「玩愉が、気になるなあ・・・」

双輝がぼそつと言った。それに反応してクレハが疑問のまなざしを送る。

「あの、玩愉だぞ？ただで俺を治してくれたのか・・・？怪しいだろう」

「・・・」

みな黙る。確かにそうだと頷く四季剣たち。銀葉はそのことがよくわかっていなかった。元来、妖怪は人を憎んでいると推察する。ただ、今回の玩愉の反応を見ると別に嫌っているわけではないと理解することはできたにしても、仲間を散々切り殺してきた人間たちに何の感情も持っていないとは言い切れない。そんな人間を、玩愉はあえて救いにわざわざ村へ入ってきた。下手したら、狩られる可能性も・・・まあ、玩愉にはないだろうけれど。とにかく。そういうたわけで妖怪側が自ら人間の世界に踏み込んでくることなど、ありえない。

「別にお前のためじゃねえよ」

「わあ!？」

銀葉の声にみんなが驚く。いや、その前の声かもしれない。

「玩愉?!」

双輝の声に玩愉は目の前にあたふたしている銀葉を見るのをやめてそちらに眼を移す。

「ふん。まあ、当然か。トキは森に？」

「ああ、お前が帰ったすぐ後に帰られたらしい」

「ほう。あの引きこもりめ」

「・・・」

遠くを見つめていった玩愉をみんな黙って見つめる。妖怪が、四季神を「引きこもり」呼ばわりとは。いや、そんなことを言える仲だということが、そもそもおかしい。呆氣にとられている面々に気付き顔をこちらに向けた玩愉が楽しそうに笑った。

「何か？」

「いや、お前と四季神様、一体どういう・・・」

「俺から言うつもりはない。聞きたいのならトキから聞くんだな。そもそも、お前を助けてやったのだって別にお前のためじゃない。トキを引き摺り出すためさ」

玩愉は楽しそうに笑みを浮かべながら話を進めていく。

「・・・ん？ いるのか・・・？」

「ほう、気付いたか。穢差がな。どうしてもというから連れて来たが、中には入ろうとしないんだよね」

玩愉が外へと通ずる扉に眼をやってつまらなさそうに言っていた。中に入れるように双輝が言ったが玩愉はそれを否定していた。そんなやり取りを見てそうと銀葉は外に出た。すると確かに、以前双輝と妖怪の住むほうの森に行ったとき現れたかわいらしい女の子が座っていた。

第三十五話 呼

「中に入らないの?」

「ひゃ!?!」

銀葉の声に驚いたらしく、穉瑳は見た目と同じようにかわいらしい声で驚いていた。

「ごめん、驚かすつもりじゃなかったんだ……」

謝る銀葉に笑いかけてきた穉瑳。それに答えるように銀葉も笑う。

「どうして中に入らないの?」

「兄様の話の邪魔をしたくはないの」

なんとも兄想いな子だろう。いや、そうではないな、と銀葉は思う。玩愉とて、この穉瑳を大事に扱っている。妖怪って怖いとかそういうイメージがあったけれど案外、仲間思いの強い種族なのだろうか。「兄様はトキと早くあってもっとちゃんと話をしたいみたい。でも、できない。トキったらぜんぜん出てこないから」

穉瑳が唐突にそんなことを言ってきたので驚いて眼を見開いたまま頷いていた。そんな様子を悟って穉瑳があせったように言葉を付け足した。

「あ、あんまり、言ってはいけないことかな……。兄様に怒られてしまう……」

「怖い?」

「怒れば、ね」

「怒るの?」

「ん……。よほどの事がなければ」

「優しいんだ?」

「うん!」

幸せそうに笑った穉瑳の笑みが銀葉の心も温かくした。

「別に中に入ったって話の邪魔になんてならないよ。こんなところにいたら風邪引いちゃうよ」

「風邪？引かないよ。別に寒くないもの」

「その薄着で!？」

穠瑳の服装は玩愉と同じように腹の部分に鎧のようなものをつけていて袖のない衣服だ。下も短めで模様のように靴が太ももまでかかっている程度。

「妖怪って、人間とは違って体感温度が強固なんだよ」

「へえ・・・って、私がそういうこと知らないの、分かるの？」

「え？」

「だって、普通なんでしょう？妖怪って。だから疑問な顔をするかな？って思っただけだよ」

「あ・・・いや・・・べ、別にそんなことは。不思議そうだったから答えただけよ？」

「そっか」

穠瑳が少しあせったようにうつむいたのはなぜだろうか。

「銀葉。外にいと寒いぞ？」

中から双輝が出てきて中に入るように促した。それに習って穠瑳も中に入ることを決めたようだった。

「兄様・・・ごめんなさい、私・・・」

「気にすることか？」

座っていた玩愉に穠瑳が言う。それに返した玩愉は見上げているはずなのにまるで見下ろしているような圧力があつた。

「さて。いくら俺でもあの森に入ったらたまらんな。トキを引き摺り出してきてほしいんだがなあ」

玩愉が言う。みんなの目が軽く流れる。それからふらふらと銀葉に目移る。

「はい？」

「こんなかじゃあ、四季神様の森に入れるのは銀葉だけだなあ」
ガスィが申し訳なさそうに言った。銀葉は首をかしげる。なぜ、そんな態度で回答したのか。

「まあ、いいじゃないか。お前、行って来いよ」

「……ふん。はいはい。行ってきますよ」

玩愉の物言いに腹立ったが、双輝を助けてくれた手前、苦情を言うわけにもいかずさっさか家を出て森へと足を運んだ。

「あの女、妙だな」

「銀葉？ そうだな、女性っぽくない」

「いや、そういうことじゃねえよ。俺がそんな下らんことに頓着すると思っっているのか」

「……じゃあ、なにに？」

「……」

玩愉はちらりと双輝を見てふんと鼻を鳴らすだけだった。

相変わらず凜とした空気。これが四季神の力なのだろう。初めて入ったときに気付かないものかと銀葉は考えた。探しても探してもトキは見つからない。まあ、森が広いから見つけるのも大変なんだけど。それでも、過去の二回、トキ自らこちらに会いに来てくれた。それなのに、今は姿を見せる気がまったく感じられない。きっと銀葉がこの森に入ってきた理由を知っているのだろう。

「う……」

銀葉は胸の辺りを押さえて急に苦しそうに呼吸を始めた。ついには座り込んで蹲ってしまった。

「苦し……い……」

ひたすら悶絶する。むせるような咳も出してげほげほと苦しそうに方を上下に動かす。

「大丈夫……夫……？」

トキの声。銀葉はがばつと顔を上げてトキの服をがむしゃらにつかむ。

「やっぱり見ているんだね？」

「え……演技……？」

「うん」

「上手いね……」

呆れたようにトキが言う。銀葉はにっこりと笑ってトキに笑顔を送

る。トキはそれを受けて苦しそうに笑う。やはりこの後の展開をなんとなく想像できているようだ。

「よし！！行こう！！！」

「いや、ちょ！！！」

裾をしつかりとつかんだまま銀葉は双輝の家まで直行する。

第三十六話 原因

双輝の家の前で一度止まってトキを確認するともものすごくいやそうな表情をしているのが見て取れた。

「そんなに嫌？」

「嫌」

「即答……。玩愉だって怒ってないのよ？」

「……。分かっているよ。分かっているけど……。あるでしょう。合わす顔がないって……」

「……。じゃあ、殴って顔変えてあげようか？」

「そういう問題じゃないでしょ……。なにその発想……」

銀葉は落胆しているときを無理やり家の中へと引き摺りいれる。

「あ、お帰り。早いね」

双輝が出迎える。そして後ろにいるトキを見て深々と頭を下げた。

「止せ。オレはそんな大それたもんじゃない……」

「救っていただき、ありがとうございました」

「助けたのはオレじゃない。むしろオレは……」

「貴方のおかげです」

双輝のどこまでも澄んだ心臓にトキは言葉が続かなくなった。中へ招き入れるとトキの目と玩愉の目が合致する。その直後、トキはきびすを返して逃げ出そうとした。

「おいおいおい。顔見て逃げるたあ、ずいぶん失礼なやつに成り下がったなあ？」

銀葉の目には映っていなかった。いつ、玩愉が立ち上がりトキの前に立ちはだかったのか。トキの顔を固定し、自分と目を無理やりにも合わせる玩愉。それから必死に逃れようとするトキ。その様子をどうするべきか必死に悩んでいる双輝と四季剣。銀葉は何をしたらいいのか分からずとりあえずじっとしていることを決めた。

「ぐ……。ぎ……。が、玩愉……。はなし……」

「お前が俺の前から逃げないというなら放してやる」

「わがった・・・わがったから・・・放して・・・」

玩愉はやっとトキを開放した。玩愉から目を背けながらトキはため息をついた。そんなトキの様子を確認してから玩愉が今度は双輝に向かった。

「ま、礼は言っておこう？お前のおかげでトキを引きずり出せたかな」

「いや、そういわれても、俺には何が何だか分からない状態だが」

「説明がほしいか？」

「当たり前だろう」

「ふん。トキ。お前がしてやれ。俺は面倒だ。聞いている」

無茶ぶりマックス。そんなことを銀葉は思うのだった。

トキは玩愉の申し出を渋々受諾した。座り込みうつむくトキ。それを柱にもたれながら腕を組んで見下ろす玩愉。この二人の関係は・・・。

時を遡る事うん千万。人と妖怪はともに生息していた。互いに干渉しすぎず一定の距離を保って均衡のバランスをとっていた。時に妖怪の力を借り、時に人の力を借り。そんな時勢だった。その仲を取り持っていたのが世の均衡を保っていた四季神。そしてその力を最も利用していたのが玩愉。

「おお、シキガミ。西の森のほうで揉めているぜ？」

「トキと伝えただろう。それに気付いたのなら行ってくれてもいいのに」

「なんでこの俺が動かなきゃならん？」

「その考えがお前らしいけど」

四季神、トキは玩愉の力を借りつつ貸しつつ、この世がバランスを崩さぬようにあちこちを飛び回っていた。そんな中。

「四季神様。もう、妖怪の住まう土地がございませぬ」

あふれかえった妖怪たちが生息する土地を失い始めていた。玩愉とも相談して考えた末、トキは妖怪の住まう土地を新設することを提

案した。多少ダメージを受けて疲労するがそうすることがベストだと結論づいた。無論、玩愉の力も借りながら。

広大な土地を新たに創り上げた。力を心底使ったトキは疲労の色が隠せていなかった。

「お前、弱いなあ」

「そういう玩愉だって結構力ないだろう、今」

「まあな。でもトキほど色はみせてねえ」

「あー、はいはい。そうですね」

トキは適当に返事をしつつ、心のそこから玩愉に感謝していた。この土地を作るのにも一人ではなしえなかった。

「兄様！」

「ん？」

「ああ、動けるようになったか」

「はい、兄様！」

「えと・・・？その子は？」

「妹だ。最近生まれた」

「穉瑳と申します！」

穉瑳は楽しそうに笑っていた。妖怪にも人と同じように心があり感情が存在する。それを無碍にしてはいけない。だから広大な土地を作った。玩愉とともに。

土地の状態も落ち着き、住めるまでになった。そこで、全国各地から妖怪を集めてその土地に移住してもらった。みな嬉しそうに笑っていた。

「トキ。これから人と俺らは・・・」

「もちろん。共存していく。昔は仲があまりよくなかった。これも全部、玩愉のおかげだ。本当に感謝する」

「別に。謝礼の言葉なんぞほしくないな」

「素直じゃねえな」

土地へみなが入っておのおの好きなことをしていた。

「さて。俺も入って様子を見てくるか」

「おう。感想頼むよ」

「苦情言ってやる」

「天邪鬼め」

玩愉は穢瑳をつれてその土地へ入った。おそらく、玩愉が最後の妖怪だっただろう。トキはその姿を目で追っていた。その姿がまさか消えるとも知らずに。

「どうなっているんだよ!? 開け! 開けよ!! 中には妖怪が・・・!」

追っていた玩愉の背が一瞬で消えたのに、トキは驚いた。慌てて近くまで駆け寄ると巨大な障壁が築きあがっていた。その壁を必死にたたきながらトキは叫び声をあげていた。中から音は一切聞こえない。上から見ても中は全て見えない。四方八方その障壁で囲まれている。何が起きたのか理解ができなかった。

「何だよ!? 何が起きて・・・!?!」

混乱しながらも必死になってその障壁を取り除こうとした。しかし。「ち、力が・・・足りない・・・!!」

土地を創るのに力を使ったせいでいつもの半分も力を出すことができなかった。無力の状態で障壁をたたくトキの手からは血が滲み出していた。そうして幾多の歳月が過ぎていくのだった。

第三十七話 夜

「どうしてその障壁ができたのかは、今でもわからない。そして、その時、オレの力がいつまでたっても回復しなかったことも、わからない……。でもそれは全て言い訳に過ぎない。だから……」
「うるせえよ」

トキの言葉を切って玩愉が放った。話を聞いていた双輝たちも玩愉のほうへ首をめぐらせた。

「だから。お前にそんな根性があったとは思ってねえよ。お前のせいじゃねえ。そのくらい分かっている。わかっているければ大嫌いなお前をあがめる人間どもなんぞ、当の昔に殺している」

玩愉の言った言葉をトキがどう取ったのなんて分からない。それでも、少なからず、嬉しそうな顔をしたのはきつと銀葉の気のせいではないだろう。

双輝の家でトキと玩愉と穉瑳は楽しそうに話をしていた。いや、玩愉は表情が読み取りづらいから楽しそうかどうかは定かじゃないけれど。

やっと完全に仲直りできたトキと玩愉はひとしきり話を終えると互いの森へと帰っていった。その直後だ。深くため息をついて後ろに倒れた双輝を見たのは。

「そ、双輝!？」

「あ、平気。大丈夫だよ、銀葉」

微笑んだ双輝の顔がどっと疲れを感じさせた。四季神であるトキが傍にずっと居たことで鋭敏な双輝の感性に疲労を与えたのだろう。

「俺達だってかなりきついって……」

ガスイが肩をすくめて言った。銀葉は何も感じない。感じ取ることができない。それでも、玩愉いわく、巫女の力も護人の力も備わっているという。それが一体どういうものなのか、到底銀葉には理解できない。

双輝はそのまま眠りについてしまった。ただでさえ、神気を浴びて壊れかけている双輝の体にその神気の根源が傍に居ては確かに疲労するだろう。眠ってしまった双輝をスイセツが大切そうに運んでいるのを見てなんとなくおかしくなった銀葉だが、ばれないように小さく笑った。

その日の夜。四季剣たちも剣になって休息をしているようでシンと静まり返った双輝の家。なんとなく銀葉は寂しくなった。自分の家族は今どうしているだろう。心配しているだろうか。いや、しているに決まっている。警察とか呼んでいるのだろうか。家に、帰りたい。家族に会いたい……。会いたい……。

そんな気持ちからか、そっと寝ている双輝の横に座った。しずかに眠っている双輝。彼は四季剣と共にあるが、親や友達と呼べる存在がいない。それが何を指すかなんて、今の銀葉には理解することも知ることもないと思っている。

「眠れないのか？」

すぐく小さな吹けば飛んでしまいそうな声が銀葉の耳に届いた。はっとしてひざ元を見るとうつすらと目を開けて心配そうな表情をしている双輝の顔があった。双輝がこんな顔をするべきではない。そういう顔をするのは今は自分のはずだと思った銀葉は、目元を綻ばせて笑いかけた。

「そういう訳じゃ無いの」

「……そうか。いや、不安そうだったからついね」

双輝のその表情に銀葉は何か嫌な予感を過ぎらせた。最近はこの状況に慣れてきたのか双輝の態度に疑問を持つことや驚くことが減ったけれど、さすがに今の双輝には不安というか、疑問というか、驚くというか。とにかく、そういった何とも言えない漠然としたものをたたき付けられた。

「どうしてそんな顔をするの？」

「え？」

「今までそんな顔したこと無いじゃない。私に気を使って？そんな・

・何て言うか・・・」

「恐怖」

突然したその声に驚いて一瞬飛び上がった。

「スイセツ・・・？」

驚きとも取れる声でその名を呼んだ双輝。スイセツは冷たい視線を双輝に注いでいる。

「珍しいな、眠りから覚めるなんて」

「お前が昏倒しているというのに、たやすく眠れる訳が無い」

「ああ、すまないな」

双輝の横、つまり銀葉の反対側に腰を下ろしたスイセツは双輝にそっと触れた。頬に触れて、首に触れて。

「熱はなさそうだな」

「はは、そうかもしれない。スイセツの手が少し温かい気がするしな」

微笑みながら言った双輝の言葉にスイセツは少し機嫌悪そうに双輝から手を離れた。

第三十八話 語り

「双輝が恐怖した顔を見るのも数年ぶりだな」

スイセツは唐突に切り出した。銀葉はスイセツの言葉に耳を傾けた。しかし、傾けてからはスイセツが何も喋ってくれなくなってしまった。双輝の表情を盗み見るとなんとも切ない笑い方をしていた。

「まあ、いい。どうせ語るつもりなどないのだろう？もう、大丈夫みたいだし俺は寝ると・・・」

「いや・・・」

「ん？」

立ち上がったスイセツを呼び止めるように双輝は言葉を放った。それに反応してスイセツは止まったが、双輝はそれから喋らなくなった。

「双輝・・・？」

銀葉はそっと声をかけた。双輝は少し苦しそうな顔をしてから笑った。

「座れ、スイセツ。話がある」

それを是としてスイセツは双輝の横に腰を下ろす。

「あ、私は邪魔？」

「いや、銀葉も。むしろ、銀葉に」

双輝のこの表情。なんだか怖い。べつに双輝の表情自体が怖いんじゃない。その表情から伝わって来る切なさとかが何だか怖かったのだ。

「四季神様がおっしゃられた事。少し気になってな」

「トキ君の？」

「え・・・あ・・・うん、まあ」

双輝は曖昧な返事をした。それを聞いてから思った。四季神様を「トキ」と呼べばこの世界、誰でも反応に困るだろう。

「四季神様は力が戻らなかったとおっしゃっていた」

双輝は沈んだ声で言う。それをとてもしずかに聞いているスイセツ。何だかこの空気が銀葉には辛かった。そしてこの会話の中で自分が本当にいいのか疑問だった。

「あの時と同じなんだ」

「あの時？」

双輝はすつと前髪を耳にかけた。別に前に垂れ下がっていないのに、耳にかけたことは無い。スイセツの瞳が震えているのを見て銀葉は驚いた。きつとあの時というのがスイセツにはわかったのだろう。

「梁禾……」

小さな声でスイセツが言う。

「りょう、か？誰？」

銀葉はスイセツに尋ねるように聞いたがスイセツは何も答えてくれない。

「あ、あのさ！スイセツって私の事嫌い？」

「興味が無い」

「う……」

「スイセツ。少しは言葉を選べ」

双輝が言う。スイセツは少し視線を落として黙ってしまった。双輝はスイセツから銀葉へ向けた。

「俺は、四季剣たちと成長してきた。その過程に……」

双輝にしては珍しいくらい苦しい表情をしていた。そしてその顔を銀葉はきつとずっと忘れることはなくなるのだろう。

「両親はいなかった」

衝撃的な一言で双輝が語りだしたそれこそ衝撃的な出来事。

第三十九話 追憶の始まり

今よりずっと前、双輝がまだ護人ではない子供の頃の事。

「双輝！四季神様の森へは入るなよ！」

「はいっ！父様！」

双輝は元気よく飛び出した。

「霍忌！森へ行こう！」

「ああ、今行くよ。梁禾も誘ってやろう」

「うん！」

赤褐色の髪をした焦げ茶色の目が大きな少年の背に双輝は飛びついた。霍忌は双輝より3つ上の少年。幼くして四季剣を既に持っている力のある特別な存在。でも双輝にとってはそんな力云々の問題ではなく兄のように尊敬して、そう、特別だった。

梁禾を誘って森の方へ走っていく。梁禾は吹けば飛んでしまいそうなくらいひ弱な感じだった。真っ黒な髪は深緑色の瞳を隠すように垂れている。双輝は霍忌の背を追って歩く。その後ろを梁禾が追ってくる。それがいつものスタイル。

四季神の森と対を成している妖怪の森。四季神の森は入ることが出来ないの、妖怪の森の入口付近で遊ぶことが多かった。この村の妖怪はなぜか襲って来ない。霍忌がそんなことを言っていた。

「双輝の父君が立派だからだよ。俺もなりたいよ。憧れさ」

「へへ。オレもなりたいよ！父さんみたいな護人に！梁禾は将来どんなに？」

「え？」

突然話を振られた梁禾は少し困った表情をして考えていた。それから少し照れ臭そうに笑った。

「馬鹿にされちゃうかも」

「しないよ」

「双輝はしないけど、霍忌はきつと笑うよ」

梁禾は俯いて笑う。霍忌は心外だと笑った。

「だって……。護人じゃなくてもっと別のものになりたいなんて笑うでしょ？」

「ん？笑っちゃうね！護人になることこそ全て！違う？」

「ほら……」

今度は少し悲しそうに俯いた。双輝はそんな梁禾の背に手を当てて尋ねた。

「じゃあ、何になりたいの？」

「……やだよ」

「なあんだよ。笑ったのを怒ったの？なら謝るよ？」

「違うよ。それは双輝でも言えないよ」

「なんで？」

双輝が尋ねると梁禾は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「梁禾？」

霍忌が覗き込むように梁禾を見るとさらに真っ赤になって目まで閉じてしまった。

「その赤面症、なんとかしないとね？」

霍忌が諦めたように仁王立ちをして言った。双輝も眉を寄せて困った表情をしながら笑う。それにつられて梁禾もクスリと笑うのだった。

家に帰った双輝は父親に梁禾の事を語った。

「へえ。梁禾がそんなことを？」

「うん。なんでだろう？」

「そらあ、誰にも知られたくないんだあ。詮索すんなよ！」
突然話に加わってきた青い髪の青年。

「トウフウ！？何処から！？」

「ずっといた」

鋭い目を和ませて笑うトウフウは父のもつ四季剣の一人、冬の四季剣。

「トウフウ、シュウフウは？」

父が尋ねる。

「あ？ あんな冷たいやつ知らないよ」

「トウフウが一番寒いよ？」

「双輝、そういう問題ではないよ」

父が双輝の間違いを正そうとした時、冷たい声が聞こえた。

「呼んだか？」

「ああ、シュウフウ。双輝の話し相手を頼むよ。俺は行くところがあるから」

「わかった」

シュウフウは何も考えずに父の言葉を肯定すると双輝の前に腰を下ろす。

「何だよ、俺じゃダメだったか？」

トウフウが文句を言うが、笑って返した双輝の父。

「違う。おまえはついて来いってことだ」

「なるほど」

納得したように立ち上がると、父の後を追ってでていった。双輝はシュウフウに意識を寄せた。

「俺も護人になればシュウフウたちを使えるの？」

「無いな。俺達は、あくまでお前の父親の四季剣だ。受け継いだとしても、きっと異なるものだ」

双輝は首を傾げた。四季剣はあくまで持ち主に忠誠を誓う。その意志は全てそれを持つものに宿る。例えば父から譲り受けても形は全く異なるものとなるのだろう。

第四十話 追憶の真ん中

母の手伝いをしていた四季剣が部屋に戻ってきた。二つの四季剣、性別はメス。

「あら、出かけたの？最近多いわね？」

夏の四季剣、カフウが部屋の様子を確認して双輝の父の不在を認識していた。

「嫌なことでも起きなければいいけどねえ」

双輝の鼻を軽くつまむようにイタズラをしながら春、シュンプウが言っていた。

「何か・・・起こるの？」

双輝が不安そうに尋ねるとカフウが頭を撫でる。

「何もないですよ。シュンプウ、余計なことを言って不安にさせるものではありませんよ」

「まあねえ。でも、事実・・・」

「シュンプウ」

シュウフウが言葉を切らせる。さすがにシュンプウは言葉を続けないかった。

帰って来た父に即座に双輝はたずねる。

「父さん？何か悪いことでもおきるの？」

「は？何を言っているんだ？何も起きやしない・・・ああ、四季剣たちの誰かが余計なことを。問題ないよ、双輝。何もない」

「本当に？」

「無論」

双輝は納得して笑った。

それからしばらく経ったある日。父に呼ばれて表に出ると四季剣が刀の状態で並んでいた。

「父さん？」

「お前に譲ってやるよ」

「・・・・・・は？」

思わず出てしまった言葉に恥じらい慌てて口を押さえる。霍忌ですら、もっと上の年齢で四季剣を有したというのに、こんなにも早く自分が所持するなんて、双輝にとっては有り得ないことだった。

「父さん！？正気？霍忌でも・・・」

「あの子はあの子、お前はお前だ。それとも双輝は受け継ぎたくないのか？」

「そんなこと無い！」

双輝は叫ぶ。憧れの父から譲り受けられる四季剣。それがどれ程嬉しいことか。双輝は四季剣に手を伸ばす。

「ああ、待て。お前にはまだ覚悟が足りない」

「覚悟？」

「四季剣を持つことの大変さをまだお前は知らない」

双輝は手を止めて父を見上げる。

四季剣は持ち主、つまり護人の魂に比例する。どれ程努力しても、持てない者は持てない。双輝にその四季剣を持つ資格があるか、判別しなければならぬ。

「お前に扱えるか？」

父の言葉に双輝は一瞬震えた。幾多に渡り四季剣を振るってきた父の後を、その四季剣たちに自分が受け入れてもらえるのか、そんな自信は一切ない。それ故に、父の言った言葉の重みが理解できた。

「アハハ！そんなに堅くならなくても！」

突然笑い出した父に驚いて硬直した双輝。

「何しているのさ」

冬、トウフウが人型になって笑っている。いつも楽しく話をしてくれるトウフウは冬の四季剣で最も所持することが困難な四季剣。

「お前がビビってちゃ俺達は誰につけばいいんだよ」

笑うトウフウ。その笑みと言葉に双輝は受け取った確かなものを胸に抱き、父を見上げた。視界の隅にトウフウが四季剣になったのを確認した。

「よろしい。その目が出来るようになればいいんだよ」

父は双輝の頭を撫でて笑い声を立てた。双輝に四季剣を手にすることを言い渡す。

「四季剣・・・」

双輝はそつと四季剣に手を伸ばす。春の四季剣に触れた直後、そのほかの四季剣が砕け散った。驚いて春の四季剣を落とすとそれすらも砕けてしまった。目にはほとんど見えないほどの塵となって。言葉も出ずに固まる。自分はまだ、四季剣を有するに適していないのかもしれない。切なげに俯く双輝の頭を撫でる手があった。

「自信を持て。お前が俯いてどうする。トウフウの言葉を忘れたのか？」

震えた瞳で父を見上げる。温かいその視線に双輝の手は震えた。そしてその震えを握り締める。何を恐れている。恐れることなど何もない。自分を信じてくれた、認めてくれた父に応えられるのは自分だけのだから。

「春・・・」

双輝はそつと手を前にだして呼び掛けた。するとその手に見たこともない不思議な形状の四季剣が現れた。その感触に鳥肌が立った。父の四季剣を持った時とは違う、繋がりと思吹を感じる。双輝はそのままその四季剣を空に放り投げた。春の四季剣は光りを帯びて双輝の前に降り立った。父よりも少し背の高い陽気そうな男。

「あ・・・えっと・・・」

言葉を詰まらせている双輝ににっこりと笑いかけて来る。

「あんたが主だね？ 小さいなあ、あははっ」

「あっと・・・春の・・・？」

「そうさ。ねえ、名前を決めてよ。俺の」

きょんとした顔を見せた双輝に春の四季剣は楽しそうに笑った。

「主でしょ？ だったら名前をちょうだいよ！」

自分の想像していた春とは全く違うその風貌と性格に双輝はただ固まっていた。そして父の視線に気づいて父を見上げて口をぱくぱく

させた。

「なんだ？同じ性格の四季剣になると思ったのか？」

「い、いやぁ・・・」

「なんだよ、俺が変わって？」

春の四季剣が口を挟む。そういわけではないと、否定を入れた。笑いながら春の四季剣は双輝の前に膝を着いた。

「はい、名前を下さいな、主サマ」

「主サマって・・・」

「ワザトに決まってるじゃんっ」

にこやかに笑うその顔が春の温かさを感じさせた。

「め・・・き」

「ん？なんて？」

双輝の頭の中に浮かんだ芽吹きという言葉。しかし男につけるニュアンスでもないし、何よりそのままと言うのは。迷った双輝は言葉を探す。

「あ、ガスイ」

「がすい？」

「うん。芽吹きって書いてガスイって読む。春らしくていいでしょ？」

「いいねっ！気に入ったよ、双輝！」

ガスイはぴょんと跳ねて後ろに下がった。自分の名前を知っていたことに驚いた気もするが、主である双輝の名前を知っているのは当然なのかもしれない。

「それにしても妙な形をしていたな？」

「あ？ああ、『逆刃刀』っていうんだよ」

父の質問にガスイが応えた。

「さかば・・・とう？」

双輝の疑問の声にガスイはにっこりと微笑む。

「刃が逆についているんだ。つまり俺は『切らない』タイプだよ」
ガスイの言葉に父が感嘆の声を上げた。それにたいしてどんなもの

かと偉そうに笑うガスィ。

「ほら、他の四季剣も待ってるぜ、双輝」

温かい声音でガスィが促す。双輝は辺りを見てキラキラと光る粒子があるのに気づいた。それが四季剣の「元」となるもの。そしてその粒子はそれと同化できる四季剣と主にしか見えない。同化、と言うと考えてしまうから同じ種類と言い換えておくべきだろう。

「夏」

それに呼応して双輝の手に再び刀が握られる。今度は誰もがわかる剣、両刃刀だった。洗練されたその刃を双輝はそつと空へ投げる。

「やあ、主はあんただね？よろしくっ」

活気のある女。夏の四季剣。人型となった夏の四季剣はガスィの存在に気づいて挨拶をしていた。

「お前が春か！」

「夏はお前か！」

親しげでよかったと思いつつながら、ガスィと同じように名前をつけな
いと、と考え込む。

名前を考えるのに夢中になって気づかなかったが、いつの間にか
ガスィと夏の四季剣が殴り合いに発展していることに気づいた。焦
って止めようとしたが自分にこんな大人よりも大きい身長の人を
止められるだろうか。とにかく制止しなければ、と思い、双輝は声
を発する。

「二人とも止めて！」

双輝の言葉がなりやむと同時に二人は乱闘をやめた。

「え・・・？」

「何疑問そうな顔してるのさ」

夏の四季剣が言う。続いてガスィが言う。

「俺達は双輝の四季剣だよ？言うことを利くのは当然のことさ」

双輝は俯いた。この環境に慣れない。でもいつかは・・・きつと。

夏の四季剣を陽光と書いてヒコウと読む名前にした双輝。そして
秋の四季剣を出すところで問題が起きた。何度やっても、秋の四季

剣が現れない。顕現させることが出来なかった。秋となれば3本目、容易に持てるものではない。それはわかってる。だからそれに見合った器にならなければ、持つことなんて到底出来ない。意識を四季剣へ向ける。はつきりとした意志を以って。

「秋・・・俺に、力を貸して・・・」

光が集まる。そして直感的に片手では足りないと言手手を前に出した。

「双剣!？」

父の声が聞こえたが光へ手を伸ばす事に精一杯だった。そしてその手に感じ取った感触に双輝は鳥肌が立つ。

「ふた・・・っ?」

「珍しいな。初めて見たよ。一つの四季で双剣なんて・・・」

「父さんですら初めて?! そんな・・・こと」

「自信もちなあゝ俺達の主!」

ガスィが楽しげに言う。双輝は何だか照れながら秋の四季剣を人型へと変える。

「わぁい! 双輝い! 会いたかったよ! 苦戦したねえ?!」

現れたのは子供だった。自分より少し上ぐらいの子供の姿。双輝はそんな秋に触れながら名前を考えた。

「紅葉、だよね・・・。クレハなんてどうかな?」

「ステキ! いいねっ! クレハ! あははは!」

楽しそうに踊り回るクレハをみて双輝まで楽しくなった。

秋でそうやって苦戦したのだから冬はどうなのか。双輝はそつと呼び掛ける。無論、反応はなかった。秋と違ったのはどんなに呼び掛けても駄目だったこと。

第四十一話 追憶の終わり

家に帰って四季剣を握る双輝。冬の四季剣に見合うだけの力が無い証拠だ。双輝は俯いて必死になって考えた。どうすれば四本目の四季剣を持つに相応しい護人になれるか。

「根を詰めていても始まらんぞ」

父の言葉に顔をあげる。すっと腰を下ろして双輝の頭を撫でる。

「冬はお前の側でたえず具現化出来る時を待っている。いついかなる時でもね」

撫でながら父は優しく微笑みかけてきた。それに習うように他の四季剣達も双輝に触れる。それが何だか嬉しくて、双輝はそっと笑う。自分の周りにいるまだ会話できない冬よ。いつの日か……。

四季剣をもって外に出る。持つといっても人型をとっている以上ついて来ると感じるのだが。

「これが双輝の四季剣なの？面白いね」

梁禾が楽しそうに尋ねてきた。霍忌も不思議そうに観察している。

「父さんもそうだったからきつとオレも同じになったんだと思う」
触れ合って互いを確認する。そして霍忌が疑問の声を上げた。

「双輝、冬は？」

「あ……それが……」

事のいきさつを話すと二人とも笑った。それは仕方ないと。双輝の歳で四季剣を4本も所有した者などいない。それどころか、3本ですら例を見ない珍しいことだった。

「凄いいじゃん。俺でもこの歳で得たのに」

霍忌が褒めて来る。その事が嬉しくてたまらなかった。父も尊敬はしている。しかしレベルがあまりにも離れているために、話にならない。その点霍忌はどこか自分に近く、見上げるのに調度良かった。

「双輝はすごいんだね！」

梁禾も言う。なんだかくすぐったくて双輝は俯いた。それをちゃか

すようにガスイが笑う。楽しく賑やかに声を立てる。それが楽しかった。

四季剣を手にしてから幾日経った。今だに冬の四季剣を出すことは適わない。そうやっている中、とある事件が起きた。

父の大声で目が覚めた双輝は慌てて声の下方へ走って行った。そこは惨劇。双輝は恐る恐る立っている父の元へ寄る。

「来るな、双輝！四季剣を持って家を出ろ！」

荒れた父の声を聞いて恐怖して飛びのいた。あんなに荒れた声を聞いたことがない。双輝はただその言葉に従うことしか出来なかった。

双輝は走った。村の外れまで走ってきてヒコウに止められた。

「ちよつと双輝！？いいのか！？どこまで行く気だよ」

声を張り上げたヒコウの目を見て少しだけクリアになった思考は双輝に戻れと命じた。双輝はバネのように家の方へ走った。

月も沈み闇が夜を支配していた。それなのに建物や周りの人達のはっきり見えた。それは辺りに火が散らばっているからだろう。双輝はその中を走った。人の叫び声、赤ん坊の泣き声。火の燃ゆるぱちぱちとした音にヒューヒューと風が耳を打つ。四季剣達はそんな双輝の後ろを走ってついて来てくれている。自分の家目指して走るが途中で誰かとぶつかった。

「双輝っ！良かった！無事だったんだねっ！」

梁禾が震える手で双輝の袖に掴まってきた。双輝はそんな梁禾をみてどこか安堵した気がした。そして霍忌はどこか尋ねると梁禾は知らないと答えた。霍忌の事だから無事だろうし、きっと自分なりの事をしているだろうと判断して梁禾とともに双輝は家へ向かった。

扉を開けた瞬間、後ろからヒコウに顔を押し付けられた。何とかして外すと梁禾のほうもガスイが同じようなことをしていた。

「離して！」

双輝の言葉にヒコウは大人しくしたが、扉の向こうを見せてくれようとはしなかった。扉を閉めて梁禾と同じようにガスイに抑えさせ、ヒコウは扉の向こうへ入って行った。

「離してよ、ガスイ！中に・・・中に入るんだ！」

叫ぶ双輝に少し不安そうな梁禾。あまり反応を示さないガスイに、双輝は再び叫び声をあげた。

「主の言うことを聞くんじゃないの！？」

命令ではない。願いだ。それすらも聞き留めてくれないものか。そんな折、ずっと黙っていたクレハがそつと言った。

「私たちは、確かに主である双輝の言うことを聞くのが最低限のルールになっているけど、それよりも優先される、最優先事項があるんだよ」

「最・・・優先？」

こうするように双輝が漏らした声にコクリとクレハは頷いた。気持ちがいさ少しだけ落ち着いて初めて気付いたが、梁禾がずっと裾を掴んでいた。怖くて震えたその小さな手で。

「梁禾・・・ごめん。みんな・・・ごめん・・・」

荒れた自分が恥ずかしい。双輝は大人しくガスイの腕の中に収まった。梁禾と共に。

「最優先事項ってなに？」

双輝が尋ねるとガスイが小さな声で短く答えた。

「主を護ること」

双輝はさらに俯いた。主を護るのが剣の役なのか。それが本当に四季剣と名の持つモノの質なのか。双輝にはわからなかった。四季剣は巫女を神を奉り護るものだと思っていたから。

ヒコウが中から出てきた。ガスイとクレハがヒコウを見ると、ヒコウは小さく首を横に振った。双輝の左肩が痛んだ。ガスイの握る力が強くなったからだ。

「どう、したの？」

震える声に答えてくれない四季剣。沈んだ表情に双輝は恐怖した。家の中で一体何があったのか。問い詰めても答えないので、双輝は扉を破ろうとした。

「やめて、双輝」

止めたのはヒコウ。彼女のキャラクターにしては珍しい言い方だった。双輝はその言葉に、後込みした。扉から手を離して大人しく従うことにした。四季剣といえど、思考の作りは大人のようなのだ。

梁禾の裾を掴んで双輝は霍忌を探した。どこにもいない霍忌を。そんな折に、村の中で大爆発が起きた。何がどうなったのか全くわからなかった。ただその爆風に吹き飛ばされて地面にたたき付けられた時はガスイもヒコウもクレハもない状態だった。梁禾だけは一緒に吹っ飛んできたようだった。

「梁禾？大丈夫？」

「うん……」

弱い声で頷いた。梁禾を何とか起こして自分達が今いる場所を確認した。

「こ、ここって……」

「やばいよ、双輝……この森は……」

森にいた。しかも結構奥の方だった。森の気配で神聖な浄化されたようには感じられない。むしろ荘厳で来るものを片っ端から喰らってしまいそうな気配。つまり、ここは「妖怪の森」ということになる。この森に住まう妖怪は一味違う。そう簡単には倒すことなど出来やしないし、双輝の父もその妖怪がいるからそんなにこの森に手をださないと聞いた。

「早く出よう！危険過ぎる！四季剣もないしっ！」

双輝が梁禾の腕を掴んだその時、草を分ける音が聞こえた。血の気が引くとはこの事だろう。全身が冷たくなりぞわつとするような恐怖心。

「あ……」

梁禾の声が漏れた。それに続いて双輝も漏れた。草を分けて現れたのは妖怪ではなく霍忌だった。

「霍忌っ！よかった！無事だったんだねっ！」

梁禾が叫ぶ。双輝も霍忌の方へ走ろうとした時、霍忌が血まみれな事に気がついた。

「霍忌?! どうしたの!? 怪我でもしたの?」

双輝の質問に霍忌は答えない。首を傾げた双輝に霍忌はやっと反応を示した。

「どうしてここに?」

「吹っ飛ばされた・・・」

「爆発があって・・・」

梁禾と双輝が順番に答えた。霍忌は不思議な表情をしてから笑った。

「双輝、父親は?」

「え? ああ・・・解らない。みようとしたりヒコウに止められて」

「へえ」

霍忌は笑う。双輝も梁禾もなんだか嫌な予感がした。その予感の的中することとなる。

「双輝の父親は死んだよ。俺のせいだ」

「へ・・・?」

言った意味が理解できなかった。双輝の頭の中がパニックになった。

「え・・・? 霍忌が・・・? そ、それってあれだね・・・? かばってとか」

「何温いこと言ってるの?」

せせら笑うように霍忌は口元を歪ませる。双輝はそのショックでなにもかもが解らなくなった。信頼していた霍忌が何をした?

「でも・・・父さんが霍忌に・・・?」

「少し手こずったよ」

にやにやと笑いながら霍忌は剣を一本取り出した。今までに見たことないほど禍禍しい気配を放っていた。そして今まで見ていた霍忌の四季剣ではなかった。

「四季剣なんて元から持ってなどいないよ。俺にあるのはこの剣だけだ」

ぶんと振った剣先が煌めく。そして霍忌が踏み込んだ。双輝の頭は白いままだった。

「そうき・・・」

声が微かにした。双輝は自分の体が後ろに倒れるのを感じた。誰かに引っ張られたと取る方が正確か。

「梁禾っ！」

反射的に出た言葉。目の前で梁禾がばさりと倒れたのを見た。

「何やってんだよ！梁禾！」

「だって・・・双輝が」

切れ切れに言う言葉に双輝の中ではなにかが燃えていくのを感じた。

「霍忌いい！！」

双輝の怒号が鳴る。震えている梁禾を抱えて双輝はただ内側から燃え上がる感情に負けていた。

「そ・・・き・・・ダメだよ・・・まけちゃ・・・」

弱い声の下から聞こえた。双輝は梁禾を見る瞳は薄く開けられ、呼吸が浅い。苦しそうにしながらも梁禾は言葉が続けた。

「ほんとうに、つよいつて、なにかなあ？ずっと、ふたりの、せなか、みていたから・・・おいかけるだけだったから。ぼくには、わからないけど、きっとそうきなら、わかるかなあ？」

梁禾の言葉が理解できない。双輝とて、霍忌の背を追い続けていたのだから、わかる訳がない。

「つよいつてきつとまけないことだよね」

その言葉を聞いて双輝ははっとした。どんなに敵を薙ぎ倒そうが、どんなに妖怪を倒そうが、どんなに巫女を護ろうが、自分の心が自分に負けてしまっていてはそれは強いとは言わない。きつとそういうことなのだろう。自分の命などどうでもいいと思っている者に、強さは宿らない。自分も守ることが出来てこそ、人を守ることが出来る。

「そうき。ぼくね。なりたいの。ひとも、かみさまも・・・そして。ようかいも。みんなが・・・なかよく、くらせる、せかいを」

双輝はぐっと手に力を入れた。梁禾はそっと目を閉じた。まだ生きている。早く治療をすれば治るかもしれない。

「話は終わった？双輝、お前っていつも俺の後を見ていたよね？そ

んなお前が、獲物一つ持っていないで俺に勝てるか？」

双輝は梁禾をそっと地面に寝かせると立ち上がった。そして右手を前に出す。出来ないとは思わなかった。絶対に出来るという確信がなぜかあった。

「もう名前は決めてあるんだ。吹雪だよ。凍てつく寒さの中を疾走していく……。オレに力を貸して、スイセツ」

光りが集まり双輝の手の中に長い矛刀が収まった。

「……。へえ。四季剣をねえ……。うぜえやつ」

霍忌が低い声で言う。双輝はそんな霍忌へ切り掛かる。霍忌は持っていた剣で双輝を薙ぎ払う。倒れないように踏ん張る双輝。それからしばらくの間応戦が続いた。

双輝は大きく息を切らしていた。思ったように四季剣を操ることが出来ない。四季剣の発する特殊能力があるはずなのに、それを發揮することが全く出来ない。

「ああ、それは俺の能力ね。相手の力を封じる能力だ」

霍忌が笑いながら言う。人が本来持つ潜在能力や、治癒力等を一括して使用不能にする。こんな状態で長いこと戦える訳がない。ただでさえ、実戦をしたことのない双輝がここまで持ちこたえられたのはスイセツの助力あってこそだというのに、だんだんとそれすらも薄れてきているのでは、勝ち目などある訳がなかった。

「おっと、もうこんな時間か。遊びすぎたなあ。さて、これで終わりにしよう」

霍忌が剣を振り上げた。双輝はどうしたらいいのか全くわからなかった。スイセツももはや反応がない。声を聞くことが出来なくなっってしまった。霍忌がこちらに攻撃をしかけてきた。頭が白くなる。そんな折、手から矛刀が無くなるのを感じた。

意外そうな表情をしている霍忌。双輝ですら混乱していた。

「これ以上主を傷つけるのはやめてもらおう」

人型になってスイセツが霍忌の剣を受け止めていた。双輝からは背中しか見えないが、その背が怒りで満ちていることはわかった。霍

忌は大きく後ろに飛びのいた。それから少し不機嫌そうな顔をしてからこちらに背を向けて走り出した。

「まっ……」

待てといったかったがスイセツに止められた。

「先決があるだろう、双輝」

「あ……梁禾！」

踵を返して梁禾を抱えた。

「まだ生きてる……！助けられるかなあ！？」

「俺は医療術がある訳ではないから何とも言えん。ガスイなら、もしくは」

双輝は梁禾を抱えようとしたが、何分ほとんど同じ背丈なため苦労した。するとスイセツが梁禾を抱えてくれた。その際に見えたスイセツの手に絶句した。

「スイ……セツ、手が……」

「問題ない」

短くスイセツは返事をした。しかし問題ないといえる状態には思えなかった。重度に焼け爛れているように見えた。霍忌の剣を受け止めた方の手だ。双輝はぐっと手に力を込める。自分の弱さが招いたことだ。なにもかも。もっと強く、つよく在らねばならない。全ての人が傷つかないように。

第四十二話 疑問

ふっとため息をついて双輝は目を閉じた。ずいぶん長い昔話になった事を詫びた。銀葉は首を振る。双輝は隣に座っているスイセツの右手をとって手の平を見つめた。銀葉も少し覗くと、火傷のような跡がうつすらと残っていた。

「すまないな」

「俺はお前を守ればそれでいい。俺は人間じゃない。主を守ってこそ存在する意義を持つ」

スイセツが他の四季剣たちより双輝を大切に思う理由が何となく銀葉はわかった気がした。

「その・・・梁禾ってひと・・・どうなったの・・・？」

震える声で尋ねる銀葉。双輝はとても細い笑みを浮かべた。

「生きているよ」

銀葉の中で暖かい空気が流れた。てっきり死んでしまったかと不安になった。

「でも、目を覚ましていない」

「え？」

双輝の言葉に銀葉は固まった。スイセツもうつむくだけで何も言わない。梁禾はあの後、ガスイの力で一命は取り留めたが、目を覚ますことはなかった。そして今も、別の村で療養している状態だった。目が覚めたら双輝の元に連絡が来るようになっていたらしいのだが、その連絡は一切来ない。双輝は何とも言い難い表情をしたのち、きりっと表情を変えた。

「さて。そんな訳でね。その霍忌というやつが持っていたその能力だけど、他に持っているものがないんだよ。後に気になって調べたが存在していなかった」

「四季神様を押さえ込んだのも霍忌だというのか？年齢が合わんぞ」
スイセツの言葉に双輝は俯いた。話の大まかな流れは理解出来ても、

細かいことまではわからない銀葉に追求することは出来なかった。遙か昔に存在していた妖怪と四季神。そんな二つの存在を断裂させた人間が双輝の生きた時代にいる訳がない。

「まあ、あくまで仮定だし、確信がある訳でも根拠がある訳でもないから何とも言えないけどね」

「それに仮に霍忌って人がそうだとしたとしても年齢がおかしくない？」
「それもそうだね」

双輝が弱く笑った。銀葉はなんだか罰が悪い気がして俯いた。

「双輝。俺から提案するのも何とも言えないが・・・この際やつの所に行って・・・いや、何でもない」
スイセツは目を伏せてから立ち上がった。

「お前ももう大丈夫みたいだから、俺は寝るとする」

くるりと回ってスイセツは眠る場所へ足を運んだ。その背を見て銀葉は切ないような、悲しいような気がした。相手が凍てついているからだろうか。

「・・・やつ、か」

双輝がボソツといった。首を傾げた銀葉に双輝は優しく微笑みかけた。

「寝よう」

笑って言った双輝の笑みに隠されている心が銀葉にはわからない。

「あ・・・双輝。あの、隣で寝ていいかな？なんかこの広い場所だと淋しくて」

「あっ、それは気づかなくてごめん」

「あ・・・いや」

本当に素直に率直に双輝は謝罪を言う。なんだかそれに違和感を覚える。でもこの世界ではこれが自然体なのだろう。ああ、人間は。

双輝の横に布団を移動させて、布団の中に潜り込む。しばらくすると双輝の寝息が聞こえた。相当体も精神も疲労していたのだろう。なかなか寝付けなくても人はいずれ眠ってしまう。うとうととして夢の世界へ落ちて行く。

第四十三話 不在

翌日には双輝もすっかり元気そうで、よかったと安心する銀葉。

「ちよつと出掛ける。スイセツ、付き合ってくれ」

双輝の言葉を得てスイセツが立ち上がる。

「俺も・・・」

ガスイも立ち上がるが、双輝は止めた。ここでみんなを守れと命じた。ガスイだけではない。ヒコウもクレハも納得がいかないような表情をしていた。その納得がいかない表情の中にむろん銀葉も含まれている。雰囲気から察して銀葉も連れて行くようなことを双輝はしない。スイセツのみを連れていこうとしている。どこに行くのかは・・・わかりきっていることである。

「私も行きたいよ、双輝！ 玩愉のところに行くんでしょう！？ もう危険なんてない・・・」

「お前は何もわかっていない」

双輝の代わりにスイセツが言葉を発した。銀葉の言葉を遮って。銀葉はぐつと言葉を押し殺した。スイセツのことだからこれ以上の言葉をつづけることはないだろうかと思案したが、予想に反してスイセツは言葉をつづけた。

「双輝がお前を連れて行かないのにはそれなりの理由がある。無論、その理由を言ってしまうえば連れて行くことと同等の意味を成す。言っている言葉の意味くらいは理解できるだろう？」

珍しいくらい言葉を放ったスイセツに銀葉も、四季剣たちも驚きの表情を見せた。その拍子に双輝が薄く笑って家を出て行った。不貞腐れた銀葉はやつあたりに家の壁へこぶしを入れた。

妖怪の森を歩く双輝。その後ろを静かについていくスイセツ。荘厳とした空気は相変わらずだった。きっとこの空気はあの玩愉が作り出しているモノなのかもしれない。こんな空気の中で四季剣を呼び起こした双輝の心にスイセツは痛みすら感じていた。本来なら、

充足した心環境で満ち足りた精神で四季剣とは顕在させるものだ。にもかかわらず。

「スイセツ。玩愉を見ても敵意を出すなよ。いや、わかってはいると思うけどさ」

「愚弄するようなことを言わなければな」

「おいおい・・・」

主の意見が優先ではあるが、主自身のことが最優先事項。双輝を傷つけるような行為は四季剣としてあってはならない。かといって、変に庇い立てして玩愉を怒らせて双輝に危害を加えてはさらに話にならないので、注意しなければならないことだ。

誰も住んでいる気配のないあばら家で双輝は足を止めた。しかしそこにこそ、今日会いたいものがある。ここに来るまですんなり来ることができたということは玩愉の方も否定的な気分ではないようだ。

「あれ？双輝？　ごめんなさい。兄様は今いないわ」

穠瑳が家から顔を出して答えた。

「え？いない？この森の中に居たら気づくと・・・」

「・・・いいえ。この森にもいないわ。少し出かけていて・・・ああ、もうすぐ帰ってくると思うの。待っていてもらえる？」

「わかった」

穠瑳のにこやかな笑顔に双輝も笑顔で返して階段に腰を下ろした。

「この森にもいないとは。一体どこへ行ったんだ」

「・・・さてね。妖怪は本来住地を変えることはしないし、そもそも穠瑳がいる。移動ではないんだろうな」

玩愉の行動のわからなさには首をかしげる双輝とスイセツ。

第四十四話 接点

しばらく待っていると玩愉の妖気を感じ取って立ち上がった。

「待たせたなあ。こんなにも早くここを訪れるとは思ってもいなかっただね」

嘲笑うように玩愉が言う。

「すまないな。どこへ行っていたんだ？」

「答える義理はないな」

「そうか・・・」

玩愉がスイセツを見る。スイセツも玩愉を見る。どちらかというとき、睨むような。何故だかは双輝にはわからず、双輝はスイセツを何とかなだめようとした。

「ずいぶん反抗的な四季剣だな」

玩愉が笑う。双輝は焦りながらスイセツに落ち着くように言ったが、スイセツはついに踵を返した。

「俺ではなくガスイでもよかったんじゃないかと思ってな」

「ヒドイこというな・・・俺の選別に苦情か・・・？」

「・・・別に」

あまり感情の籠っていない声で返事を返してきた。

「・・・で？」

やり取りを見ていて暇した玩愉が催促する。双輝は慌てて玩愉の方に意識を傾けた。玩愉がここを留守にしていたようだが、付近に玩愉の気配を感じなかった。唐突にこの森に気配を感じた。

「聞きたいことはそれか？そうだというなら答える気はない。帰れ」
鋭く短く玩愉は言い放った。双輝はそれを否定して自分がここへ足を踏み入れた本来の目的を達成することにした。

かい摘まんで過去のことを玩愉に話し、その元凶となった霍忌について尋ねる。

「遙か昔に存在し、現在にも生きることが出来るものか？」

「お前は馬鹿か？」

「いや・・・」

「トキだって俺らも生きているしなあ？」

「四季神様は・・・。それにお前達は妖怪だろう」

「霍忌が妖怪ではないという確信がお前にはあるのか？」

「いや・・・確信はないけど。でも四季剣を持っていたし。何より父さんが気づかないなんて事は・・・」

「まあ、妖怪ではないな」

「はい・・・？」

玩愉は興味が失せたようにそっぽを向いた。玩愉は再び双輝を見た。その瞳の煌きの強さに双輝は一瞬吞まれそうになった。軽くその瞳から目線をはずしてもう一度戻す。玩愉は小さく笑った。

「トキはどうなんだ？アイツは俺たちと同じように生きている」

「四季神様は違うでしょう・・・。あの方は・・・」

「俺からしてみたら同じさ」

玩愉は頬杖をついて笑っている。スイセツは相変わらず冷たい眼をしてる。その眼が意味することを双輝には理解することができなかった。どうしてこうも玩愉に対して不機嫌なのか。

「まあ、いい。それがなんだという。そんな人の生命の長さを俺に尋ねてきて何がしたい。それこそそれだけか？」

玩愉の言葉に双輝は一瞬だけ悩んだ。有り得ることなのかすら双輝には見当もつかない。それを玩愉に伝えていいものか。

「くだらん、それだけのために俺の帰還を催促したのか？」

軽く怒りを感じるその気配に負けて双輝は語る。妖怪と四季神を断裂させた能力を持った者と霍忌が同じ存在ではないかと。すると玩愉は珍しく表情を曇らせた。双輝は返答を待ったが中々玩愉は口を開からなかった。

「玩愉？どうした・・・？お前がそんな風に回答を渋るなんて」「うるせえ」

いつもの雰囲気で見下すように言い放った。その眼が気に入らなか

ったのかスイセツが軽く殺気を放った。

「スイセツ・・・!!」

何とかなだめて玩愉を見て、それから再びスイセツへ視線を戻した。
「・・・なあ、スイセツ。玩愉に対してなぜそこまで敵意を持つ？」

「気に入らんものは気に入らん」

軽く言うスイセツに肩を落とす双輝。それを聞いた玩愉が珍しく高らかに笑った。それに驚いて双輝は目を丸くして玩愉を見た。相変わらずスイセツは不機嫌そうだったが。穉瑳ですら驚いた表情をしているのが視界の隅でわかった。

「冬、だよなあ？その四季剣」

「え・・・？ああ、そうだが」

「・・・なるほど。それで俺に敵意を向けるのか。だが、お前とてわかつているだろう。それはお門違い、八つ当たりということだと」

嘲笑うように言った玩愉の言葉にぷつんと切れたようにスイセツが怒りを見せたので双輝は焦った。滅多なことではスイセツが感情を表に出すことなどなかった。

「スイセツ！落ち着け！相手は妖怪、玩愉なんだ！今の状態で敵うような相手じゃない。敵対するな・・・」

「・・・」

ひとまず落ち着いて黙したスイセツ。そんなスイセツに問うのはさすがにまずいと思い、背後へ視線を送る。先ほどと同じように笑っている玩愉の方へ。

「いったい、何が・・・？お前とスイセツとの接点などないはずだが・・・？」

「無論、接点などないさ。会話としてしたことないわ」

「なら、なぜ・・・」

「知っていたんだろう？あの時、俺があの子の付近にいたことを」
玩愉の言葉に双輝は一瞬頭が白くなった。あの子の付近にいた、とは。つまり双輝と梁禾で霍忌へ対峙していたあの子にいたというの

か。

「いるに決まっているだろう。得体の知れんモノが森に侵入したんだ。邪魔なものなら消す必要がある。だが、あの時俺は消す必要はないと判断した。それだけだ。無論、貴様ら人間に力を貸すなんてこともするわけがない。今とてしないさ」

あの危機的状况を玩愉は見ていた。余裕をもって止めることができたかもしれないあの場をずっと見ていた。いや、言われてみればおかしいことではない。ここは妖怪の森。そしてここを牛耳っているのは玩愉なのだから。その森の異変に気づき足を運ぶのは当然のことなのだろう。

「わかってるさ。だが、気に入らないんだよ。あの時は一切干渉する気はなかったのだろう。お前は妖怪だ。それはわかる。だが、今になって干渉するようになったことが気に入らない」

スイセツが怒りを交えて玩愉へ言葉を飛ばす。それを受けた玩愉は再び笑った。

「俺に怒るのか？それも違うだろう。干渉するようにしてきたのはお前の主だ。俺は何もするつもりなどなかった」

笑いながら言う玩愉に対してスイセツがどんな感情を抱いたかということを双輝に理解することはできない。しかし、これ以上この話をつづけたら互いに一線を越えてしまいそうだったので双輝はこの話に区切りをつけた。

話を元に戻して玩愉が言い淀んだことに、双輝は問い詰める。玩愉は再び言葉を洩った。

「ねえとはい切り切れねえ。でもあの時見た餓鬼風情が俺らを陥れることが・・・果して出来たのだろうかねえ」

感慨深い表情をして玩愉は答えた。妖怪の目で見ても、あの霍忌が四季神の力を奪い取ったとは考えにくいということだ。だとしたら、双輝の思ったことは勘違いとなるわけだ。双輝は良からぬことを持ち込んで悪かったと玩愉に謝罪をしてその場を後にしようとした。その際、玩愉が思わせぶりなことを言った。

「俺もあの時はちゃんと見ていなかったけどなあ」

それ以上のことを聞くことは玩愉の表情からして無理だと悟った。スイセツを連れて双輝は森を後にした。

戻ってきた双輝に飛びつくクレハ。ガスイとヒコウはその隣にいるいかにも不機嫌な顔をしているスイセツの様子を伺っていた。

「双輝？話はどうだったの？」

銀葉は双輝に尋ねた。双輝は少し残念そうな表情をして空振りだったと答えた。内容を知りたかった銀葉にとってこの回答はあまり良いものではないが、得るものがなかったのなら聞いても仕方ないことなのかも知れない。

第四十五話 雨

双輝の体力も落ち着いてきたある日、外は酷く雨が落ちてきていた。四季剣達にとって雨などたいしたものではありません外に出ない双輝を咎めていた。

「ずっと家の中にいるのは暇だよ。外に出て演習しようよ！」

クレハの言葉に双輝は笑いながら返す。

「今日は雨が酷いから無しだよ」

文句を言いながら奥の部屋へ入って行ったクレハに苦笑いをする双輝だった。

それにしも嫌な雨だ。なんだか気分が悪くなりそうな程だった。そのことを双輝に言ってみると、警戒した表情を見せた。

「銀葉はもう少し自分の力を理解した方がいい。玩愉も言っていたけど、銀葉には特殊な力が秘められている」

双輝はひどく真面目な表情をして言った。銀葉がこの雨で感じたのはおそらく巫女の力。護人の力であるなら双輝とて感じることだ。

双輝に感じないのなら、それは巫女の力というわけだ。

そうは言われても今まで何も感じず、何も考えずに生きてきた銀葉にとって、理解するにはあまりにも遠すぎる世界だった。窓の淵に肘を追いてそんなことを考えていた。降り注ぐ雨が重たそうに地面を叩いている。

「この雨・・・やだなあ」

ばやく銀葉。それに答える声。

「結界の中に入れば平気なんだから、良いじゃないか」

「結界って？」

「そんなものも知らんのか。想像でわかるだろう」

「いや、わかるけど・・・良いじゃないか、って言われても別にその中に入っているわけじゃないし」

「入っているだろうが」

「え?! 嘘!?!... つか、え!?! 玩愉!?!」

ぼうっと話を進めていて、窓下に腰を下ろしている玩愉に気づかず普通に話をしていたことに銀葉は自分で驚く。

「どうした?」

銀葉の声を聞いて双輝が来た。双輝が歩み寄ってきたことで玩愉は立ち上がった。それに伴い、双輝も玩愉が来訪していたことに気づいたようだった。

「結界を張っているのは無意識か?」

「え? ああ、雨とは蔭を呼び寄せるから防ぐために、な」

それを聞いて玩愉はせせら笑うように鼻を鳴らした。

「俺は妖怪で蔭だぞ。でも入って来れているのだからなあ?」

「何を言っているのさ。お前らを蔭と思ったことはない」

「あ、そう」

急に話に興味がなくなつたように玩愉は目を反らした。それから少し目の色を警戒へと変えて双輝を見た。それに答えるように双輝も瞳を鋭くした。

「この雨は少しよくねえ。穢瑳が衰退しそうでね。お前らが良いというなら、ここに穢瑳を置いてほしくてな」

玩愉からの思いもかけない願い出に、双輝を含めて四季剣たちも驚きの表情を見せた。双輝はどこか切羽詰まった様に玩愉へ待つように言う四季剣達へ目を運ばせた。

「って... 言っているけど、お前達は?」

双輝の尋ねた言葉に四季剣のみなは顔を見合わせて、互いに合致したらしく代表としてガスィが解答を提示した。

「オレ達の主は双輝だ。全て双輝の意志のままに」

わざとらしく頭を深々と下げたガスィに肩を落しながら、玩愉へ向き直る双輝。

「了承する。ただし、これは言うておく。必ずしも穢瑳を護ることは出来ない。責任は追いかねない。それでも良いというなら」

双輝の真剣な眼差しを得て、玩愉は楽しそうに笑った。

「あの護人とのいざこざを心配して言っているのか？ まあ良いさ。何があろうとここに置いたのは俺だ。お前らを責めるようなことはしねえよ」

嘲笑うように言う。玩愉は姿を消した。おそらく、穉瑳を迎えに行ったのだろう。残った双輝達は今だに少しほうけていた。流石の銀葉も、この状況は驚くに値するものだと思えた。あの、あの！ 玩愉が。自ら最愛の妹を預けようとするなんて。しかし、玩愉が連れて来た穉瑳を見たとき、合点がいった。

第四十六話 紛い物

連れてこられた穉瑳は予想以上に衰退していた。こうなるまで放っておいた玩愉を一瞬責めようと思ったくらいだった。

「雨は基本的に体力を奪う。穉瑳の身体には障らないよう小屋の中に入れておいたんだが」

玩愉は一度言葉を切ると、布団に寝かせた穉瑳を見る。その目がひどく焦っているように思えた。

「一瞬で衰退した」

冷たく言い放たれた言葉の中に怒りがあるように思えた。その理由は限界に達するまで穉瑳がそれを表に出さなかったことだろう。

また沈黙。

玩愉は何もいわずに立ち上がった。そして、双輝に目で合図すると玩愉は外に姿を消した。それを確認してから双輝は、穉瑳の身体を温めるべく湯たんぽを用意するようにヒコウへ言伝た。濡れた身体は既に拭いたが、滲み出てくる汗を拭うために渴いたタオルを持つてくるようにガスィへ伝える。忙しそうに双輝の命を受けて走り回る二人を、銀葉は穉瑳を心配しつつ見ていた。

取り合えずの所、ベストの状態で穉瑳を置いておけるようにはできた。もし、穉瑳が人間であったのなら、ガスィの治癒能力で緩和することができたのだろうが、何分、穉瑳は妖怪だ。四季神の力を有している四季剣の力を行使してよいものか、悩むところだった。

「兄様・・・？」

目を覚ました穉瑳が小さな声で言う。それを聞き取ったのはそばにいた銀葉だった。

「ここに玩愉はいないよ。でも、双輝の家だから安心だよ」

「あ・・・そう・・・」

一瞬、驚いたような不安なようなそんな表情をした穉瑳だったが、場所が自分の兄の認めた護人の家ならば問題ないと判断したので落

ち着いて瞳を閉じた。

妖怪である穉瑳がここまで弱ってしまうこの雨には一体どれほどの力が宿されているのか。正直銀葉にはわからなかった。いや、わからないのは何も銀葉だけではない。双輝とて玩愉が穉瑳をここへ置くほど、自分で何とか出来る領域では無いことを指しているために、この雨の影響力は計り知れないものだった。

銀葉は一応、穉瑳が目を覚ましたことを双輝に伝えようと思い、立ち上がろうとしたとき、穉瑳が小さな声で再び何かを言った。それが気になって腰を下ろして穉瑳の口元に耳を近づけて何を言っているのかを聞き取ろうとした。

「よく、ない・・・モノが・・・くる」

不安そうに震える声で言う。

「よくないもの・・・？なに？」

「これ、護人に伝えて」

穉瑳はかすかな声で銀葉に己の感じたことを伝えた。それを聞いた銀葉はバネのように飛び上がって双輝の元へ駆け出した。

夕食の支度をしていた双輝の背に大声が飛ぶ。

「やばいって！」

血相を変えた銀葉がお皿を数枚割って台所に入ってきた。

「きゃー！ごめんなさい！」

「いや、構わないよ。どうしたの？」

お皿の破片をさっさと片付けながら、尋ねてきたので銀葉は穉瑳から聞いたことを双輝に伝えた。そのことを聞いて双輝も表情を変えた。

「そのことを玩愉は？」

「わからない・・・。そうきいただけだから・・・」

銀葉の返答を聞いて双輝はしばらく考えたふうなそぶりを見せたあと、夕食の支度をスイセツに任せて穉瑳のいる部屋へ急いだ。

息を苦しそうにしている穉瑳だが、ここに来た時に比べたらずいぶん落ち着いたようだった。

「穉瑳、苦しいところ本当に申し訳ない。首を動かすだけで良い、俺の質問に答えてほしい」

穉瑳はうっすらと目を開けると小さく頷いた。双輝はそんな穉瑳の容態を確認しつつ、質問を始めた。

「先程銀葉に言ったことを玩愉は知っているのか？四季神様はご存知か？元凶はこの近くか？」

穉瑳はすべての質問に首を横へ動かした。四季神も妖怪も知らない、この雨の異変。

「すまない、穉瑳。これだけ教えてくれ。何故お前はわかった？」
穉瑳は小さく笑みを浮かべた。双輝の質問に答えずに穉瑳はまた小さく言った。

「近づいている・・・」

それだけ言うと穉瑳は瞳を閉じて眠りについた。双輝は欲しい解答が得られず少し残念そうな表情を浮かべたが、仕方が無いと肩を落とした。双輝は立ち上がって、四季剣全てを部屋に呼んだ。穉瑳の言った危険な可能性を対処するために。

「この雨は生きとし生けるもの全ての命を奪い取り、その要因は護人の紛い物・・・」

第四十七話 哀れ

この時点で双輝には嫌な予感しかしていなかった。玩愉ですら穢
の衰退を止めることは出来なかった。それを起こした護人の紛い
物。果してそれが何であるかなど、穢は語っていなかった。それ
でも、その嫌な予感がしたのは護人としての勘か、過去に縛られた
虞れなのかは誰にもわからない。

その日の夜、思いがけない二人の来客に双輝は硬直せざるを得な
かった。

「玩愉とトキ君と一緒に来るなんて！仲良くなったの？」

「いや、表で会っ」

「元々悪い訳じゃねえよ」

トキの言葉を遮って玩愉が言い放つ。トキはそれに押し負けて黙っ
た。双輝はトキ、四季神の登場に顔を引き攣らせていた。

「何用・・・でしょう？」

やっとの事で言えたそれは、銀葉からしてみれば笑えるくらい小さ
い声だった。

「ああ、この雨のことで少しね」

トキがため息混じりにさういうと、玩愉は穢へ一度目を動かした。
双輝は、穢から聞いた話を二人にする。

話を聞いたのち、玩愉は小さく笑った程度だった。トキはという
と考え込んで喋ることをしなくなった。この空気で双輝に何をしろ
という。銀葉はあっけらかんとして双輝と同じように固まっている
クレハで遊んでいる。

「護人の紛い物って・・・？」

やっとのことでトキが言葉を放った。双輝にもそれが何を指してい
るのかわからないけれど、胸の奥できりきりと双輝を締め付けてく
る何かがあることは確かだ。

「紛い物は紛い物さ。護人になりきれなかった哀れな人間さ」

玩愉の言い草。何かを知っているようにしか双輝には聞こえなかった。穉瑳は玩愉がこのことを知らないといったが、どう考えても何かを知っている。それとも、穉瑳の話を聞いてから頭をよぎったものがあつたのか。

トキが不服そうな表情でせせら笑っている玩愉を睨む。しかし、玩愉がその視線に帰すようにトキを見るとトキはすぐに目を外した。それを見た玩愉が小さな声で「腰抜けめ」と言ったような気がしたが、聞こえなかったことにする。

「哀れな人間……っていったい？」

「そのくらい自分で考えろ……と、言いたいところだが、穉瑳を置いてもらっている手前だ。教えてやるか」

双輝の質問に答える玩愉。妖怪相手に質疑は本当に駆け引きの様なものだからその点、玩愉が穉瑳をここにおいてくれて本当に良かったと思う双輝だった。

護人としての力は有しているが、護人には成り切れなかったニセモノ。それが哀れな人間。

「成り切れなかった、というには語弊があるように思えるけど」

突然ずっと黙っていたトキが口を開いた。玩愉は相変わらず楽しそうに笑っているが、双輝としては実に苦しい状況。緊張し過ぎて心臓が破裂しそうなくらいだった。その様子を見た銀葉は、クスリと笑った後、ふと思ひ出したことがあつた。今の空気を考えず、銀葉は質問を述べる。

「双輝ってトキ君に会ったことあるんだよね？ どうして顔を知らないの？」

「と、唐突なこと聞くね……」

困った表情で笑いを浮かべた双輝に少しでも申し訳ない気分になったが、玩愉の表情で悲しさまで込み上げた。

「お前、馬鹿か？」

「そんな言い方!!」

玩愉の放つ冷たい言葉に口を尖らせて文句を言う。その様子を見て

いたトキが少し楽しそうに笑ったのを見て、玩愉が追い込む。

「ほう、笑えるのか？」

「いや・・・」

「そんな意地悪ない方しくつてもいいじゃない！トキくんだっていろいろ大変な思いをしているんだから！」

玩愉の言い草に腹を立てて文句を言う。トキはそれをなだめるように銀葉に笑いかける。

第四十八話 やる気

そんな様子を見ていた双輝の思うところ。

「場違いなのは俺だけか・・・？」

「いや、双輝。俺らもだ・・・」

双輝の小さな独り言を聞き取って四季剣たちが頷きながら代表してガスィが双輝の肩を叩いた。

渋々といった様子で双輝は銀葉の質問に答えた。

「会ったといっても、直接会ったのは俺の父で、俺は横で見ていただけだったんだよ」

当時の双輝からしてみれば、四季神とは、顔を合わせるのもおこがましいと思えるほど大きな存在だった。そんな四季神を前に、頭を上げることは出来なかった。よって、会ったといっても顔まで見た訳ではなかったようだ。

さもどうでもいいといったげな玩愉を気にしながら双輝は早口にそれを説明すると玩愉たちの話に戻すことにした。

雨だ。この雨を晴らすことがまず最優先。しかし、玩愉はどこか乗り気ではないようだった。やる気が無い、といっても悪くない。何とかするべきだといっている割には何とかしようとしめない。銀葉にはその態度がどうにも気にかかった。

「玩愉、やる気あるの？」

「あ？」

銀葉がふっと聞いた質問に、怒りを混ぜて返答した。相変わらず、玩愉が強く睨むと怯んでしまう。玩愉の眼光。しかし、これで引いてしまつては、負けてしまうので嫌だった。負けず嫌いは銀葉の真骨頂でもある。

「なんかさっきから、何とかしろの一点張りのような気がしてさ。押し付けようとしていない？」

「当たり前だろ」

そうきたか！当たり前と言ったか！

腹がたった銀葉だが、双輝達の手前、何とか怒りを押さえて玩愉に齒向かう。その様子をどこか楽しそうに観察するトキと止めるべきか放っておくべきか、葛藤している双輝が見ていた。四季剣は双輝の意志が固まるのを待っただけだった。

「なにそれ！自分勝手じゃない？！穉瑳ちゃんをここにおいているし・・・」

「情報をくれてやってるだろう。それでチャラだ」

「はあ?!」

決意の固まった双輝が動いたので、四季剣達も腰を上げる。

今にも玩愉につかみ掛かりそうな銀葉を後ろからヒコウが羽交い締めにして前から肩を押さえて双輝が宥める。ガスいとスイセツは玩愉の動きを警戒してクレハは全体的な動きを見ていつでもどの方向にでも跳べるように構えをとる。双輝にしては女性である銀葉がここまでの暴言を吐いていることに驚きと戸惑いを隠せず、苦笑いを浮かべる始末となった。

何とか宥めた銀葉へ笑みを送りながら、話の主導権を握るべきだと判断した。そんな折に玩愉が銀葉へ挑発するように笑いかける。

「相手は護人だろう？俺には関係ねえ」

言い切った玩愉に再び銀葉が破壊行動に出ようとしたのを四季剣達に止めさせて、双輝は玩愉にあまり挑発しないように伝える。玩愉は相変わらずの笑みを浮かべる。

「護人の問題は護人で片付けろ。俺達妖怪を巻き込むな」

これは双輝に向けて言っていた。双輝はそれを言った玩愉の瞳に一瞬時を盗まれた。はっとして慌てて玩愉のそれから目を外し荒れた心臓を抑える。

「なにそれ!!!巻き込むなって!そもそも妖怪を倒すのが護人の仕事なんでしょ?!だったらこの雨だって妖怪を倒すためにやっているんじゃないの!?関係ない訳無いじゃん!」

「ふん。この地の事を何も知らない餓鬼風情が物言ってるんじゃないねえ

よ」

圧してくる玩愉の言葉に銀葉は一瞬尻込みする。それでも、その無責任な感じが許せなかった。穉さが衰退し弱ってしまっている。その原因をまるっきり人任せにしようとしているその態度に腹が立った。

「餓鬼って何よ！そんなに子供じゃな・・・」

「銀葉、これ以上はよしな」

止めたのはトキだった。

「トキくん・・・！」

「玩愉も玩愉だ。どこか大人げない」

「はん！お前に言われたくねえな」

その言葉を得てトキは一瞬、視線を下に落とした。それから再び目をあげて玩愉を睨む。

「確かにそうかもしれない。でも、この子は本当に何も知らないんだ。仕方ないだろう。まったく別の・・・」

「知っているさ。ここじゃない別の世界だろう？だが、そんなことどうでもいい。知らないなら知らないなりに黙っていればいい。余計な口出しをしているのはこの地のことをよく知っているやつだろう」

玩愉とトキの視線が交差する。一步も引かないその眼光にさすがの銀葉も身を縮めた。

第四十九話 逃亡

慌ただしく焦りの日々が数日。つまり嫌な雨がもう何日も降り続けていた。そんな折、双輝の家に飛び込んできた村の人がいた。

「双輝！大変だ！四季神様が封じた相杵が逃げ出した！」

それは予期せぬ出来事。そしてこれからの出来事の幕開けだった。傘をさして双輝は走った。四季神が張った結界はかなり丈夫なもので強固なはず。それを相杵程度の力で打ち破ることは不可能なはず。だとするとこの雨の影響だろう。このところ、ずっと振り続けている雨。そしてこの雨は妖怪の力を衰退させた。もしかしたら衰退させるのは妖怪だけではないのかもしれない。そう思ったら急激な不安がこみ上げる。一度、走るのをやめて一緒に連れていたガスイとヒコウを見て、ガスイを選び村に戻るように指示をした。

「この雨は予想以上に危険だ。村の者にこの雨の中で歩かないように伝えてくれ。それと、くれぐれも、ガスイ。お前もこの雨に打たれるなよ」

「了解」

ガスイは村へ向かって走り始めた。ヒコウは双輝の横でそんなガスイの背を見送っていた。

「さあ、探そう、ヒコウ」

ヒコウはただ頷いた。

地面にたまった水がはねて裾を汚す。そんなことをかまう様子もなく双輝は走り続ける。妖怪の森の中を奔走する。ヒコウが相杵の四季剣の気配を追ってここまで来たのだが、肝心なところで気配が消えてしまった。そして、その気配が消えたと同時にもう一つ、気配がないことに今気づき足を止める。

「玩愉が・・・いない？」

「避難するって言っていたじゃないか。だから・・・」

「そんなすぐに気配の消せる場所があるのか？」

「知らないよ」

双輝は深呼吸を一度すると再び相杵を探すために走り出す。

人が倒れているのを発見したのは森に入っただけで、以前ほどの力を持っていた。あわてて駆け寄ると相杵ではあったが、以前ほどの力は持っておらず、それどころか生きているのか不安になるほど弱っていた。双輝は急いで相杵を背負うと村に向かって一直線に走りだした。その後ろを走るヒコウが双輝に言葉を送る。

「それ、スイセツが見たらキレルよ」

「わかっている。だからおいできたんだ」

ヒコウとて、怒りがわからないわけではない。己のもっとも崇拜する主を傷つけ嘲笑った相杵をどうして許すことが出来よう。そしてそんな相杵ですら救おうとする我が主に嘆きを覚えずにはいられまい。

第五十話 滅び

村についた時には雨の勢いが増しているような気がした。相杵を屋内に入れて、その小屋に結界を張る。トキほど強固なものではないが、最早それは必要ない。相杵にこの雨の影響を最小限にするためだけのものだ。以前よりも簾れ、皮膚の色も土気色になっていた。髪も白髪が混ざり、この数日で一気に老け込んでまるで老人のようだった。

「生気を吸い取られたみたいだ・・・」

村のものが相杵をみて言った。確かにその通りだった。生きることの気力を感じさせない。まるで息のある人形のように。一体何があったのか、聞こうにも聞ける状態ではない。

「きた・・・きたんだ・・・このちが・・・ほろびる・・・とき」

虚ろな目で相杵が言った。双輝とヒコウは耳を疑った。この地が滅びる？ そんなことあってはならない。あって良い訳がない。

「おいっ！ それどういう事だ？ おい！」

双輝の呼び掛けには一切応じない。目を見開いてただ同じ事を繰り返して言っていた。双輝は仕方なく立ち上がった。そして、その小屋を出た。

帰ってきた双輝の顔色はひどく悪かった。そしてこの地が危機に瀕していることを聞く。それからガスイにたえず銀葉のそばにいるよう指示していた。ガスイはそれを頷きだけで返事していた。一体これから何が起こるのか。それがわからない故に焦りは駆け足で近寄って来る。不安は耳元で囁いて来る。

村に悲鳴が上がった。双輝は慌てて家を飛び出して行った。銀葉も追おうとしたがガスイに止められた。

「双輝が心配じゃないの！？」

「俺は双輝の四季剣だ！ 心配しない訳無いだろう！ それでも、双輝が銀葉を守れって伝った！ 危険な行為はさせられない！」

悲痛なガスイの叫びに銀葉は負けた。他の四季剣達は双輝について行っている。この家にはガスイと銀葉しかない。銀葉は何とも切ない気分になった。こちらの世界からして見れば、自分は勝手に来て勝手に居座って。そして大切な主を傷つけて。それなのにこの世界に何も貢献できていない。それがもどかしくて悔しかった。

「あっ、おい！」

「大丈夫。窓際まで」

「大丈夫なもんかっての・・・」

呆れたように銀葉のあとにつくガスイだった。銀葉はそれを横目で確認しながら窓から外の様子を覗き込んだ。

第五十一話 再会

悲鳴を聞いてそこに駆け付けた双輝はその現状に震えた。急いで怪我人を抱え、四季剣達にも手伝うように言ってその場で動けずにいるものを運んだ。

双輝の見た風景は、あちこちに倒れた村の人々。ぱっと見では半分が怪我で倒れ、残りはどうして倒れているのか見た目だけではわからなかった。しかし、双輝が焦ったのは何もそういうことではない。悲鳴が上がってからすぐに駆け付けたにもかかわらず、この状況の元凶がない。どこにも。

「今はいい……。とにかく皆を運んで！この雨に打たせつづけるわけにはいかない」

双輝の言葉に四季剣達が反応し急いで人を運ぶ。

倒れた人達をなんとかして屋内に入れると双輝は外を確認するために扉を開けた。その先には、雨に打たれて立っている男が一人いた。双輝はその男を見て目を疑った。小さな声が漏れると同時に全身が小さく震えた。漏れた声を聞き取って男はゆっくりと双輝の方へ顔を向けた。双輝を視界に入れてか、男はゆっくりとそして不気味に笑みを浮かべた。

「霍……忌……？」

窓から覗き込むと、この雨の中佇んでいるものがいたことに、銀葉は驚いた。双輝があればほど雨に打たれるなどといったのに、傘もささず立っている。赤褐色の髪が雨に濡れている。そこへ、家の中から様子を見るため双輝が出てきた。銀葉はこれで一安心だと思った矢先、双輝はその男に屋内へ行くように指示した様子はなかった。むしろ固まってしまっ言葉が発せずにいるようにすら見えた。男が双輝の方へ向いた。細かい表情までは見えないが、双輝の様子があからさまにおかしいことだけは理解できた。

「ガスィ・・・何か、双輝が変だよ？」

「え？」

足元で座っていたガスィが腰を上げて窓の外を見た。するとガスィも表情を凍らせた。

「霍忌・・・！」

「えっ！？あの人が！？」

銀葉の言葉はガスィにはあまり届いていないようだった。

焦げ茶色の瞳が楽しそうに歪んだ。双輝は全身の血が止まり凍りつくような感覚に陥った。

「双輝？どうしたの？」

クレハが後ろから双輝を押した。そしてクレハの瞳に霍忌を写して青ざめるのがみえた。そんなクレハの様子を悟って奥からヒコウとスイセツがドアに近寄ってきた。クレハはバネのように跳びはねてスイセツへ飛び込んだ。

「なんだ、クレハ」

「いやっ・・・！あの！お、奥で倒れた人達の様子を見ていよう！」

クレハが焦ってスイセツを戻そうとした。ヒコウはそんなクレハと双輝の背を見比べた。そしてそっと双輝の背を叩く。

「スイセツを奥へ・・・」

「え？」

双輝すらスイセツを押さえようとしている理由を探るべく、先程から一切動かない双輝の視線の先を見て合点がいった。

あの日の惨劇後、初めて顕現したスイセツと他の四季剣達は交流した。その際はひどく不安定な己の主の身を案じていた。何があったのかは話してくれなかったが、霍忌がいなくなったことを聞いた。その霍忌が原因で双輝の精神が不安定になったということは、言わずともわかった。スイセツは実際にその場を見ているせいか、霍忌に対する敵意は計り知れないものだった。

だからこそ、今スイセツを霍忌に会わせる訳にはいかない。ただ

でさえ相柄の事で堪忍袋の緒が切れたというのに霍忌に会ったらどうなることか想像も出来なかった。スイセツは双輝の命で奥に行くように言われた以上、それに従わないわけにはいかない。どこか殺気御もった目で扉の向こうを睨みながらクレハと奥へ行った。

第五十二話 過去のキヲク

ヒコウは双輝の横についた。ヒコウからしてみればこの霍忌という男が一体何をしたか全く知り得ていない。双輝に聞こうにも傷口をえぐり兼ねないために聞くのは控えていた。しかし、今の双輝の様子を見るに、霍忌は生半可な存在ではないことが見て取れた。

「双輝・・・霍忌、だよな？」

「・・・そうだ」

苦しそうに答える双輝の表情にヒコウは嫌な予感がして堪らなかった。

長いこと雨に打たれた赤褐色の髪が顔に張り付く。それでもそんなことを全く気にせずただ、扉の向こうに現れた過去の遺物に笑みを送った。

「久しいね、双輝」

笑いかけてきた霍忌に返そうにも言葉が出なかった。そんな双輝の様子を見て霍忌はさらに笑みを深めた。

「おやおや。言葉が詰まっているようだよ。大丈夫か？昔と相も変わらず護られて過ごしているのか？」

「そんなことっ・・・」

「違うのか？この土地は妖怪と四季神の森に挟まれて存在している。護られているんだらう？四季神と・・・妖怪にも」

仮にも護人が、四季神を呼び捨てとは、双輝は手に力を込めた。いや最早そんなことはとやかくいうことではない。双輝にとっての消し難い過去のキヲク。

「何故？何のためにここへ？」

「ふふふ。また温いこと言っているのな。言っただろう、さつき」
霍忌は笑う。感情の籠っていない冷たい瞳で冷ややかに。霍忌は目的など一言も言っていなかったはずだと、双輝は会話を呼び起こす。しかしやはりそれらしい会話はなかった。

「全く何を聞いていたのやら。この土地は妖怪と四季神の森に挟まれて存在している、と言ったねえ」

双輝は全身に悪寒が走った。

「まさか・・・四季神様を・・・？」

霍忌の笑みが本格的に凍てついた。

「以前は力が及ばず失敗したから今度こそ、ってね」

まるでゲームに失敗した子供みたいな言い草だった。双輝はついに家から飛び出した。ヒコウを構えて霍忌に向かう。

「そんなことして何になる！この世の均衡が崩れるだけだろう！」

「わかっていないじゃないか。そうしてこの世界を混沌へと導く。足掻き苦しむのは人間だ。妖怪が暴走し食い殺され、巫女は死に絶え・」

「霍忌！何を言っているのかわかっているのか！？」

双輝の叫び声に霍忌は表情を無にした。まるで人形のような何も無いその表情に冷や汗が出る。

「双輝、あんたなら平気だろ」

ヒコウの声が頭に響く。ただどこことなくその声が遠く思えたのは何故かまだ考える余裕がなかった。

第五十三話 勝敗強弱

構えたまま霍忌と同じように雨に打たれる。霍忌は今だに構える姿勢は見せない。内心双輝は自分の事など無視して四季神の方へ行くのではないかと思っていた。何せ過去に一度敗れている。そんな弱いと判断した相手と剣を交えようとするだろうか。

「さて、と」

双輝の思考とは裏腹に霍忌はどうやら双輝とやり合う気があるようだった。四季剣、とはとても思えない禍禍しい気配を放つ剣をどこからともなく取り出した。本来の四季剣ならその大元となる『物体』が存在する。その物体から四季剣を作り出す。双輝ならガスイやヒコウにクレハ、スイセツといった人型を成したものの。相杵はビー玉のようなもの。そういったものを霍忌は手の内にも周りにも有してはいなかった。最早霍忌は護人とは全く異なった違う力を得てしまっているのかもしれない。

「俺とやりあうつもりがあるのか・・・？」

「なんだ、それ？俺がやらないと思ったのか？」

双輝は俯いた。霍忌という人間の力がどれほどあるのか双輝には計り知れない。だから出来ることならば戦うことはしたくない。かといってこの場を放り投げてしまつては四季神、トキの存在に危機が及ぶ。ここで止めることができるのなら止めるべきだ。しかし、霍忌が強いということは幼い時からわかつていることだし、今は知れないが昔の自分で考えれば到底霍忌に勝てる力は持っていない。

「人と戦うことに興味でもあるのか？」

「ないね。弱い奴に興味はないし、雑魚を斬つたところで俺の剣が錆びるだけだ」

霍忌はこげ茶色の瞳をゆがませる。その瞳に写すは双輝。かつて友として生活をしていた存在。

「なぜ俺と戦おうとする？戦意を示したからか？」

「・・・何か勘違いでもしているのか？言ったはずだ。俺は弱い奴に興味はないって」

「勘違いをしているのは霍忌の方だろう？俺は一度霍忌に負けている。弱いとは思わないのか？」

「まけ？」

殺気の籠った言葉に双輝は身を構えなおす。圧力をかけるような重たい空気が双輝の全身に降りかかる。冷や汗の様なものを感じながら双輝はヒコウを握りしめる。そこでやっと気づいた。さっきからヒコウの言葉が一切聞こえない。それだけではない。息遣いすら聞くことができない。そのことに対する恐怖心が双輝を襲う。そんな双輝の心情を知らずか霍忌は言葉を続ける。

「あの時負けたのは俺の方だよ、双輝」

「・・・は？」

思いもかけない言葉に双輝は一時ヒコウのことを忘れた。

「俺はあの時、双輝を殺すつもりで刀を振った。しかしだ。お前は冬の四季剣を顕現させた挙句、俺に退却をさせた。まあ、万全ではなかったと言うのは言い訳だがな」

刀を振り回すように持ちながら霍忌が語る。その全てがまるで嘘のようで双輝はわが耳を疑った。霍忌はさらに続ける。

「俺は確かに四季神を潰しに来た。そしてこちら辺では最も強いだろう妖怪も。いや、本当なら妖怪の方は手を出すつもりはないんだけど。過去のこととちよつとあるからそいつだけは消す。でも今いないな。消えたか？まあいいけど」

刀を肩にかけて目線を少し横に流してにこやかな表情で霍忌が言った。

「ま、とにかくだ。俺はここを潰しに来た。ただ、それと同時に双輝。お前とも戦うためにわざわざここに出向いたんだ。四季神を潰すのならどこだってできるがお前をやるにはここしかないだろう？」

霍忌の言葉一つ一つが双輝にとっては信じられないものだった。簡

単に人を傷つけ妖怪を侮蔑し、さらには四季神すらもその存在を簡単にぞんざいな扱いをしている。本当にこれが昔共に遊んでいた人間なのかと思うと身が震えた。

「つまりは・・・俺を・・・？」

「そうだ。お前を抹殺することがここへ来た理由」

もう、昔の霍忌ではない。そんなこと、あの時からわかっていたはずだった。それなのにどこか悔しくてそして悲しかった。

「なあ、ヒコウ・・・」

返事はない。そのことで双輝はやっとさっきからヒコウと対話ができていることを思い出した。その様子を悟ってか、霍忌が笑った。「どうした？ 四季剣と会話できなくて嘆いているのか？ あの時と同じだろう。俺の能力。すべての力を無に帰する。この雨も、な」

「・・・やはりこの雨は霍忌が・・・」

見下すような笑みを浮かべた霍忌に愕然とする双輝。あの幼少期とは異なり今では随分と鍛錬をして助言なしでそれなりに戦うことができるが、四季剣とその主は一心同体。それを切り離してはならない。

第五十四話 開戦

禍々しい刀がぶんと降られる。双輝はヒコウを構える。気持ちが不安定になっていることが自覚できた。それでも、刀を振るわなければ負けてしまう。守らなければならないものを守ることができない。双輝は勢いよく前へ踏み込む。そしてそのまま刀を横へ振り、相手の切り返しを待たずに刀を持ち替え振り上げる。その振り上げた刀が霍忌の腹部を切りつける。互いに後ろに飛び跳ね距離をとった。

「ほら。斬れるだろう。俺はそう簡単には斬れないはずなんだよ。それがこの通りさ。それでも・・・まあ、この程度か。これだとお前、俺に殺されるぞ。いいのか？」

「・・・良い訳ないだろう。俺がここで負けたら俺の背負っているもののすべてが壊れてしまう」

双輝の昔にたてた信念。それは今で変わってなどいない。そしてきつとこれからも変わらない。霍忌の顔から笑みが消えた。そしてゆっくりと双輝の方へ歩み寄ってきた。刀を構え、霍忌は双輝に向かって刀を振り下ろした。それから間髪入れずに振り上げる。双輝は刀でそれを受け流しながら霍忌へ刀を向ける。しかし、その刀を手が斬れることも厭わず霍忌は驚掴みにした。驚いた双輝のことなどかまわず顔面にめがけて己の刀を突き刺す。

「な・・・!？」

ぎりぎりまで体をひねってそれをかわした双輝は刀をつかんでいる霍忌の手を蹴り飛ばして霍忌から離れるべく空を舞った。地面に着地して霍忌のいた方へ眼をやる。しかしそこに霍忌はいない。

「どこに・・・」

ふと、後ろに殺気を感じる。慌てて刀を頭の上に持っていく。すぐ後ろで霍忌が刀を振り下ろしてきた。またもぎりぎりですれを受け止めた双輝はすでに大きく息が上がっていた。

刀を弾き返し距離を取る。

「どうしてそこまでこの世界を壊そうとしている?!」

「どうして? つまらんことを聞くな。面白いからだよ。人々が恐怖に慄き震えるさまを見るのがね」

双輝は黙った。持っているはずのヒコウの存在を感じることができないのが怖かった。しかしそれ以上に人の心を何とも思っていないような霍忌が恐ろしかった。

急に霍忌が踏み込む。驚いて何とかしえ刀でその攻撃を防いだ・
・が。双輝は胸に刀が突き刺さるのを感じた。

「がは・・・」

引き抜かれた際に声が漏れた。胸を押さえて膝を折る双輝。その様子を見下ろす霍忌。

窓の様子を見ていた銀葉は言葉を失った。何か会話をしてる風な二人だったが、急に霍忌が双輝に刀を向けた。それに敏感に反応して刀で防いだはずだったのに。霍忌の刀は見事に双輝の刀を貫通して双輝に突き刺さった。手から落とした刀は刀身が折れてしまっていた。

「ヒコウ!」

銀葉は窓を叩いた。自分はこの家から出るべきではない。そのくらいはわかっている。出るだけ自分は足手まといになるだけ。そんな自分が悔しくて腹が立って。あまりの自分の無力さに涙すら出てきた。

「・・・大丈夫、銀葉。俺たち四季剣はそんなに脆くない。双輝さえ、主さえしっかりとした心を持ってくればいつでも再生はできる。時間がかかっても・・・」

必死で平静を保っているように話すガスイだったが、声が震えているのであまり意味を成してはいなかった。銀葉はそれを聞いて少しだけ安心した。でもそれでも少しだけだ。なんたって双輝自身が、刀で突き刺されてしまっているのだから。辛くて悲しくて悔しくて銀葉の涙は止まらない。そんな銀葉の涙をガスイがそっと拭ってく

れた。きっとガスイも今すぐに双輝の元へ走っていきたくて決まっている。なのに。それをしない。

「ガスイ……。双輝のところへ行くべきだよ。主の命令より主そのものが守るべきなんだろう？」

銀葉は震える声で言う。しかし、ガスイは首を横に振った。

「確かにそうだ。でも、もし俺がここを離れて銀葉に何かがあたらそれこそ双輝の心に傷ができる。それは……。きっと簡単には治らない」

ガスイの言葉は銀葉と同じように震えていた。しかしそれでもはつきりとして力のある声だった。銀葉は俯いた。ここで泣いていても何の意味もない。自分には何かできることはないのだろうか。玩愉が護人の力も巫女の力もあると言ったのに。銀葉はぐっと手に力を込める。

第五十五話 揺

むせる様に双輝は息をする。肺が傷付いたのか呼吸が至極苦しい。こんな状態では確実に霍忌にとどめを刺される。

「つまらない。あの時俺を撤退させたお前はこんな程度にしか進化できていないのか？正直失望だよ、双輝」

刀をカラカラ地面にこすりながら霍忌が言う。双輝はそれに何も答えることができない。結局。どんなに鍛錬をしたところで守られるだけの自分には守る力など持っていないのだろうか。

「お前は十分守る力を持っている！」

雨を割るように響いた声。普段では考えられないほどの大きな声。ぼうつとする意識の中、スイセツを目に移した。見たところ、クレハがいないのできつとガスイの方へ走っていったのだと推察した。

―ああ、やっぱりスイセツに護られるんだな

双輝は自分でも思考が弱っていることを自覚しながらそんなことを思った。折れたヒコウを確認しつつ、スイセツは双輝に駆け寄った。

「この雨の中ではお前らは無力・・・ん？」

雨が弱まった。双輝もかすかにそれに気づく。それと同時に霍忌が舌打ちをした。

「四季神か。大した力を持っているもんだな」

空を仰いでいるうちに雨はどんどん少なくなっていた。ついには完全に雨はやみ、空は曇天となっていた。呼吸を苦しながらも双輝は何とかして立ち上がろうとした。ただ、斬られた部位があまり良いところではなかったらしく、動いたたびに呼吸が苦しくなって頭がぼうつとした。スイセツが双輝を支えた。

ガスイは今、とにかく必死だった。クレハも同じように必死だった。

「落ち着け！気持ちはわかるけど、銀葉に何ができるんだよ！？」
「わからないけどこんなところでじっとして双輝が苦しんでいるの

に何もできないでいるなんて嫌！」

銀葉は外へ通ずる扉に向かって体を進めようとしている。それを必死になって抑えるガスィ。ちょうど、戻ってきたクレハもそれに参戦して抑える。

「銀葉！落ち着いてよ！」

クレハも叫び声をあげる。銀葉の心の中が至極もやもやしていた。苦しくてもどかしくて。それからあと、とてつもない悲しい気持ち。この悲しい気持ちは正直銀葉にもわからない。どうしてこんなに悲しい気持ちになるのか理解できない。それでもその悲しさが銀葉を突き動かした。

「離して！私！何もできずにじっとしているなんてダメだと思う！」

「ダメって！じゃあ、何ができるんだよ！？」

「そうだよ！銀葉！たえてよう！」

二つの四季剣が全力で銀葉を止める。銀葉は仕方なく全身の力を抜いた。ガスィもクレハもやっと諦めたのかとため息をついた・・・直後、銀葉が尋常ではない速さで扉へ突っ走った。

「マジかよ?!」

「はやすぎ！」

ガスィとクレハは急いで銀葉の後を追ったが、予想外の銀葉の行動に出遅れて結局銀葉をつかめることはできずに外に出ることを許してしまった。

胸を押さえて苦しく呼吸する。スイセツがガスィを連れて来るといったが、双輝はそれを否定した。

「駄目だ・・・。感覚だが、霍忌の刀傷を四季剣では治せない。それにこの傷ではガスィも扱えない」

その言葉の力をスイセツは痛感する。主が傷ついてしまったら何も出来ない。そんな無力さを感じて途方もない感覚に陥る。動けなくなっている双輝を見て霍忌は相変わらざる無表情でその目の冷たさが心に鉛を落とす。双輝の心が揺れ動く。こんな状態になってしまったし、霍忌にら勝てないかもしれないと。

「双輝っ！」

耳に響いた声。それにはっとして振り返る。慌てた様子のがスイとクレハが走っている。その先に銀葉が仁王立ちのようにして構えていた。

「しろ・・・は？！何を・・・」

「私っ！ここにきて沢山双輝達に助けてもらった！護られてきた！でも、だからこそ！今役に立ちたい！何が出来るかなんてわからないけど！それでも足掻きたい！」

折れかけた心に響く銀葉の声。双輝は苦しいながらも、何とかして肺に空気を入れる。意識して取り入れた空気が脳に染み渡る。

「私！双輝を信じる！それと・・・自分を信じる！」

銀葉は手に力を入れる。今までにやったことないほど、その手に集中する。きつと出来る。自分の力を信じて。

「銀葉・・・」

銀葉のしようとしていることを察してがスイは一步踏み込み、銀葉のその集中している手に自分の手を重ねる。

「がスイ・・・？」

「俺も手伝う。力自体を受け渡すことは無意味だけど、銀葉の誘導にはなれる」

がスイの目を見て、この世界を、四季神を。そして何より主を・・・。一心に守りたいと思う心を感じた。銀葉は大きく頷いた。

第五十六話 鬼

普通の高校生。普通の女の子。普通の生活。普通の人生。普通、普通、普通。そんな中でずっと生きてきた銀葉に今すぐ、みんなみたいな魔法のような力が使えるなんて、思う訳がない。それでも、きっと出来ると信じている。右手に感じる人の温度とはとても思えない熱いもの。ガスイの手。きっとこれが誘導なのだろう。力を感じて銀葉は強く結んでいた瞳を開ける。握りしめている右手が桃色の光りを放っている。

「後は、双輝を想え。心から。そうすれば絶対に外れない。最後まで信じきって」

ガスイに言われる。銀葉は再び大きく頷いた。右手を前にだして気持ちの一つにする。まず、大事なことは何か。

—双輝の傷を少しでも癒したい。

銀葉は勢いよく双輝に向かって光りを投げつける。

銀葉から飛んできた光の塊。それを身に受けて双輝はいつきに酸素が身体に染み渡るのを感じた。傷口が治った訳ではない。それでも流れ出る血は止まった。双輝は銀葉を見る。膝について大きく息をしている。ガスイとクレハがいるから問題ないだろう。ゆっくりと立ち上がって霍忌を睨む。

「双輝！その人、霍忌って人じゃない！」

「え？」

いきなりした銀葉の荒れた大声に耳を奪われる。霍忌のほうもさすがにその言葉には目を細めた。

銀葉の中でずっと流れつづける深い悲しみ。家を飛び出るまでそれが何なのかわからなかった。でもひざまづいている双輝を見て、見下すように立っている霍忌を見て。やっと何なのかわかった。心が伝わる。伝わってくるのだ。

—君はわかるか？助けてほしい。救い出してほしい

切実な声が頭と心に響く。これが悲しみの要因、霍忌という人間の心そのものだ。

銀葉は叫ぶ。どういう詳細かは知らない。それでも、目の前にいる霍忌は、霍忌であって霍忌ではない。何か別の大きなものが霍忌の心を追放した。たえず救ってくれる者が現れるのを待ち叫び続けていた。その叫び声を代弁して銀葉も叫んだ。本当の心を。

「その人は戦いたくない！誰も傷つけたくないんだよ！」

「へえ。なあ双輝、あの女は何だ？」

理解し難い状況の中、霍忌から着た言葉に思考を働かせる。銀葉が何者であるのかは簡単には言えない。双輝は霍忌の質問を無視した。「お前こそなんだ？霍忌ではないのか？」

「ふうん。面倒なやつだなあ。まあいいか。教えてやろう」

根本的な話。四季神と妖怪、つまり人間と妖怪。この二つが断絶した理由は霍忌が起こしたものだ。いや、正確には霍忌の心を追放した大きなもの。その理由は。正体は。

「俺の本当の名は羅刹」

「羅刹！？」

双輝は声を荒げた。その瞳はひどく驚いている。銀葉は少しだけまだ息を切らしながら隣の二人に尋ねる。何をそんなに驚くことなのか。

「知らないのか？」

ガスイも驚いた表情で銀葉に目を向けた。続いてクレハが言う。

「羅刹って言うのは、この世で最も強靱とされているもので最悪とも言われているの」

クレハの語り方に違和感。まるで書物にあったものを言っているようにすら思えた。

「ほとんど公になんてされていない伝説の神だよ」

「神！？」

そんな大層なものが人を殺そうとしていいのか。銀葉は霍忌の方へ目をやる。

スイセツの肩を掴んだまま固まる双輝はやっとの事で目の前の相手の通称を口にした。

「鬼神、羅刹・・・!？」

霍忌、いや羅刹は笑みを浮かべた。今までの氷のような無表情から冷酷な笑みに。

「俺はこの土地で消したいやつが3人いる」

羅刹は突然いいはじめた。

「一人、四季神。二人、お前。三人、玩愉」

予想外の名前が盛り込まれていて双輝は耳を疑った。長きにわたりこの世界を統治してきた四季神を消したいと言うのはわかる。以前殺し損ねた自分もわかる。だがそこに何故玩愉の名が組み込まれたのか、双輝にはわからない。いや、双輝だけでは無く皆わかるまい。「あれはこの現状で今だに人間を怨んでいない。これから作る混沌の世界には邪魔な存在なんだよ」

今、玩愉はいない。それ故に少し苛立ちを覚えているようだが、そんなことはどうでもいいらしい。今この場で双輝を消し去り四季神をも消す。その後でゆったりと探せばいいと。無限な時間が存在しているから。

「無限・・・? 神とていつかは滅びるぞ!」

双輝は声を張る。羅刹はその言葉に楽しそうに反応した。

「お前、何を考えているんだ? この体が『神』か?」

「え・・・?」

「人間の体をもらえば幾らでも再生しこの世に在り続けることができる。この体が朽ちればまた別の人間の体を貰い受けるだけだ」

果ての無い転生。それが鬼神の力の一つ。

「今まで全く以ていい体に出会えなかった。人間と妖怪を断絶させるために結界を張ったが、それだけで使っていた人間の体は朽ちてしまっただけ。もろくてたまらない」

人間をまるで道具のように、おもちゃのようにしか思っていないその発言。これが鬼神と恐れ悪意の塊となったものの心なのだろうか。

「ようやく見つけた子供の体に入ったらこれまたよくてな。この霍忌という人間は俺の力に負けない肉体を持っていた。そうそうあるものではないからな。現に、封印をしてから随分と時間がかかってしまった。ようやく手に入れたこの肉体でまずはお前を。そして四季神を。最後に、あの妖怪を消し去って俺の念願は達成できるというものさ」

羅刹の冷たく言い放たれた言葉。その指すスケールの大きさが想像を絶するもので、把握するには困難だった。それでもここでこの羅刹を止めなければこの世は終わる。それだけでもわかれば刀を握る理由になる。

第五十七話 決戦

相手は霍忌の形をした化け物だ。もう、迷う必要もない。ただ斬ればいい。鬼神を。

スイセツを刀にして勢いよく前に踏み出す。突然切り掛かったので羅刹も反応が遅れていた。降りかかって羅刹の左肩を斬る。そしてそのまま振り上げる。今度は羅刹も反応し刀で防がれる。双輝は畳み掛けるように何度も刀を振るった。一度刀が大きく後ろへ弾かれた。だが、双輝は腕に力を込めて振り上げる。羅刹の右肩から出血する。羅刹は後ろへ吹っ飛んだ。刀を地面に突き刺しとんだ勢いを殺して地面に立つ。羅刹は構えて突っ込んできた。双輝は踏み込んで刀を前に出す。羅刹はそれでも勢いを止めなかった。一種運それに間を奪われる。羅刹は顔が切れることも厭わず突っ込んできた。羅刹はその勢いを失わないまま刀を双輝へ向けて突き刺してくる。

「くっ……！」

何とかかわしたがあまりの勢いとその無謀さに驚いたために右のほほを軽く斬られた。その痛みが普通ではない。かすただけでここまで痛むということはあの刀に何かがあるかそういう力を羅刹が持っているか、ということになる。

「お前、自分が斬られることも構わないのか?!」

「あん? 何言ってるんだ? これは俺じゃない。この程度の痛みなど感じないさ」

あまりの桁外れな発言に双輝は刀を握りしめる。雨のせいでぬかるんでいる地面に足がめり込む。

互いの刀が弾きあう。羅刹は勢いよく横払いに刀を振った。それかわして双輝も横払いに刀を振る。羅刹はよけようともせず腹部が大きく裂ける。その後も幾度となく刀を振る。重たい攻撃がぶつかり合う。金属音の高い音が空に響いて消えていく。互いに振り下ろした刀が衝突し力の押し合いになる。このままではらちが明かな

い。双輝は一瞬力を緩めて体制を若干崩した羅刹の体重から逃れる。後ろへ大きく下がる。羅刹は未だに笑っている。だが、このままでは本当に埒が明かないと判断したらしく持っていた刀を投げ捨てた。

「何を・・・？」

「もういい。本当ならお前をもて遊んで壊すつもりだったんだが、意外にもお前が強くなっていてね。面倒だからさっさと片を付ける」
右手を前に出して取り出した先ほどよりも数段禍々しい刀。だが、その刀には見覚えがあった。

「それは・・・霍忌の・・・？」

「ああ、そうだ。この体にはこっちの方が合うだろう？」

その刀を手にした羅刹の力が大幅に上がる。急激な力の変動で怪我の部位から血が噴き出た。

「そんな状態でやる気なのか？」

「何度も同じことを言わせるなよ、双輝。そもそも俺はそれをむしろお前に言いたい。もう一度言う。これは俺ではない。『霍忌』という人間のものだ。そんな躊躇なく斬っているのか？」

双輝はそれを聞いてわかつてはいたはずなのに。手が軽く震えた。

「双輝。何を怯えている？自分を信じろ。銀葉とて己を信じて力を開拓した。お前にだってたやすくできる。聞こえるか、双輝。あの四季剣の悲鳴」

スイセツが言う。双輝の耳に響く苦しむ雑音。

「あの悲鳴が羅刹には聞こえていない。刀と体が同じものでも心とはつながっていない。信じあわぬ者同士共に戦ってもそれは力を損なうだけだ」

「ああ。己の力しか信じない者にはそれがわからないんだ」

「双輝は、俺が信じられるか？」

「当然だろう、スイセツ。俺は全身全霊でお前を信じる。俺の魂全てをお前にかける。だから、力を貸してくれ、スイセツ」

一瞬だけ、スイセツが笑ったように思えた。持っている手から流れ

込んでくるスイセツの力と想い。双輝は肢体からその力を放出させる。羅刹が目細める。

「まだそんな力が残っているんだな」

「当然だろう。俺はスイセツの力を借りてスイセツと共に戦っている。自分一人では戦おうとしないお前にはわからないだろう」

「共に戦う？ 四季剣と、か。はん！ 刀は戦うための道具に過ぎない。共に戦うなどとは自分の腕で戦えない負け犬のセリフだろう」

互いに力が増幅していく。大丈夫だ。己を信じて。スイセツを信じて。そして、霍忌を信じて。腹部が痛み出している。先ほど銀葉が施してくれたものだがそう長くは持たないかもしれない。おそらく次の踏み込みが最後になる。双輝は心を決める。今、自分が斬らなければならぬのは何か。もうわかりきっているものだ。それだけ。それだけを斬ればいい。スイセツが力を貸してくれる。だから大丈夫。

互いにぬかるむ地面を蹴り飛ばし泥が宙を舞う。双輝は刀を振り上げる。羅刹は振り下ろす。その二つの刀が大きな力を纏ってぶつかり合った。

第五十八話 別れ

大きな爆発。あたりが泥と爆発で発生した熱で蒸発した地面の蒸気と土埃で視界が悪い。そばにいたガスイとクレハが大声で双輝の名を呼んだ。

「双輝！！」

銀葉も叫ぶ。何がどうなったのかわからない。少しずつ足を進めて双輝がいたであろう方へ歩み寄ろうとした。けれど何かが聞こえて銀葉は足を止めた。何かが聞こえた。

「・・・とう」

「え？」

後ろから聞こえたかすかな声に反応して振り向く。そこには何もいない。舞い上がる蒸気と土埃。その中で聞こえてくる声に耳を傾ける。

「ありがとう」

はっきりと聞こえた言葉。銀葉ははっとした。この声だ。ずっと銀葉の中で苦しみ悲しみもがいていたのは。

「あなたが・・・本当の霍忌？」

「ああ。色々申し訳なかった。時折拘束が解けて体から離れることができたんだけどそのたびに助けを求めて力を放出し続けていた」さっきまで喋っていた声と同じではあるが全く違うその声。柔らかくて温かみを帯びている。これが本来の霍忌の持つ声なのだろう。

「もうすぐ俺の力が解ける」

「・・・え？」

「君をこの世界に呼び寄せたのは俺なんだ。申し訳ない」予想もしない展開に銀葉は呼吸することを一瞬忘れた。

「え・・・？え？！だって『神をまつる？』みたいなことを聞きましたから・・・！」

「巫女様の力を持っているけどそれ以上に特別な力を持っていた。

それなのに、神を信じないなんて、変だなあって思った。でも口調までは操作できない。俺だって必死だったし。悪い印象を与えたならそれも含めて謝る」

信じられない事実。てっきり内心ではトキが嫌がらせで銀葉をこっちの世界に呼び寄せたのだと思っていたところだった。まさかこんなことだとは。

「俺の力、そろそろ切れてしまうんだ。だから君はここから立ち退くことになるよ」

「……え？」

それこそ予想していない言葉。確かに帰りたいたと思っていた。でもこんな急に変えることになるなんて。双輝だって今どうなっているかわからないし。

「双輝は、無事だよ。今たぶん折れたヒコウを治しているところだと思う」

霍忌の声が少し薄くなった。その違和感に気づき指摘する。

「ああ、そろそろ体に戻らないと今度は空っぽになっちゃう」

「……じゃあ、羅刹は……」

「……たぶん、双輝が斬った」

スイセツと共に。やはり双輝はすごい。心底思った。銀葉はその直後、自分のしなければいけないことを悟った。

「ちょっと、どこに行くんだ？」

走り出した銀葉に向けて放たれる霍忌の声に銀葉は走りながら叫ぶ。「言わなきゃ！双輝に！もう会えないかもしれないなら！言わないと！」

銀葉は走った。霍忌の声はもう聞こえなかった。きつと体の方に戻ったのかもしれない。蒸気と土埃が治まってきて視界がだいぶ遠くまで見えるようになってきた。そしてかがみこんでいる双輝を発見した。

「双輝！」

「ああ、銀葉！無事か？」

「うん」

「そうか、よかった」

微笑む双輝。やっと双輝のそばに来ることができた。しかしそれでやっと気づく。双輝の体の刀傷。もう双輝はボロボロだ。立っているのもやっとなのかもしれない。両脇にスイセツとヒコウが双輝を抱えて立っている。

「あれ？ヒコウ・・・？」

「何。折れたからって死ぬわけじゃないぞ。双輝がきちっとしてくれればいつでも再生できるんだから」

笑っているヒコウを見て安心した。銀葉はそれから双輝に真面目な表情で向かった。

「ごめん、双輝。私・・・大したこともできなくて」

「何を言っているのさ。俺の腹の傷を抑えてくれたのは銀葉だ。それが無かったら確実に羅刹に殺されていたよ」

暖かいその笑みに銀葉は触れたくてそっと手を伸ばした。不思議そうな顔をしている双輝に笑みを送る。双輝ほど暖かい笑みを作ることができているかは自信がなかった。

「私ね・・・どうやらもう帰らないといけなみたい」

「え？」

双輝もきつと銀葉と同じように驚いている。いや双輝だけではない。ヒコウも、そしてきつとスイセツも。やっと双輝たちを見つけて駆け付けたガスイとクレハが状況が理解できていないなりにその場の空気で何かを察したようで固まっていた。

銀葉の体がふわっと浮く。自分の体がどんどん光に包まれている。視界も狭くなってきていてどんどんぼやけていく。

「急なお別れでなんだか私嫌だよ。まだ、双輝たちと話とかしたかった」

少しだけ震えている銀葉の声。双輝がさっと手を伸ばした。そして銀葉の手を軽くつかむ。この世界で男性から女性に触れることはほとんどない。そんな世界で育った双輝が、自ら銀葉に触れようとし

たことになぜだろうか、嬉しさがこみ上げて涙がこぼれそうになる。
それでもそれを必死に耐えて銀葉は笑顔をこぼした。

「いつか、何とかして迎えに行く！約束する！」

双輝の声だけが耳の奥で木霊していた。

第五十九話 最終回

騒々しく人々が賑わっている。銀葉はその中を巫女服を着て走り抜ける。もうそろそろ舞をしなければいけない時間だというのに裏舞台に着くのが遅れてしまったからだ。何とか時間に間に合っ
て母からヒイラギの枝を受け取って配置に着く。そして曲と共に舞
いずる。

二日目の神に捧げる舞。毎月行われるお祭り。こうしよつちゅう
祭りごとをしていては色々面倒だと思ふ。それでも恒例行事だから
仕方なく舞をする銀葉。鮮やかに舞う銀葉の周りにいつもとは違っ
た空気が流れていることに気づく者は誰もいない。

はっとした。自分は社に呆然と座り込んでいた。何かをつかもう
としていたのか右手は前に出ていた。何が起きたか一瞬わからな
かった。呆然としながらもそうっと立ち上がって社の扉を開けた。変
わらぬ風景がそこにあった。

「戻って・・・きたの？」

「あら？銀葉。何をしているの？着替えが済んだのならさっさと家
に戻ってくると思っていたのに。おかしな子ね？」

笑いながら大きな段ボールを運んでいる母。

「え、お母さん。私・・・」

「何？今日の舞も綺麗だったよ。明日も頑張ってね」

「え・・・あ・・・うん」

銀葉は考えた。そしてひとつの回答。そう。向こうに言っている間
の時間がこちらでは一切経っていない。きっと、銀葉が着替えを済
ませて社を出ようとしたあの、最初の時から・・・なんの時間の変
動も起きてはいない。それだけではない。銀葉の記憶で言えば泥水
だらけのところを走って土埃と水蒸気を体に浴びたにもかかわらず
それすらも自分の体からは消えている。何も・・・残っていない。

双輝たちと過ごした証拠が何も残ってはいなかった。

こんな変なことを誰かに言えるわけもなく。仕方なく銀葉はいつも通りの生活に戻るようになった。二日目のお祭りも無事に終わって銀葉は自分の部屋で苦しいと叫ぶ心を無視して眠りについた。

高校での生活の中で銀葉は自分の心が大きく変わったことを痛感した。まあ、一番わかりやすいことを言ってしまうえば神様の存在について。良しも悪しも神は存在すること。それについてどれだけ周りの友達から言われたことか。それともう一つは。

「お前ら女子は引っ込んでろよ！」

「何それ！私らだってやるし！」

クラスの催し物の会議中の男子と女子の論争。そう。男子のレベルの低さ。こんなのと前は論争していたと考えると鼻で笑いたくなくなった。

あっちでの世界のことはひとまず忘れることにした。きっとあれは自分の見た長い夢だったんだ。現実なんかではないんだと思うことにした。そうでないと、自分が壊れてしまいそうだったから。時折枕を濡らすこともある。もう一度会いたい。ちゃんと別れを惜しみたい。いや、きっとどんなにちゃんと別れを惜しんでも悲しさはなくなるらない。かえって苦しむだけかもしれない。永遠に会うことができない悲しさ。相手が生きているのに二度と会うことのできないことに銀葉は悲しみに打ちひしがれた。

高校生活もあと少しで夏休みを迎えようとする時期手前まで来ていた。社で見た『夢』から覚めて半年ほど経っていた。学校から帰ってきて銀葉は自分の家の最大の難関、多量階段のぼりを実行していた。銀葉の家は長い階段を登った先にある。いかにも神社、という感じがする。登り切って銀葉は笑う。以前は登り切った後息を切らしていたのに今は案外楽に上ることができるようになっていく。それからもうすぐの夏休み、何をしようかと考えながら家の玄関へ向かう。

「あれ？」

もうすぐ完全な夏にしては涼しい風が吹いてきた。銀葉は立ち止まる。この風をどこか知っている。銀葉は走った。

急いでいた足を止めたのは社の前。そっと社を開ける。相変わらず神聖な空気がそこにはある。以前はわからなかったその空気に浸って銀葉は涙がこぼれそうになる。そういつたことがあるから祭り以外では社には近づかないようにしていたことを忘れていた。こぼれそうになった涙を押し殺して社を出ようと扉に手をかけた。

「え・・・？」

換気窓しかないこの社。その換気窓も今は閉まっている。なのに社の中で風が巻き起こった。そして目を覆わんばかりのまぶしい光が射した。少しの間だけ目を手で隠していた銀葉だがその光に若干慣れて手を放し銀葉は自分の目に映った光景に絶句した。そして我慢していたはずの涙が次々にあふれ出てきた。それをぬぐうことすら忘れて銀葉は手を前にでした。

「約束を果たしに来たよ。待たせてしまったね」

「ううん、そんなことないよ、双輝」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3897u/>

四季神

2011年9月15日11時08分発行